

挿絵 ● 高瀬むう

竹内けん



ハーレム
ヴァルキリー

*Harem
Valkyrie*

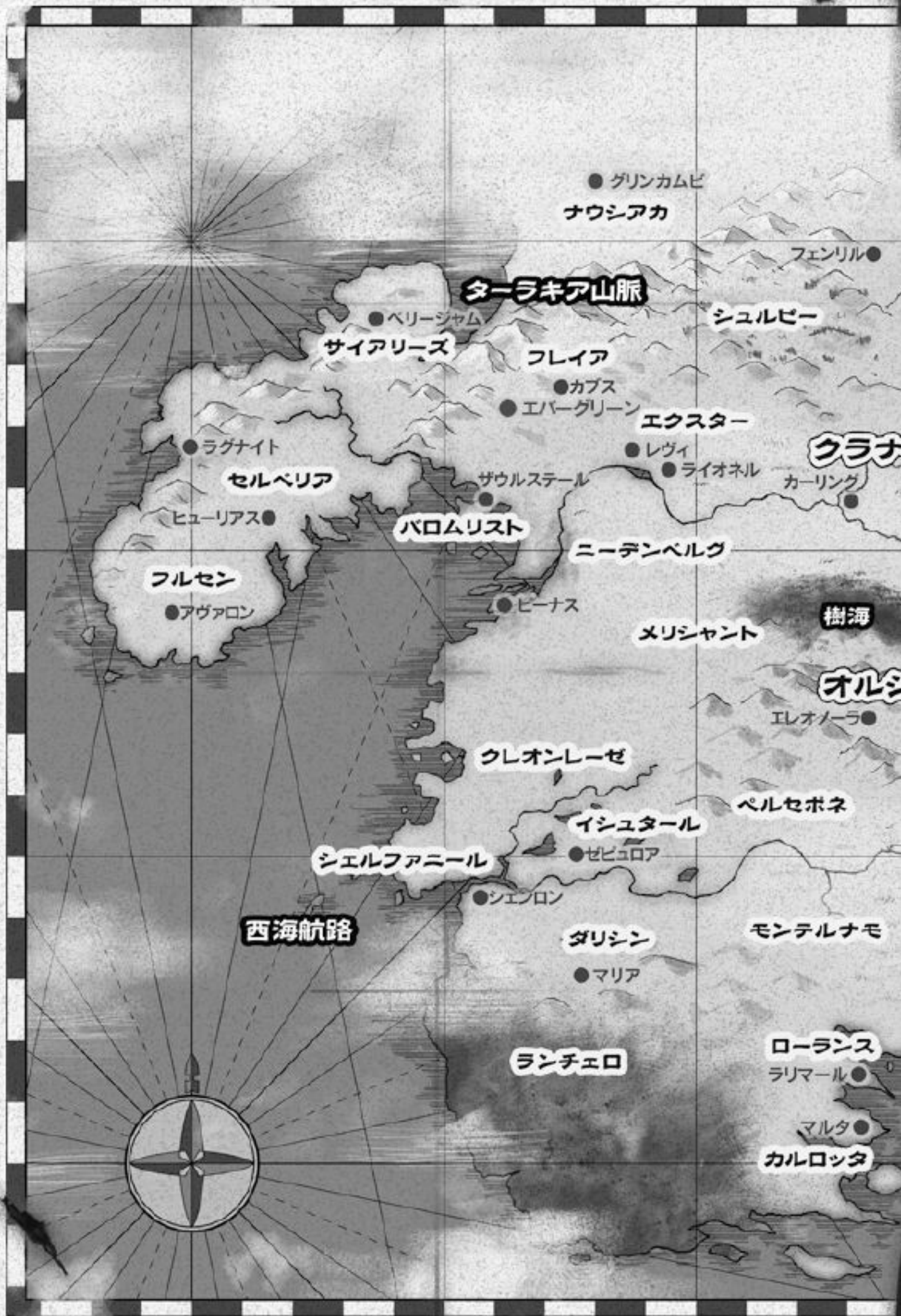




ハーレム ヴァルキリー

*Harem
Valkyrie*

小説 竹内けん 挿絵 高瀬むう



● グリンカムビ
ナウシアカ

● フェンリル

ターラキア山脈

● ベリージャム
サイアリーズ

シユルビー

フレイア

● カブス

● エバーグリーン

エクスター

● ラグナイト

セルベリア

ザウルステール

● レヴィ

● ライオネル

クラナ

カーリング

ヒューリアス

バロムリスト

ニーデンベルグ

フルセン

● アヴァロン

● ビーナス

メリシャント

樹海

オルシ

● エレオノーラ

クレオンレーゼ

ペルセボネ

イシュタール

● ゼビュロア

シエルフアニール

● シェンロン

ダリシン

モンテルナモ

● マリア

西海航路

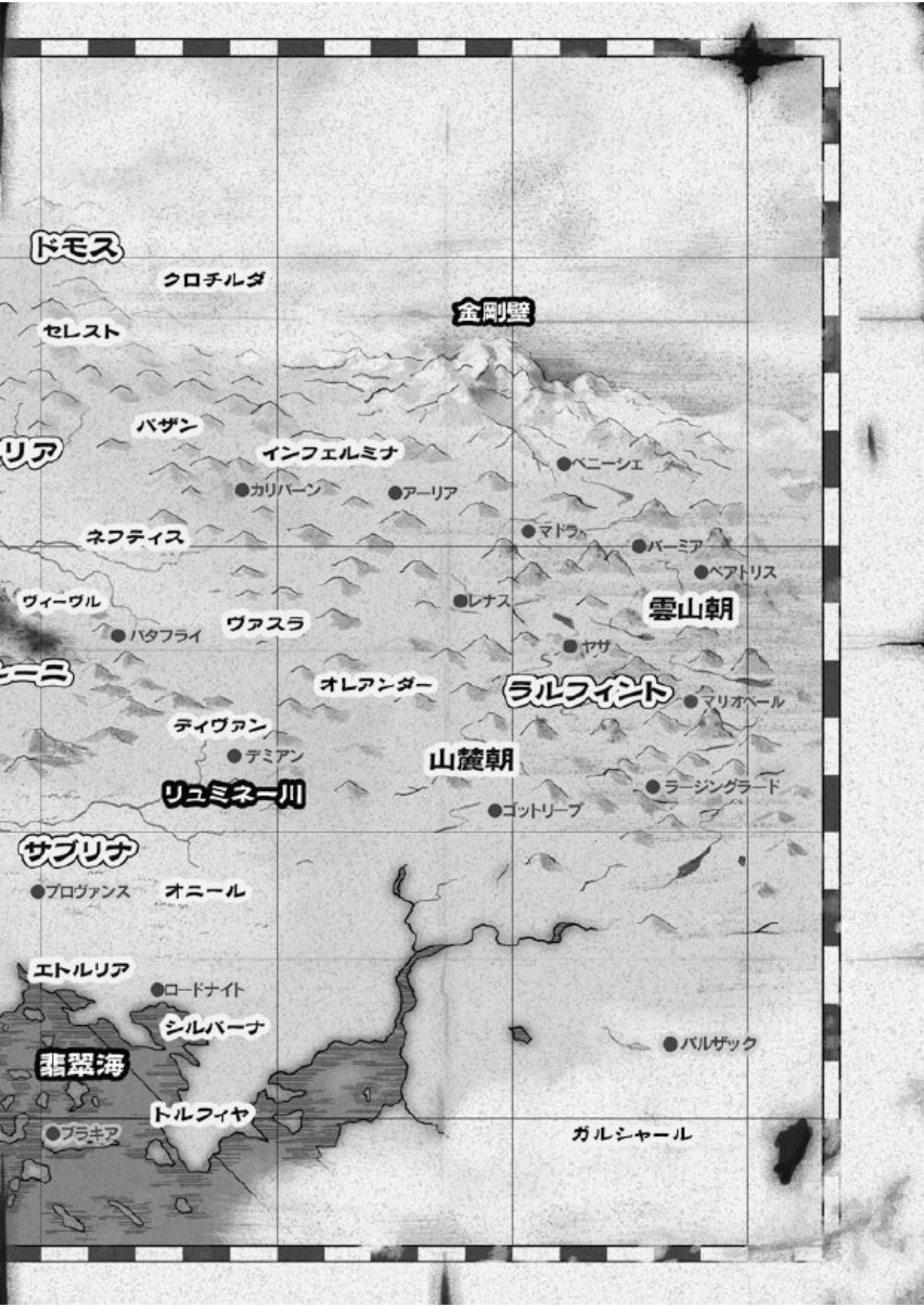
ランチェロ

ローランス

● リマール

● マルタ

カルロッタ



ドモス

クロチルダ

金剛壁

セレスト

バザン

インフェルミナ

リア

●カリバーン

●アーリア

●ベニーシエ

ネフティス

●マドラ

●バーミア

●ベアトリス

ウィーヴル

●レナス

雲山朝

●バタフライ

ヴァスラ

●ヤサ

ニ

オレアンダー

ラルフaint

●マリオベール

ティヴァン

山麓朝

●デミアン

●ラージングラード

リュミネー川

●ゴットリーブ

サブリーナ

●プロヴァンス

オニール

エトルリア

●ロードナイト

シルバーナ

●バルザック

翡翠海

トルフィヤ

ガルシヤール

●ブラキア



登場人物紹介

Characters



レイチェル

フレリア王国で百人隊長を務める女騎士。



オクタヴィア

ナウシアカ王国の王女。剣を魔法で操る「飛翔剣」の使い手。

アーサー

オクタヴィアの身の回りの世話をする小姓となった少年。



ベラ

オクタヴィアの騎士団で
副将を務める女傑。



シェスタ

アーサーとともに育った義姉で、
騎士団の参謀役。



マルローゼ

オクタヴィアの側近で、
若き魔法の天才。

第一章	小姓のお仕事
第二章	舐め犬調教
第三章	暇潰し
第四章	捕虜
第五章	お仕置き
第六章	死のルーレット

第一章 小姓のお仕事

「本日より、オクタヴィア閣下の身の回りの世話をするように仰せつかった、アーサーです。よろしくお願いいたします」

大陸の北西にあるナウシアカ王国。その王都グリーンカムピにある、次期国王と目されるジルヴィ侯爵オクタヴィアの直属の騎士団『戦乙女』の騎士団府に入ったアーサーは、床に這いつくばって挨拶した。

その前に立つのは、ロイヤルブルーの衣の上に、白銀色の全身鎧を纏い、銀砂色のマントを羽織った女性であった。

細身であるが、背はスラリと高い。

金糸のような美しいプラチナブロンドの長髪を後方で結い上げて、左右に羽根飾りのついた銀の額当て。

その下から覗くのは、弓型の眉に、すっと通った細い鼻筋。頬骨が高く、鼻も高い。切れ長の瞳の奥で藍晶石らんしよせきが冷たく輝く。頬には贅肉というものが感じられず、口そのものは大きい。唇は薄い。そして、固く引き締まっていた。

繊細で、甘さのない鋭角なきつい顔立ちをしており、質実剛健な人となりが滲み出ているかのようで、まさに生粋の女騎士、女騎士の鑑かがみといった雰囲気だ。

彼女こそオクタヴィア。年齢は二十歳。

男の兄弟もいるのだが、ナウシアカ王国では女の身ゆえに次期国王と目されている女傑である。

「ああ、おまえもいよいよ初陣だな。励めよ」

このナウシアカ王国というのは、ターラキア山脈に囲まれた陸の孤島のような土地であり、北西から来る風がターラキア山脈に当たって大量の降雪を生むらしく、とにかく積雪が多い。

また、代々女王が即位する女系王家で知られることから『永久氷土の女王』と呼ばれている。

その独特の土地柄ゆえだろう。乱世にあっても、積極的に外征などすることはない。東でドモス王国が台頭してくれば、積極的に誼よしみを通じて、王族や貴族を百人あまりも人質として差し出しているほどだ。

いわば属国扱いなのだが、あくまでも同盟であり、独立国である。

その宗主国たるドモス王国の王太子アレックスが、このたびフレイア王国に出征するということで、その手伝いとしてナウシアカ王国も軍を派遣することになった。

ドモス王国の副都カーリングで留学という名の人質になっていたオクタヴィアは急遽、帰国すると遠征軍の司令官に選ばれた。

ちなみに入れ替わりに次女のユーディ姫が、ドモス王国に出向いている。

「このたびの出陣に、こいつを同行させようと思います。殿下の側に置いておきますので、存分にこき使ってやってください」

そう言つてアーサーを主君に引き合わせたのは、肩にかかる緑色のセミロングの髪に、赤い縁の大きな眼鏡が印象的な大柄な女性である。

名前はシェスタ。年齢は主君よりも七つ年上の二十七歳。

年相応に成熟した肉体を、軍服では収まりきらないとばかりに、袖を通さずに肩にかけている。白いワイシャツの胸元がはちきれんばかりだ。それでいて腹部はぎゅっと引き締まり、臀部はばんつと張っている。

抜群のスタイルを誇示する色気プリプリのお姉さんだが、彼女を口説こうなどという命知らずな男はそうそういないであろう。

腰に巻かれた革ベルトや、スカートのスリットから覗くストッキングには、わざとらしく投げ針が幾本も蓄えられている。

理屈ではなく、ヤバイ姉さんだ、ということをも本能的に知らしめるのだ。

実際、並の男では歯牙にもかけられないであろう才媛である。

オクタヴィアの乳母として、幼少のころからの教育係を務めた。俗にネイヤと呼ばれる存在で、現在も『戦乙女騎士団』の参謀あまたという肩書を与えられて側近を務めている。

彼女さえその気になれば、男など引く手数多あまただろうが、主君が結婚するまで自らも結婚しないと公言している忠臣である。

「うむ、そうか。ならばおまえには今日より、わたしの小姓を命じる」

「ありがたき幸せ。きつと手柄をあげてご覧に入れます」

小姓というのは、主君の身の回りの世話をし、戦場でいざというときに主君の最後の盾として闘うことを義務付けられた存在だ。

同時に主君の側に常にいるのだから、いろいろと機密情報に接することも多い。

勉強になるし、出世コースである。

大変、誇らしい気分だ。そんなとき、頓狂な声とんきやうが上がった。

「うお、凄い美少年！」

それはオクタヴィアの左傍らに控えていた、燃えるような赤い長髪をした大女だ。

逞しい体躯を、いかにも粗野な女戦士風に赤いツーピースのピキニ鎧で包み、白い布の腰覆いを纏っている。

彼女の顔をアーサーは見知っていた。というよりも、知らない人がこの国にいるはずがない。

名前はベラ。

ナウシアカ王国の名門貴族。現国王の弟の娘。つまり、オクタヴィアの従姉にあたる。年齢は二十四歳。

勇猛果敢な女傑として名高く、『戦乙女騎士団』の副将を務める。

「オクタヴィア、な、何これ！ この可愛い生き物!? これを小姓にするつもりなの？

ということはやっぱり、夜の世話をさせるつもり？ いやあ、くん、オクタヴィアってばエッチ〜♪ 真面目すぎるって心配していたけど、やることはやるつもりなのね。ねえ、ねえ、あたしにもちよつとだけ味見させてくれない♪」

順位は低いとはいえ、王位継承の権利すら持っているような女性である。

雲の上の存在のお姉さんいきなり抱きつかれ、頬ずりをされたアーサーは、何がなんだかわからず硬直してしまう。見かねた参謀長のシエスタが、不機嫌そうに眼鏡のつるを上げながら、応じる。

「それ、わたしの弟なのよ。あまり変な目で見ないで欲しいわね」

「え、ええー!? 参謀殿の弟!? あんた、こんな可愛い弟を隠していたの!?!」
意外そうなベラの声に、シエスタはむすつとした声で応じる。

「別に隠してなんていないわよ。まあ、わたしと血は繋がってないんだけどね。我がマクスウェル家の大事な跡取り息子よ。だから、汚い手で触れないでね♪」

につこりと黒い笑顔で釘を刺すシエスタの母親は、当初ナウシアカ王国の菩提寺の高名な神主に嫁ぎ、シエスタを儲けた。しかし、年の差婚だったので旦那は老齢で亡くなってしまう。その後、ナウシアカ王家の重鎮マクスウェル家の当主に見初められ、幼い娘を連れて再婚した。

そこで聡明さを認められたシエスタは、生まれたばかりのオクタヴィア姫の乳母に抜擢された、という経緯がある。

アーサーはマクスウェル当主の正室を母親に持つ。つまり、二人は母親も父親も違うのだが、姉弟として育った。

とはいえ、物心ついたときから姉である。才能豊かで美しい姉は、アーサーの自慢であった。

「久しぶり……」

小さな声でそう挨拶したのは、黒い長髪の上に金の髪飾りを付け、素肌を晒すことを嫌うかのように全身をタイトで覆い、その上からゴテゴテとした白いレースをあしらった黒いローブを纏い、さらに背中には黒い羽根飾りを四枚背負っていた。しかも、分厚い事典のような本を抱きかかえている。

なんとも個性的なファッションの少女は、ハイテンションなベラとは対照的に低血圧っぽい雰囲気である。

彼女の名前も、アーサーは心得ていた。マクスウェル家に負けず劣らぬ譜代の重臣の娘で、マルローゼという。

年齢に似合わぬ魔法の達人として、『戦乙女騎士団』の幕僚に抜擢され、オクタヴィアの側近をしているのだ。

ただ、天才にありがちなことに、社交性に乏しい性格をしている。シエスタが気を遣う。

「あ、二人は同じ歳だから、何度か顔を合わせてるわよね。仲良くやってあげてね」

「うん、マルローゼのほうが先輩だね。これからよろしく」

アーサーが如才なく挨拶すると、マルローゼは不器用そうに頷く。

「ま、まあ、参謀殿にはお世話になってるし……わからないことがあれば聞けばいいわ」
同じ王国の同じような階級の子弟である。いろいろな機会で顔を合わせることも多い。
市井しせいの子供たちほど頻繁に顔を合わせるわけではないが、まず幼馴染みと言っていていい間柄である。

そんな微妙な空気の若者たちを他所にペラは、シエスタの手を取っていた。

「参謀殿。今日から義姉さんと呼ばせてちょうだい」

「絶対にダメ！」

断固として拒否したシエスタは有無を言わず、ペラの手を振り払った。

ペラは懲りずに、アーサーの頭を抱き締める。

「ねえ、アーサーくん。キミは好きな娘いる？」

「い、いや……」

いきなりの質問に返事に困るアーサーに、ペラは畳み込む。

「オクタヴィアみたいなのが好みだったりするの？」

チラリと主君を見る。

超然とした美人で、神々しいお方だ。

「そ、そんな……そ、尊敬しているだけで、好きだなんて恐れ多いです」

「そうよね。それなら、シエスタお姉さんに惚れているのかな？」
チラリと見ると、眼鏡をかけたお姉さんは怖い顔で睨んでいる。

「義姉さんのことは大好きだけど、義姉さんは義姉さんですし……」

どんな答えを求められているのかわからず、戸惑うアーサーに、ペラは納得と言いたげにうんうんと頷く。

「それとも、やっぱりマルローゼみたいに同世代の女の子がいいかな？」

マルローゼの顔を見る。彼女もキョトンとした顔をしている。

「年齢に拘りは……ないけど」

無難に答えるアーサーの鼻先に、ペラは自らの鼻の頭がつかんばかりに詰め寄る。

「なら問題ないわね。あたしにしておきなさい」

「えっ!？」

意味がわからないアーサーは、まじまじとペラの顔を見た。

精悍なお姉様は、ニヘラと表情を崩す。

「手取り足取り腰取り、エッチなことを教えてあげるわよ。平たく言うと、あたしが童貞を食べてあげる♪」

気は強そうだが、美しい顔。王族の端くれにありながら、武勇に優れた女傑。乳房は大きく腹部は引き締まっている。そんなスタイル抜群のお姉様にいろいろ教えてもらいたくない、と言えばウソになるだろう。

しかし、いま、喜んで頷くには周囲の視線が怖すぎる。

オクタヴィアは冷然と、シエスタはハラハラしながら、マルローゼは興味深そうに見守っているのだ。

「め、めっそうもありません」

全身から滝の汗を流したアーサーは、怯えきり、顔を盛大に左右に振るった。

「え、遠慮しなくてもいいのに」

「そこまでよ」

勝ち誇った声で、シエスタが割って入る。

「マクスウェル家は名門なのよ。いくら王族だからって、あなたなんかの玩具になり果てるはずがないでしょ」

「ふん、恋愛に身分は関係ないのよ」

信頼する側近二人の冗談交じりの口論を、黙って見ていたオクタヴィアが口を挟む。

「ベラ。そのあたりで許してやれ。そろそろ出陣するぞ。みな、気分を切り替えろ」

「はっ」

こうして、ナウシアカ王国の第一王女オクタヴィアに率いられた二百騎と千人ほどの兵士が出陣した。先発軍として三千人ほどがすでに出発している。

オクタヴィアの小姓に抜擢されたアーサーも意気揚々と従軍する。

（うわ、さすがオクタヴィア様、カッコイイなあ）

白馬に跨がったオクタヴィアの周囲には、副将のベラ、参謀のシエスタ、魔法使いのマルローゼが囲む。

いわばこの三人が、王女オクタヴィア直属の『戦乙女騎士団』の三幹部である。

いずれも女なのは、同性のほうが気楽だということもあるのだろう。

オクタヴィアから見ると、シエスタは姉、ベラは悪友、マルローゼは妹分といったところなのだろう。主従というよりも、友達や家族といった温かい雰囲気伝わってくる。

ちなみに彼女たちは、みな最近までドモス王国に留学していたから、国元に残っていたアーサーはいささか寂しい想いをしていた。

さすがにオクタヴィアは覚えていてくれたが、ベラなどは存在をまったく知っていなかったようだから、これから頑張って仲間として認めてもらわねばならない。

(ドモス王国がなんだ)

都会者に負けていられるか、といういささか田舎者のコンプレックスを感じながら、緊張に背筋を伸ばして行軍する。

姫将軍の出陣式ということで、沿道は大変な賑わいだ。

やがて国境であるターラキア山脈を抜けて、フレイア領に入る。

「とりあえずの目標はガルータ城にしましょう。無理をすることはありません。敵としても、こちらがドモス王国への付き合いでの出征に過ぎないことは承知しているだろうから、積極的な攻勢にはこないはずよ」

参謀シエスタの意見を、総大将のオクタヴィアも受け入れた。

白砂の砂漠をゆつくりと行軍する。長い時間行軍していると自然と、一隊、一隊、細く長い隊列になっていく。

そんなとき、砂の小さな丘の上から一軍が急襲してきた。

「敵だ〜〜っ!! 上から来るぞ〜」

それほど真剣に闘おうという気がなく、さらに前線はまだ遠い、と思っていたところを強襲されたのだ。

ナウシアカは動揺してしまい、兵士たちはまともに対応もせず、逃げ出した。

このとき、武闘派で鳴らしたベラが、先発隊の視察に行っていたことも大きいだろう。

敵の隊は、総大将たるオクタヴィアを狙って突撃してきた。

「我こそはフレイアが百人隊長レイチエル。その首級貰ったよ!」

そう大音声で名乗り上げたのは、黒い胸鎧を纏い、黒き馬に跨がった女騎士であった。

黒い胸鎧の脇は開き、ハイレグのびったりとした見せショーツを穿いている。太腿丸出しのなんとも大胆な装いだ。

戦士にとって鎧とは死に装束である。単なる防具ではないのだ。だから、みなお洒落に着こなす。特に若く腕っ節に自信のある女は、その傾向が強い。

そんなセクシーな装いとは裏腹に、濃紫色のセミロングの下、顔には頬当てを付けている。いわゆるフェイスガードだ。

顔を守る防具という意味合いとは別に、威圧感を出すための演出であるのだろう。

「マルローゼ、魔法を！」

「了解」

シエスタの指示で、本を抱いたマルローゼは手を突き出す。たちまち禍々しいまでに黒き煙が渦を巻く。

しかしそれを切り裂いて、騎馬武者は突撃してきた。

数は多くない。二十騎程度だ。しかし、いずれも剽悍である。

一気にオクタヴィアのもとに詰め寄った。

「オクタヴィア様っ!? お逃げください」

シエスタは投げ針を抜いて、次々と投げるが、鎧を着ている相手には牽制以上のものはならない。

「行かせるか！」

オクタヴィアの小姓として一番近くにいたアーサーは、突撃してくる騎兵の群れに強引に立ちふさがる。

このようなときに身体を張って盾になるのが、小姓の仕事だ。

「小僧、邪魔だよ！」

唸りくる槍を兜に食らって、アーサーは吹っ飛んだ。

木っ端騎士をはね飛ばした猛々しき女騎士は、武器すら構えず茫然と馬上に立ち尽くす

オクタヴィアに躍りかかった。

「取った！」

奇襲に成功した黒き女騎士は、歓喜の声を上げる。

「閣下っ」

参謀たるシエスタが悲鳴を上げる。

ナウシアカ軍は全軍で千人を超えていたとはいえ、行軍のために細く伸びてしまっている。そこを横から強襲されたのだから、いきなり主将を狙われてしまったのだ。

参謀としては痛恨事であろう。

「甘いな」

オクタヴィアは手綱を握ったままで、なんの武器も構えなかった。

しかし、次の瞬間、周囲に四本の剣が浮遊する。

「なにっ！」

ヒュンヒュンヒュンヒュン！

四方から襲いくる刃を、レイチェルと名乗った女騎士は黒い槍で慌てて打ち払う。

しかし、弾かれた剣はすぐに戻ってくる。

「ちっ、ふざけた手品を使う」

もちろん、オクタヴィアが四本の剣を魔法で操っているのだ。魔法と武術を一体化した技で、『飛翔剣』と言われている。

閉鎖的なナウシアカ王国にあって独自進化した武芸であり、扱いが極めて難しい。四本もの剣を手で操っているかの如く、飛翔させてみせるのは、オクタヴィアぐらいのものだ。それを初めて見て、一本の槍で捌いてみせるレイチエルとやらも、卓越した技量の持ち主であることは疑いない。

「勇敢だな。ここまで切り込んだ戦勘といい称賛に値する。レイチエルといったか。その名前は覚えておこう」

「なめるなっ！」

敵からの称賛に烈火の如く怒ったレイチエルは、飛翔する剣をなぎ払いながら少しずつオクタヴィアに近づく。

このような命知らずな突撃をしてくるだけあって、やはり強い。

しかし、この場合、時間はナウシアカ軍の味方だ。

「うおおおお、なめた真似してくれたなああ」

雄叫びを上げて、『戦乙女騎士団』の副将にして自他ともに認める武闘派のベラが、青竜円月刀を手に精鋭を率いて戻ってくる。

突撃してきたフレリア軍としても、あと少しで敵の総大将を討てる好機なのだ。必死である。

騒然とした修羅場の中にあって、大地に投げ出されていたアーサーは、いまだ脳震盪のうしんどうを起こしているのを感じたが、剣を持ってなんとか立ち上がった。



グルングルンと回る視界で、白き馬に跨がったオクタヴィアの姿を確認することができた。そして、それを襲う黒き女騎士も。

(た、大変だ……)

アーサーは人馬の壁をはいくぐつて、主君に近づいた。そして、敵に向かって剣を突き出す。しかし、頭ほどに身体は動かず、剣の切っ先は思いの外に低かった。

「ひいいいん!!!」

尻を突かれた黒き馬は、驚き棹立ちさおだになると、次の瞬間には明後日の方角に暴走してしまった。

なんとか落馬しなかったのは、黒き仮面の女騎士の技量の賜物であろう。

「ちっ、ここまでだ。みな引き上げるよ」

レイチエルの無念そうな叫びに従って、配下の騎士たちも逃走にかかる。

少数での奇襲だ。時間が経てば経つほどに不利になるのは自明のこと。はじめから長居をするつもりはなかったであろう。

「生かして帰すか！」

激昂たしなしたベラはすぐさま追撃しようとするが、四本の剣を背後に浮かべたオクタヴィアは窘める。

「深追いは無用だ。匹夫をいくら討ったところで戦局は動かない。ガルータ城を優先する」
そこに投げ針をしまいながらシエスタが応じる。

「まあ、これは武闘派の跳ねっ返りが、力試し感覚で仕掛けてきただけよ。戦略的にはなんら意味はないわ」

敵の狙いは敵の大將たるオクタヴィア一人だったのだから、両軍ともに死者はないようだ。

怪我人をマルローゼが魔法で治療して回っている。

飛翔する剣を収めながら、馬上のオクタヴィアは大地に膝をついている小姓を見下ろす。

「アーサーは、無事か」

「はい」

馬から投げ出されて身体中痛いのが、情けないやつと判断されるのは悔しいから、アーサーは空元気で答えた。

「マルローゼ、手当てをしてくれ」

「……大丈夫？」

不器用な少女は、傷だらけのアーサーを手当てしてくれた。

※

「まったく、敵にも活きがいいのがいやがるぜ。戦いはこうでなくちゃいけない♪」

敵の前線基地であるガルータ城の向かいに、先発隊が付け城を築いており、そこに入ったオクタヴィアたちは、將軍たちから現状報告を受けた。

そして『戦乙女騎士団』の面々、いわゆる身内だけになったところで、ソファーに腰を

下ろしたペラは、両手を頭上に組んで楽しげに笑った。

「わたしはハラハラものよ。まさかオクタヴィア様に飛翔剣を振るわせる事態になるなんて、とんだ失態だわ」

同じくソファアーに腰を下ろしたシェスタは、自信を喪失すると言いたげにぐったりと肩を落とす。

マルローゼは、アーサーのもとに寄ってくると、傷の具合を確認しながら口を開く。

「あなたはとんだ初陣だったね」

「あのような醜態を晒すなど、無念です」

敵の一人も討てずに手傷を受けてしまうなど、痛恨の極みだ。

「そう気にするな。おまえはよくやった」

マルローゼに魔法治療をされているアーサーのもとにやってきたオクタヴィアは、その頭を撫でてくれた。

ソファアーにふんぞり返ったまま、ペラも大声で褒めてくれる。

「ああ、身体を張って、敵の前に立ちふさがったんだ。初陣にしては上出来だよ」

「まあ、わたしの弟だからね。それくらいは当然よ」
気を取り直したシェスタは、大きな胸を張る。

なんとか元気を取り戻した参謀に苦笑したペラは、立ち上がった。

「くう、とにかくここは砂だらけでかなわん。久しぶりにでかい風呂に入りたいわ。用

意してくれているんだろ」

「ええ、先発隊のみなさんが作ってくれたようだよ」

シエスタが請け合う。そこでオクタヴィアが口を開く。

「そうだな。今日はみなで入るか。最前線の砦だ。我々だけ、そうそう贅沢もできない」

「ああ、いいね。順番を待っているのも面倒だ。いくぞ、マルローゼ」

「わたしは別に入らなくても……」

嫌がる最年少の少女の襟首をひよいと捕まえたペラは、無理やり引きずっていく。

「だゝめ、全員一緒に風呂に入ったほうが効率いいでしょ」

「うう〜」

不満そうな顔を浮かべるマルローゼだが、結局、お姉様方には逆らえない。

全員仲良く風呂場に辿りつく。

小姓としてあたりまえについてきたアーサーに、ペラは陽気に声をかける。

「アーサーも一緒に入るか？」

「いえ、外で見張り番をさせていただきます」

だいぶペラの性格がわかってきたアーサーは、からかわれているのだと承知して真面目に答える。

ペラは面白くなさそうに肩を竦めた。

「若いんだから、もっとガツガツしててもいいのになあ」

「うちの子は紳士なのよ。それじゃ、アーサー、よろしくね」

そう弟を庇ったシエスタと、オクタヴィア、そしてペラとマルローゼは風呂場に消えた。それを見送ったアーサーは扉を背に剣を抱えて、座り込む。

風呂場からは、キャツキャツとお姉様たちが騒いでいる声が聞こえるが、会話の内容まではわからない。

やることがないのでついつい先日の戦いのことを反芻してしまう。

「あの仮面の女騎士。今度はぼくが倒してみせる」

小姓としては最低限の仕事をしたとは思いますが、やはり無念の気持ちを捨てきれないアーサーが決意を新たにしていると、思いつけない悲鳴が背後から聞こえてきた。

「曲者だ！」

「っ!？」

ペラの叫び声だ。

先日の思いがけない奇襲の記憶が生々しいだけに驚いたアーサーは、剣を持って扉を蹴飛ばし、湯殿に駆け込む。

風呂場というのは、武器を持ち込まない。寸鉄を帯びない、もったも無防備な空間である。

いかに一騎当千の猛者といえども、その力を発揮できない。それだけに暗殺劇の舞台としてみっとも多いと言われている。

「……？」

剣を構えたアーサーは、簡素とはいえそれなりに広い浴場で立ち尽くす。

オクタヴィアとマルローゼは湯船に浸かり、シエスタは風呂の縁に腰掛けて乳房を晒している。そして、ベラは堂々と仁王立ちして待っていた。

湯殿にいるべき人がいるだけで、他には誰もいない。

戸惑ったアーサーはあたりを窺いつつ口を開く。

「曲者はどこですか!？」

湯殿に肩まで浸かったオクタヴィアは困ったものだ、と言いたげな表情。顎まで湯船に浸かったマルローゼはのぼせたように顔を真っ赤にしている。湯船に足だけ浸けて、乳房を堂々と晒しているシエスタは呆れたように肩を竦め、最後に裸で立っていたベラが歩み寄ってくる、アーサーの肩を叩いた。

「お勤め御苦勞様。キミは本当に真面目だね」

「あ、あの……曲者は？」

大柄なベラの乳房は、ちょうどアーサーの視線の目の前にくる。

大きくて満々と張りつめた肉塊が二つ突き出しており、頂を褐色の乳首が飾っていた。

見てはいけないものを見てしまった気がして視線を下げると、下半身では逞しい足の間で、濡れた赤い陰毛がもつさりと茂っている。

目のやり場に困っておろおろしているアーサーとは対照的に、ベラはまったく恥じ入ら

ない。

「いや、これはキミが小姓として真面目に仕事をしているかのテストだったのよ♪」

「はぁ、テストですか……？」

裸の美女を前になんとも言えない気分のアーサーは、生返事をするこゝろしかできない。視線を巡らすと、オクタヴィアが複雑な表情で頷き、シエスタは溜め息をつく。

おそらく、ペラが思いついたお遊びなのだろう。それと悟ったアーサーは、剣を鞘に戻す。

「そういうことでしたら、失礼します」

いそいそと外に戻ろうとしたアーサーの肩を、ペラは背後からがちりと掴む。

「まあ、まあ、女の風呂場に入る機会なんて、そうないわよ。ゆっくりしていきなさい」

「そ、そういうわけには……」

戦闘モードが解ければ、大勢の女性が裸でいる浴場にいることは気恥ずかしい。

完全にかかわれている、というのがわかるだけに、早々に退出しようとするのだが、肩を押さえるペラの力は、さすがに強い。

有無を言わさず抱き寄せたペラは、アーサーの背中に乳房を押しつけながら、耳元で悪戯っぽく囁く。

「王女様の風呂場を覗くなんて、不敬罪だね」

「えっ!？」

騙しておいて、それは酷い。思わず目を剥くアーサーに、ペラは破顔する。

「冗談よ。でも、せつかく来たんだから、ゆっくりしていきなさい。団長の温情よ。初陣で頑張ったご褒美として、一緒に風呂に入ってもいいってことになったの」

「いっ!？」

思わずアーサーは、湯船に浸かっているオクタヴィアを見る。

くだらないゲームか何かの景品にでもされてしまったのだろうか。オクタヴィアは困った表情で頷く。

「まあ、おまえさえよければだがな」

「う、でも、そんな……」

オクタヴィア、シエスタ、マルローゼ、ペラ。いずれも美女美少女。彼女たちと一緒に風呂に入れるなど夢のような提案である。

(でも、これは罠だ。絶対に罠だ)

理屈ではなく、アーサーの理性が告げている。しかし、主君の命令は絶対だ。硬直しているアーサーを、ペラは追い立てる。

「とうわけだから、早く服を脱ぎなさい。風呂場で服を着ているなんて、不自然よ」

「いや、そんな、でも、義姉さん」

思わずアーサーは、血の繋がらない姉に助けを求めた。

風呂の縁に腰をかけたシエスタは、タオルで汗を拭いていた。

当然、白い肌と豊かな乳房は丸出しである。赤い縁厚の眼鏡はかけたままだ。

「まあ、みんなが一緒に入りたいと言っているんだから、いいんじゃないのお〜」
他人事のように賛成してくる。

「そんな義姉さん」

絶望するアーサーを他所に、ペラは不思議そうに首を傾げる。

「真面目な参謀殿のことだから、反対すると思っていたのに意外ね」

「そりゃ、わたしたち姉弟ですもの。お風呂ぐらい一緒によく入るわよ。いまさら、裸を見たって、見られたって、なんとも思わないわ」

「マジでっ!？」

さすがのペラも目を剥く。オクタヴィアとマルローゼも目を丸くしてしまった。

素っ裸のシエスタは、さっと緑の髪を払うと堂々と答える。

「わたしたちは血の繋がっていない姉弟だからね。スキンシップをより大事にしているのよ」

「いや、それかえって危ないから。そうか、参謀殿、浮いた噂一つないと思ったら、義理の弟相手に欲情していたんだ……」

「下世話なことを言わないでちょうだい。その子はわたしの自慢の弟というだけよ」
年上の同僚の主張に、ペラは呆れた顔で肩を竦める。

（う、義姉さんのバカ。みんなに変に思われているじゃないか）

シエスタと一緒に風呂に入るのは、アーサーの子供のころからの最大の娯楽であったわけだが、同時に誰にも知られたくない秘密であったのだ。

ちなみに精通も、シエスタと風呂に入って、身体の洗いっこをしているときに起きた。その後、姉と風呂に入るときは、たいてい射精してしまっているのだが、それを気付かないようにするのがアーサーの苦勞である。

だから、シエスタがオクタヴィアとともに、ドモス王国に旅立ったときは本当に悲しかった。

穴があつたら入りたい、という気分になっているアーサーに、ペラは命じる。

「ということなら、問題ないでしょ。とつとと服をお脱ぎ」

姉によって退路を断たれて、アーサーはしぶしぶ衆人環視の中で服を脱ぐ。

素っ裸になれば、当然、逸物は跳ね上がる。

それを見てペラは歓声を上げた。

「あはっ、ちっちゃい。まだまだお子様おちんちんのね。でも、精いっぱい勃起しているって感じで可愛い。うふふ、アーサーくん、なんでおちんちんを大きくしているのかな？」

「そ、それは……」

言いよどむアーサーに、見かねたシエスタが助け舟を出す。

「あのね。うちの弟は健全な男子なんだから、このような状況で勃起するのはあたりまえ

でしょ。あまり苛めないでくれる」

「あはっ、やっぱり、女の子みたいな顔をしていても、男の子だもんね。勃起しても小枝みたいなおちんちんで、この皮の余りっぷり、まさに短小包莖。絵に描いたような童貞ちんちんね」

逸物にペラが手を伸ばそうとすると、歩み寄ってきたシエスタがパチンと弾いた。

「可愛いでしょ。でも、あなたにはあげないわよ。この子のおちんちん」

「えー、ケチー、ちよつとだけー」

「ダメー！ 絶対ダメー！ この子はうちの跡取り息子なんだから、あなたみたいなあばずれの玩具にはさせないわ」

いや、大勢の女性の前で裸にされている時点で、十分に玩具にされています、と心の中でアーサーは突っ込む。

「何よ。参謀殿は、姉のくせに、弟の童貞を狙っているの？」

「ば、バカなことを、なんでも自分を基準に判断しないでちょうだい」

動揺しながらも否定したシエスタは、湯船に浸かっている主君に声をかけた。

「でも、オクタヴィア様が色小姓として、この子を御所望なら、童貞を献上させてもいいと思っっているんですけど♪」

「えっ？」

いきなり話を振られたオクタヴィアは、戸惑った表情を浮かべた。それから、目を泳が

せ、慌てた口調で否定する。

「いや、そのような気遣いは無用だ」

「残念」

本気で残念そうなシエスタに、ペラが嘸みつく。

「うわ、主君の歡心を買うために、弟を差し出そうだなんて、腹黒い女ね」

「弟の未来を考えたら当然でしょ。それから、マルローゼも触っていいわよ」

「え、わたしですか？」

湯船の中で溺れそうなほどに小さくなっていたマルローゼは困惑する。

「ええ、マルローゼはいい子だし、年齢的にも釣りあうから、この子のお嫁さん候補として考えているの。第一マルローゼになら、義姉さんと呼ばれても耐えられるわ」

「うわ、蟲貞だ」

ペラは地団太を踏んで悔しがる。

「そっちがその気なら、こっちにも攻め手はあるわよ」

「何よ」

「アーサーくん、あたし、アノことを知っているんだけど？」

ペラに意味ありげに見つめられたアーサーは戸惑う。

「なんですか？」

「キミ、行軍中、オクタヴィアの洗濯ものを洗っていたわよね」

「は、はい。身の回りの世話をするのは小姓の仕事ですから……」
ドキン。

ベラの言わんとしていることに思い至ったアーサーは、全身から滝の汗を掻く。
(まさか、ば、ばれているはずがない……)

必死に自分に言い聞かすアーサーの背後に回ったベラは、ギユツと抱き締める。巨大な乳房がムニユツと押しつけられた。

「オクタヴィアの脱ぎたての、汗のついた下着を洗う前に、何かに使用しなかったかな？」
「な、なななななんのことですか？」

自分でもわかるほど、動揺しまくった調子っぱずれの声が出てしまった。
「どうやら、使ったみたいね」

周囲の女たちの顔を見ながら、ベラはアーサーの耳を食むはようにして囁く。

「やったんでしょ。オクタヴィアの汗のついた下着の匂いを嗅ぎながら、オナニー♪」
ドキン！

アーサーの心臓が異変をきたす。

もはやその姿は、周りの女たちにやった、と公言しているようなものだ。

「……」

オクタヴィアは無言で一睨み。顔を真っ赤にしているマルローゼは冷たく吐き捨てる。
「……最低。呪われるといいわ」

男として女性に一番知られたくなかったことを暴露されて、がつくりと落ち込むアーサーに、シエスタは追い打ちをかける。

「アーサー、あんたって子は、そんなことしたの！ マクスウェル家の男児として恥を知りなさい！」

「う……」

生き地獄に叩き落とされたかのようなアーサーを、裸で抱き締めながらペラはさらに追い詰める。

「くつくつく、主君をオナペットにするだなんて、まさに不敬罪よね。さあ、どうするのかな、アーサーくん」

「こ、この上は……死んでお詫びを」

「ああ、はいはい。そんなことより先にやることがあるでしょ」

そう言われても何をすればいいのかわからない。半泣きになりながら質問する。

「何をすれば……？」

「ど・げ・ざ。しなさい」

「っ!？」

硬直するアーサーを抱き締めたまま、その姉に向かってペラは笑いかける。

「シエスタも、異存はないわよね。あなたの可愛い弟は、主君を侮辱したのよ」

「うぐぐ……」

シエスタは反論の言葉がなく、齒がみする。

アーサーは、名門マクスウェル家の嫡子だ。

幼年の中では優秀と認められた存在であり、相応のプライドがある。

しかし、敬愛する主君、尊敬する義姉、おっかないお姉さん、できる同僚という裸の綺麗な美女美少女に囲まれては、もはやどうしようもなかった。

進退窮まったアーサーは、その場で深々と土下座をする。

「申し訳ありませんでした」

それを受けてオクタヴィアは複雑な表情で応じる。

「まあ、わたしも配慮が足りなかった。アーサーも年頃の男の子だものな」

自分の汚れた下着でオナニーされた、というのは気持ち悪いと感じると同時に、幼少のころからよく知っている少年のオナペットになっていた、という事実はくすぐったいような気分になるのだろう。

「くっくっくっ、オクタヴィアが許しても、無罪放免というわけにはいかないわよね。ここはしかるべき罰を与えるべきよね」

ペラの確認に、シエスタは戸惑いながらも頷く。

「そ、そうね……」

「ということ、アーサーくんの解体ショーをやるうか？」

「え、解体ショー？」

博学のシエスタをして、意味がわからなかったのだろう。眼鏡の奥で瞬きをする。もちろん、アーサーにもわからなかった。

「うふふ、我らの主君がオナペットにされたのなら、今度はあたしたちがオナペットにしてあげましょう。これでおあいこよ」

そう嘯うそがいたベラは、アーサーの背後から抱き締めたまま腰を下ろした。

「キャツ、ちよ、ちよつと、いきなり何……やめてください」

ベラは国一番と言っていい女勇者だ。そんなのに組みつかれてはアーサーにはもはや太刀打ちすることはできなかつた。

アーサーは仰向けに大の字に寝かされた。両手はベラの手に乗えられ、後頭部にベラの股間がくる。

「う」

素っ裸になって仰向けになる。

眼前には底ひもとのように突き出した巨大な双乳。このような状態では、少年の逸物が勢いよく跳ね上がるのは必然であろう。

当然ながら、湯殿にいた女たちの視線が一点に集まる。

(これじゃ、晒し者だ)

逃げようともがくと、ベラの足が脇腹から回って、両足の裏を合わせるようにして、逸物を挟んだ。

「ほう」

童貞少年の悲しさで、綺麗なお姉さんに逸物を押さえられた時点で、身動きはできなくなる。

淫らに笑ったペラは、足の裏に挟んだ逸物を上下に扱く。

「ほう！ やめてえ」

生まれて初めて他人によって逸物を弄られたアーサーはそのまま、腰を高く吊り上げてのけぞった。

そこに尊敬する女性たちの視線が集まっているのだ。

「はあ、癒やされるわ。戦場にいる男なんて、汗臭くて、ごつつい野獣みたいな野郎ばかりだったからね。美少年が快感に悶えている姿、まさに目の保養だわ」

恍惚とした声を出すペラに、さすがにシエスタも抗議の声を上げる。

「ちよつと、我が家の大事な跡取り息子のおちんちんを足で挟むなんて失礼よ」

見かねたオクタヴィアも窘める。

「ペラ、さすがにちよつと酷いと思うぞ」

「いやいや、男ってのはつけ上がるからね。悪いことをしたら、徹底的にお仕置きして、二度と逆らう気力がなくなるまで調教しなくちゃダメなのよ。それに見て、この先走りの液、まるでおしっこ漏らしているみたいじゃない。ここで解放するのはちよつとばかり酷だと思うわよ」



ペラの主張に、オクタヴィアとシェスタは酔を飲んだような表情になる。

「ということ、オクタヴィア。こっちに来て、あんたをオナペットにした不屈者へのお仕置きをしてあげなさいよ」

「そ、そうだな」

ペラの口車に乗せられて、オクタヴィアが湯船から出てきた。

透けるような白い肌、大きな乳房、ピンクの乳首、くびれた腹部に、金色の纖毛できた陰毛。

その圧倒的な美貌を前に、アーサーは鼻血を出しそうになる。

「マルローゼ、あんたもおちんちん見たことない口でしょ？ いい機会だから、こっちに来なさい。いろいろ教えてあげるわ」

「うん」

主君が動いたことでマルローゼもまた、先輩の呼び出しに応じた。

マルローゼは、アーサーとほぼ同じ歳。年齢的に一番若いだけあって、スレンダーというより、ズンドウに近いような気もするが、女性の裸というだけで、アーサーには十分に刺激的である。

（うわ、おっぱいだ。どこ見てもおっぱいだ）

頭上にペラの乳房。左にはシェスタの乳房。足下にはマルローゼの乳房。右にはオクタヴィアがある。

視界の大半が肌色だ。

同じ肌色でも、オクタヴィアの肌は透き通るようであり、シエスタは乳白色、ペラは健康的に日焼けし、マルローゼは青白い、と微妙に違う。

おっぱいの大きさも違う。一番大きいのが、シエスタ、次いでオクタヴィア、ペラ、マルローゼという順番である。

お仕置きされている地獄であるが、同時に天国気分という複雑な心境だ。

「ほらほら、二人ともよく見なさい。これが噂のおちんちんってやつだよ。まだまだお子様サイズだけどね」

「これが男の子の生殖器……？」

マルローゼは興味深いと言いたげに顔を近づける。

「そ、可愛いものだろ」

「いや、悪魔に呪われているみたい」

マルローゼの不快感な表情に、ペラは笑う。

「はじめはちょっとびっくりするかもしれないけど、すぐに可愛くて仕方なくなるわよ。次は匂い嗅いでみな」

先輩に促されたマルローゼは、恐る恐る逸物の先端に鼻を近づけてクンクンと匂いを嗅ぐ。そして、顔をしかめる。

「臭い」

「うふふ、やっぱりね。ねえ、参謀殿さ。大事な弟を風呂に入れたとき、ちゃんと身体を洗ってあげないとダメだよ」

「洗っているわよ。そこはおしっこをするところなんだから臭くて当然でしょ」
シエスタは心外など言いたげに応じる。

「おちんちん洗ってないでしょ？」

「そりゃ、姉弟といえど、節度はあるわよ」
ペラは首を横に振るう。

「なっていないな。男の子はここが一番大事なのに。オクタヴィア、せつかくだから皮を剥いちやいましょう」

「え、皮ってこれから？」

集団心理というやつだろうか。真面目な顔したオクタヴィアは、戸惑いながらも手を伸ばし、包皮を引っ張る。

「そうそうそれ。包莖おちんちんを前にしたら、剥くのが淑女の嗜たしなみってやつよ」

「淑女っておまえが言うか？」

「いいからいいから、主君としての威厳を見せるためにも、オクタヴィアが剥いてあげたら、この子、泣いて歡ぶわよ」

ペラに促されたオクタヴィアは、戸惑いながらも、アーサーに確認を取る。
「剥いて欲しいのか？」

「そ、それは……オクタヴィア様になら……♪」

包皮を剥く、という行為は自分で少しだけしたことがある。

そのときは死ぬほど痛かった。

それゆえに正直怖かったが、オクタヴィアに逸物を触ってもらえる、という誘惑には代えがたいものがある。

「よし、ならば剥いてやろう」

女としての好奇心を抑えきれなかったらしいオクタヴィアは両手を伸ばすと、たっぷりと余った包皮を^{つま}抓む。

「ごくり」

側で見守るマルローゼが、生唾を飲んだ。

ぐいっとオクタヴィアは包皮を開いた。

「ひぎっ！」

予想以上の激痛が襲った。それをシエスタが咎める。

「こら、アーサー、マクスウェル家の男子たるものが、何みつともない悲鳴を上げているの。せつかく、オクタヴィア様が剥いてくださっているのよ」

「で、でも、義姉さん、これ凄く痛い……」

「言い訳など男子のすることではありません」

シエスタはぴしゃりと反論を封じた。

完全に泣きが入ってしまったっている側近を見て、オクタヴィアはいささか困惑した表情を浮かべる。

「そんなに痛いのなら、無理強いをするつもりはないが」

「いえ、こいつにとつていい思い出になると思います。よろしくお願いします」

「そ、そうか……わかった」

信頼している参謀に促されたオクタヴィアは戸惑いながらも、包皮を一気に剥けるだけ剥き下ろしてしまった。

「ひい、ひぎあああああ!!!」

初剥きされた媚粘膜に、空気が触れる。それだけで年若い少年には強すぎる刺激だった。ブシヤ!

水風船でも爆発したかのように、剥き上げられた皮の中から大量の白濁液が一気に噴き出した。

ドクン! ドクン! ドクン!

噴水のように噴き出した白濁液が、オクタヴィアとマルローゼの顔から胸元にかかる。それをオクタヴィアは掬い取る。

「このヌチャヌチャしたものは、精液か」

「わたしにこんな臭いものかけるだなんて……呪うわ」
マルローゼは半泣きになっている。



「いや、その……ごめんなさい」

アーサーもまた半泣き、いや、マジ泣きになりながら平謝りするしかない。

逆にアーサーを背後から抱き締めているペラは嬉しそうに笑いながら、鼻で深呼吸する。

「うわ、凄い臭い。濃いわ。部屋中が精液の匂いでいっぱいになっちゃった」

風呂場は密閉した空間であり、精液の匂いが充満する。

「それにしても、参謀殿は男を知らないくせに、意外と冷静なんだね」

ペラの指摘に、シエスタは左手で胸元を隠し、右手で股間を押さえながら、頬を染め、視線を逸らしながら告白する。

「そりゃ、その子、わたしの前で、そうやって何回も暴発させているし、仕方ないでしょ。

男の子の生理現象なんだから」

「え、義姉さん、気付いて……いたの」

「気付かないはずないでしょ。こんなに匂いするんだから」

「ばれてないつもりだったアーサーはがっくりと脱力する。

はじめは偶然だったとはいえ、シエスタのほうも意図的に弟を挑発し、暴発させるのがひそかなストレス解消法だったのだ。

「まったく、参謀殿がそこまで変態だったとは知らなかったわ。それにしても、さすがに一回射精しただけじゃ小さくならないのね」

ペラは足の裏に挟んだいまだに硬い逸物を弄ぶ。

「短小、包茎、早漏。そして、無限の性欲。これぞ好事家の女にとっては至宝と称えられる、美少年のダメダメちんちんってやつなのね」

ジュルつと涎が止まらんと言いたげに、ペラは口元を拭った。

それを見たシエスタが窘める。

「だ、ダメよ。この子は我が家の大事な跡取り息子なのよ。あなたの玩具になんかさせないわ」

「ケチ。それにしても汚いおちんちんよね。恥垢だらけじゃない。参謀殿が、ちゃんと洗ってあげないからいけないのよ」

「ぐっ、たしかにこれはだらしがない。オクタヴィア様に見せるのに、これはないわ。まったく、わたしがついてないとほんとダメな子なんだから」

シエスタは石鹸を手に取り泡立てると、亀頭部を握り締めた。

「あ、義姉さん、そんなところを握られたら」

「我慢なさい。あなたはマクスウェル家の跡取り息子なのよ。こんな垢だらけの身で、主君の側に侍るなど恥はづを知りなさい」

敬愛する姉に、剥き出しの亀頭部を無理やり洗われる。

綺麗なお姉様たちの裸に囲まれて、初剥きされた亀頭部を捏ね回されたのだ。

アーサーの逸物は狂ったように射精を繰り返した。

「あ、義姉さん、らめええ、そんな、ひいいい」

身悶え涎を噴き、白目まで剥いてしまった少年を、オクタヴィア、マルローゼは茫然と見守る。

「うわ、これはさすがにちよつと同情するわ」

ペラは肩を竦める。

しかし、自尊心を木っ端微塵に碎かれていく哀れな少年を見守る女たちの目は、どれも火を点したように爛々と輝いていた。

第二章 舐め犬調教

「では、お休みなさいませ」

風呂場にて騎士団の団長と三幹部にも玩具にされたアーサーは、金玉が空っぽになるまで射精するという醜態を晒した。

しかし、オクタヴィアは役職を変更しようとはせず、何事もなかったようにアーサーを小姓として召し使う気のようにだ。

出征の最中にそうそう編成を変えることはできないからだろう。代わりにオクタヴィアの衣類の洗濯は、マルローゼの仕事ということにされ、アーサーは触れさせてももらえないことになった。

とにかく解任はされなかったのだから、オクタヴィアの影のように付き従い、オクタヴィアが寝室に入ると、その扉を背に剣を抱いて、座り込む。

「はあく、やっぱ軽蔑されちゃったよなあ」

毛布を身体に巻きつけながら、アーサーは深く溜め息をつく。

神々しいまでに美しいオクタヴィアの脱ぎたてほかほかの生下着を渡された童貞少年が、無心でいられると考えるほうが不自然ではあるまいか。

思わず裏返して、女性の秘地との密着部分を確認してしまったのは不可抗力というもの

だ。

純白のショーツに、長い黄金の織毛が一本。明らかに陰毛と思われる物体が付着しており、縦皺もくつきりと残っていた。

いま思い出しただけでも、オカズにできてしまうような逸品だったのだ。

(いやいや、もう二度とオクタヴィア様を汚すようなことはしない)

煩惱を必死に振り払おうと、アーサーは毛布で顔半分ほどまで覆って、仮眠を取ること
に集中する。

そんな耳朵を、ひそかな吐息を打った。

「あ、ああ、ふむ……」

押し殺した声が背後の扉から聞こえてくる。

(あれ、オクタヴィア様、寝苦しいのだろうか?)

最前線の付け城の寝台である。もちろん、城内で一番いい部屋であり、いい寝台を用意
させてはいるだろうが、王宮で使いなれた寝台よりも落ちるのは当然であろう。

(枕が変わると、眠れないって人もいるらしいからな)

いくら女騎士の鑑といった顔をしていても、お姫様たる身である。戦場の寝台ではいろ
いろと辛いかもしれない。

同情はするが、アーサーにはどうすることもできないので、ただ慣れていただくのを待
つしかない。

「ううん、ふん……」

じつとしてしているアーサーの耳を艶めかしい吐息が襲う。一度気になりだすと、耳について離れない。

(なんだろう。うなされているんだらうか?)

最初は無視しようと思っていたのだが、どうしても気になって仕方がない。

(もしかして病気。慣れない土地に来たから、風邪をひいたとか?)

心配になってきたアーサーは、扉に耳をつけて、室内の様子を窺う。

「はあ、ああ、あん」

なんか艶めかしい声が聞こえてくる。

「ごくり……」

意味もなく赤面したアーサーは、思わず生唾を飲んでしまった。

主人のほうから何か用事があり、声をかけられたときに、すぐさま駆けつけられるように側に侍っているのだ。

こちらから声をかけるのは、小姓としての職権を逸脱する。しかしながら、主人が刺客に襲われたり、病気になったり、といった明らかに不慮な事態が起こったら、自主的に駆けつけるべきだ。

しかし、寝ているのを起こしてはまずい。いろいろ思い悩んだ結果、アーサーは小さな声をかけてみる。

「あの……オクタヴィア様、いかがあそばされました？」

「うん、ああん……」

艶めかしい声が聞こえるだけで、返事がない。

困ったアーサーは意を決した。恐る恐る扉を開き、主君の寝室を覗いてみる。

薄暗い室内。カーテンは閉まっているが、月明かりが少し入っているようだ。

最前線の城の一室である。いかに一国の王女、時期女王とも噂される人物とはいえ、そうそう広い部屋ではない。寝室という用途に相応しく、部屋の中央の一番目立つ場所にとんと寝台が鎮座していた。

薄い闇に目を凝らすと、白い肢体が横たわっている。

アーサーの位置から見ると、右手に頭、左手に足がある。そして、背中を向けて横たわっていた。

「……えっ!？」

大声を上げそうになるのを必死に我慢した。

アーサーの位置から見えるのは白い背中と、白い尻。そして、黄金の織毛。長い足といったものだった。

（オクタヴィア様って裸で寝るタイプの方だったんですね。ってなんでかけ布団をかけてないの？）

左肩を上にした背中だけとはいえ、白い肌が、汗でしっとり輝いている。

「ああ、ああ、あん……」

艶めかしい声を上げながら、白い裸体が、モゾモゾと動いている。

左手が胸元を揉みしだきつつ、右手を股間にあてがって激しく上下させている。

（も、もしかして!? お、オナニーしている!）

もちろん、女性の自慰を見たのは初めてであるが、知識としてなんとなく知っていた。

背中からとはいえ、オナニーしている女性から目が離せない。いや、背中だからこそ目が離せない。

もし、オクタヴィアがこちらを向いていたら、慌てて視線を逸らしたであろう。

しかし、背中からだからこそ、安心して魅入ってしまう。

（そ、そうだよな。オクタヴィア様といえども、生身の女性、肉体が疼く夜もあるだろう）
とはいえ、女性にも性欲はある、というのは理屈ではわかっている、なかなか実感で
きないお年頃だ。

まして、オクタヴィアは神々しい王女様であり、威厳ある団長であった。そんな女性が、
自決しているなど己が目で見ていても、信じがたい。

「ああ……もう、ダメ、イク、イっっちゃう、イク——」

ピクピクピク。

オクタヴィアの左肩が震えた。

（ぜ、絶頂した……?）

満足したらしいオクタヴィアが、ぐったりと仰向けになろうとしていることを察したアーサーは、慌てて細く開いていた扉を閉める。

(はあ……はあ……はあ……み、見なかったことにしよう)

好奇心は猫を殺すという言葉がある。アーサーは見てもならないものを見てしまった、と本能的に思った。

ぐったりと扉に背を預ける。

ここに至って、ズボンの中はグチョグチョであることを自覚した。どうやら、いつの間にか射精してしまっていたようだ。

(もうオクタヴィア様を汚さないって決意したばかりなのに、ぼくってダメなやつ)
アーサーはがっくりと自己嫌悪に落ち込んだ。

※

「アーサー、いるか？」

朝が明けた。背後の寝室からオクタヴィアの声がかかる。

「あ、はい。ただいま伺います」

呼ばれたらすぐに馳せ参じるのが側仕えというものである。すぐさま飛び起きたアーサーは、扉を開いて入った。

「っ!!」

そこにはオクタヴィアがいた。素っ裸で。

白く透けるような肌、ピンク色の乳首、黄金の織毛が朝陽にキラキラと輝いている。

(なんで裸？ そういえば裸で寝ておられたっけ)

反射的に昨晚の秘事を思い出してしまつて硬直するアーサーを他所に、オクタヴィアは部屋に用意してあつたスパークリングホワイトのショーツを手に取つた。そして、片足ずつ上げて足を通すと、ぐいっと腰まで引き上げる。

まるでアーサーなど気にしてない。貴人にとって側仕えのものは、家具と同じであり、羞恥心を感じる存在ではないのだ。

異性として意識されてないだけだ、とはわかっているが、童貞少年には刺激が強すぎる。(ち、乳首、綺麗なピンク色だ。いやいや、何魅入っているんだぼくは)

苦悶するアーサーに、ショーツ一枚姿のオクタヴィアが不思議そうに小首を傾げる。

「どうかしたのか？」

「いえ……それでなんの御用でしょうか？」

必死に平静さを装つたアーサーは、背筋を伸ばして質問する。

「ああ、すまんが着替えを手伝つてくれ」

「……は？」

「いつもはシエスタか、マルローゼにお願いしているのだがな。二人は不寝番をおまえに押しつけてしまったからな」

ショーツ一枚姿になつたオクタヴィアは、ついでスパークリングホワイトのブラジャー

を手に取ると、胸元に付けて、後ろ手にベルトを差し出す。

「背中のホックを留めてもらえるか？」

「あ、はい！ りよ、了解しました！」

驚きはしたが、主君の命令は絶対である。

アーサーは震える手を伸ばして、ブラジャーの留め金をつける。もちろん、ブラジャーなど着けたことがないから、勝手がわからず緊張したが、なんとか着させることができた。それからロイヤルブルーの軍服を纏い、その上に鉄板の全身鎧の装着を手伝う。

最前線の城といっても、総大将が戦闘をすることなどそうそうあることではない。しかし、総大将が鎧を付けないのでは、兵士たちの士気が緩む。

総大将は全軍に対するパフォーマンズとして、鎧を付けねばならないのだ。

「うん、ありがとう。助かった。どうもわたしは不器用でな」

「いえ、仕事ですから……」

オクタヴィアの着替えの手伝いをするなど、むしろ、ご褒美です、という本心は必死に隠して、堅苦しく応じる。

そこに腹心であるシエスタが入ってくる。

「オクタヴィア、用意はできた」

「ああ、たったいまな」

オクタヴィアは意味ありげに、アーサーを見る。それに釣られて義姉も、アーサーの顔

を見る。

「ちゃんと仕事した？」

「はい」

オクタヴィアの裸体にドギマギしていた、などと義姉に知られるのは格好悪い。

アーサーは気難しい顔を作って応じる。

「まあ、いいわ。では、朝食に行きましょう」

「わかった」

朝食は『戦乙女騎士団』の面々で取る。

それから將軍たちの待つ作戦指揮室に向かう。

總大將はオクタヴィアといっても、作戦の指揮監督のおぜん立ては、百戦錬磨の將軍たちが行う。

ずらりと居並んだ將軍たちにオクタヴィアが御下問する。

「それでドモス軍の動きはいかになっている」

「アレックス王太子殿下が、サジタリウス城に入り次第攻勢を開始することです」

「ふむ、それではこちらに敵の増援が来ることはないな」

そこにベラが、好戦的な表情で口を挟む。

「なら、こちらから打って出ようぜ」

顔を見合わせる將軍たちに代わって、シエスタが窘める。

「これはあくまでもドモスの戦よ。わたしたちは手伝いに過ぎない。好んで火の粉を浴びることはないわ」

「さよう。悪戯いたずらに戦火を広げることは得策ではありませんまい。いまは戦局を見るにしくはありません」

老将軍が窘めたので、オクタヴィアも頷く。

「ふむ、ならばいまま少し様子見だな」

「それがもつともよろしいと考えます」

会議がまとまったことで、ベラも不承不承ながら頷く。

もともと、景気づけに言ってみただけであり、本気で攻勢に出るつもりはなかったであろう。

その後も、伝令などの報告や、作戦会議の様子を見守る。

オクタヴィアは將軍たちの討論に口を挟むことや、作戦を主導することはないが、すべての情報に耳を傾ける。

オクタヴィアはいわば象徴として、そこにいることが重要なのだ。その直属の騎士団である『戦乙女騎士団』はあくまでも、オクタヴィアの親衛隊であり、護衛が主な任務である。

命令書などにもサインをしなくてはならないからオクタヴィアは忙しいようだが、アーサーたち配下にとっては、いささか退屈な一日は終わる。

「それじゃ、わたしたちはこれで」

「アーサー、夜伽番よろしくね」

取り巻きであるベラ、シエスタ、マルローゼと別れて、オクタヴィアは寝室に入る。

「はい。お任せください」

アーサーは昨晚と同じように寝室の扉に毛布をかぶって座る。

待つほどもなく、再び室内からごそごそとした物音が聞こえてきた。

アーサーは反射的に、そっと扉を細く開き、室内を覗く。

「……っ!？」

寝台は空っぽであった。

(あれ、オクタヴィア様がない)

戸惑った次の瞬間、扉が自動的に大きく開く。

扉にへばりついていたアーサーは、重心が前のめりになって、室内に転がり込む。

「うわ」

驚いて見上げると、扉の向かい側には、裸のオクタヴィアが立っていた。

「……あ、あわ、あわわわっ!？」

言葉もなく、酸欠の金魚のように喘ぐアーサーに、裸のオクタヴィアは肩を竦めて、溜め息をつく。

「アーサー。主君の、いや、女性の寝室を覗くのは紳士にあるまじき行為と、シエスタに

「習わなかったの？」

「も、申し訳ありません！」

裸の主君を前に、慌てたアーサーは土下座をする。

それを冷たく見下ろしてオクタヴィアは扉を閉めると、大股に歩いて、寝台に腰を下ろす。

「まあ、いいわ。こっちに來なさい」

「あ、はい」

寝台の縁に腰を下ろしたオクタヴィアは長い足を誇示するように、足を組み、その前の床を指差す。

アーサーに選択権はなく、言われたところに正座する。

「まったく、困った子ね」

オクタヴィアは豊かな金髪を、手でさらりと払う。

「それで何か言うことは？」

何をどう答えていいかわからなかったアーサーは、見たままのことを質問する。

「あの……オクタヴィア様、お召物は？」

「わたしは寝るとき、いつも裸よ。昼間は鎧で締めつけられているんだし、寝るときぐらいはゆっくりしたいわ」

「なるほど……」

納得したアーサーは、目のやり場に困って俯くが、目の前に美しい肢体を晒したお姉様がいるのに、視線を自由にすることができない。

意思の力に反して、視線が磁力に惹かれるように、チラリチラリと目の前のお姉様を見つめてしまう。

「うふふ、そんなにわたしの裸が気になるの？ この間、風呂場で見せてあげたじゃない」

「それはそうですけど、何度見ても飽きないといえますか……」

しどろもどろになっているアーサーを見下して、オクタヴィアは楽しげに笑う。

「あなたシエスタともお風呂に一緒に入っているんですよ。女の裸ぐらい見慣れているんじゃないですか？」

「そ、そんなことは……それにオクタヴィア様は特別ですし……」

「うふふ、かわいい♪」

不意に上体を前のめりにしたオクタヴィアは右手を伸ばすと、アーサーの頬を捕えた。

そして、オクタヴィアの顔が近づいてくる。

チュ!

唇を軽く奪われる。

「……え!」

茫然とするアーサーの鼻先で、頬を紅潮させたオクタヴィアは妖艶に笑う。

「うふふ、唾をつけちゃった」

「あ、ああ……」

夢のようというか、淫夢のような体験である。脳が沸騰してしまいまともな思考のできない青少年に、白い頬を染めたお姉様は舌舐めずりをする。

「わたしはシエスタを実の姉のように思っている。あなたのことも実の弟のように思っているわ。だから、裸を見られてもぜんぜん恥ずかしくないのよ」

「はあ……」

茫然としているアーサーの耳元で、オクタヴィアは甘く囁く。

「それに昨晚は、もっと恥ずかしい姿を見せてあげたでしょ？」

「な、ななななんのことでですか？」

思いつき思い当たってアーサーは、動揺を隠しきれずにおたおたと答える。

「オ・ナ・ニーよ♪」

「……っ!？」

絶句するアーサーを前に、オクタヴィアは楽しげに笑う。

「昨晚、あなたは風呂場でみんなの前であんなことになったから、男として自信を喪失しているかもしれないと思って、慰めるために恥ずかしかったけど、頑張ったのよ」

「あ、ありがとうございます」

主君に気を遣わせてしまって、アーサーは恐縮する。

「うふふ、お礼には及ばないわ。だってわたしの計算違いから、あのような事態になった

「んだしね」

「計算違い？」

戸惑うアーサーに、オクタヴィアは甘く囁く。

「ええ、わたしはこれでも知勇兼備の將軍と呼ばれているのよ。あなたに汚れた下着を渡したら、どう使うか、予想がつかなかったと思う？」

「……」

言わんとしていることを察してアーサーは絶句した。

つまり、生下着の洗濯係を仰せつかったところからして畏だったのだ。

「わたし、これでもドモス王国の貴公子たちにモテたのよ。でも、ドモスの男たちってどこか自信過剰で好きになれなかった。わたしは根っからのナウシアカ女なのね。ナウシアカの男じゃないと発情できないみたい。アーサーに性欲の対象として見られている、と想像しただけで、失禁しそうなほどに興奮するのよね」

「オクタヴィア様……？」

戸惑うアーサーに、かつて見たことがないほどに頬を火照らせたオクタヴィアは囁く。

「裸が見たいなら、見たいと直接言えばいいのよ。アーサーにはいくらでも見せてあげるわよ。それとも、触りたいのかしら？ わたしのおっぱい」

「いっ!!」

触りたくないはずがない。絶句するアーサーの手をオクタヴィアは取る。

「ほら、アーサーはわたしの弟同然なんだから、遠慮はいらないわよ。ほら、おっぱい、好きなだけ触って」

オクタヴィアに導かれるがままに、アーサーの両手はすっぽりとオクタヴィアの乳房を捕えてしまった。

ふわっと柔らかくしつとりとした媚肉が、掌に包まれる。極上の触り心地だが、なんでこのような事態になっているのかわからない。まるで淫夢でも見ているかのようだ。

「あ、オクタヴィア様、なんでこんなことを？」

「アーサーはシエスタから、わたしが預かった小姓よ。預かった以上、わたしが責任を持つて一人前の男に育てる必要があるわ。そのための修行と思いなさい」

「修行……ですか」

いまだにいま一つ釈然としていないアーサーを、オクタヴィアは追い立てる。

「修行なんだから、頑張りなさい。どう、わたしのおっぱいの触り心地は？」

「や、柔らかいです」

「揉んじゃってもいいのよ」

それは「揉め」という命令に他ならない。

アーサーは恐る恐る至高の柔肉を揉み込んだ。

「あ、もう、アーサーったら、宝物でも愛でるみたいにおっぱいに触るのね。もっと乱暴に扱っていいのに。わたしはシエスタと違って優しいわよ」

そう言われても、どう扱っていいかわからない。

「もう、わたしが一から教えてあげないといけないのね。いいわ、わたしはあなたの主人。全部、面倒を見てあげるわ」

オクタヴィアはアーサーの耳元で囁く。

「ほら、おっぱいの先っぽにあるぼっちを啜えなさい」

「し、しかし」

「あら、わたしは主人であなただは小姓よ。主人であるわたしの命令に逆らうの？」

オクタヴィアの上から視線が怖い。実際、啜えなくなかったわけではない。いや、啜えたくて仕方がなかったアーサーは、両手で両の乳房を持ったまま、目を瞑って、左の乳首を口に含んだ。

「チュー……」

「あん♪」

乳首を吸引されたオクタヴィアは、ガクンと首を後ろに反らした。

「ああ、お、おっぱい、吸われるの、気持ちいいいい♪」

普段、凛々しくも美しい姫将軍の上げている声とは思えない、なんとも官能的な嬌声であつた。

気をよくしたアーサーは、両手に持った乳房を揉みしだき、その頂を飾るピンクの乳首を、交互に吸った。

乳頭がみるみるうちに勃起し、凶器のようにそそり立つ。

チュツ、チュツ、チューツ。

「あ、そんなに、強く吸われても、母乳出ないわよ。でも、凄い。出ちゃいそう♪ おっぱい吸われるのって、こんなに気持ちいいのね♪ ああ〜ん♪ 気持ちいい♪ 気持ちいいの♪」

誘惑した年下の少年に両の乳首を、吸い取られるほどに吸われたオクタヴィアは、あれもない嬌声を張り上げて乱れた。

「ああ、アーサーに、アーサーに、乳首吸われていつちやう、イク、イク、イク〜」

嬌声を張り上げていたオクタヴィアは不意に静かになると、アーサーの手を乳房から切り離れた。そして、両腕で頭を抱き締めてくる。

「はあ、はあ、はあ、もうアーサーったら、激しいんだから……」

「すいません」

反射的に謝るアーサーの頭を抱きつつ、オクタヴィアは首を横に振るう。

「ううん、いいのよ、アーサーになら。でも、アーサーはわたしのおっぱいだけで満足なの？」

「え？」

戸惑うアーサーに、顔を真っ赤にしたオクタヴィアは、裏返った声を出す。

「そ、その……お、オマ○コとか見たくない？」



「そ、それは……」

「それとも、アーサーは下着が好きなだけで、わたしのオマ○コは直視したくないの？
どっち？」

このような選択肢を提示されたら、答えは一つしかない。

「見たいです！ オクタヴィア様のオマ○コ！ 隅々まで全部、奥の奥まで余すところなく見たいです！」

思わず叫んでしまったアーサーに、オクタヴィアは酔を飲んだような顔をする。

「わたしのオマ○コを、そんなに見るつもりなのか？ もう、本当にスケべなんだな。でも、いいわよ。わたし、アーサーの前でなら、どんな恥ずかしいこともできそう」

赤面しながらも、まんざらではない、といった表情を浮かべたオクタヴィアは寝台に座ったまま、両足をゆっくりと開く。

二本の白く長い足の中央。黄金の繊毛に覆われた陰部が、アーサーの視界に入った。

「うふふ、そんな凝視しなくても、いいのに……いま見せてあげる」

照れ笑いを浮かべながら、オクタヴィアは両手を陰部に下ろして、黄金の繊毛を掻き分ける。

中には半ば閉じた褐色の陰唇があった。

その左右に人差し指と中指が添えられ、くぱっと開かれる。

「さあ、よく見なさい。アーサーの見たがっていたオマ○コよ。隅々まで余すところなく、

奥の奥まで」

「……」

言われるまでもない。アーサーは目を皿のようにして陰唇を見つめた。

視線に質量を発生させることが可能なら、オクタヴィアの股間には穴が空いてしまったことだろう。

年下の無邪気に慕ってくる少年を前に、女としてもつとも恥ずかしい姿勢を取ること、淫らな気分には酔いしれているのだろう。

いつもは雪像のように白い肌が、いまやピンク色に火照り、口元からも熱い吐息が漏れている。

「はあ……はあ……はあ……シエスタは、こういうことしてくれなかったの？」

「はい。その、義姉さんとは、あくまでお風呂に一緒に入ることがある、というだけですから」

「そう、なら、わたしが女のことを教えてあげる。さあ、よく見なさい」

両の足の踵を寝台の縁にかけたオクタヴィアはM字開脚になると、両手の人差し指と中指を肉裂の左右にかけて、思いっきり広げてみせた。

「驚いた？ オマ○コってこんなに剥けちゃうのよ」

「……」

ローズピンクの媚肉が眩しい。圧倒されたアーサーは言葉もなくコクコクと頷く。

「この突起がクリトリスよ。知っているでしょ。女の急所よ。皮に包まれているでしょ。アーサーと同じ包茎よ。この下の穴ぼこがヴァギナ。おちんちんを入れる場所。ああ、これは思った以上に恥ずかしい。ああ、でも、アーサーに全部見せているんだ、と思うと気持ちいい♪」

露出の歡びというやつであろう。年下の無垢な少年の前で、すべてを晒すことで女体は電流でも走っているかのような痙攣を起こしている。

「はあ、はあ、はあ……それでどお、わたしのオマ○コを見て何か感想はある？」

「凄い濡れています」

「ああ、そうね。濡れているわね。でも、これ、おしっこではないからね。勘違いしてはダメよ。知っているわよね。これは愛液よ。女も濡れるのよ」

こんな大胆なことをしておいて、愛液をおしっこと勘違いされるのが恥ずかしいのか、妙に焦っているオクタヴィアが可愛い、とアーサーは思ってしまった。

「それじゃ、触っていいわよ」

それは触れ、という命令であろう。

M字開脚をしているお姉様の前で床に正座をしているアーサーは、まずは右手を伸ばすと、包皮に包まれた淫核を抓んだ。

「あん♪ いきなり、そこ!？」

ピクンっとオクタヴィアの腰が跳ねたので、アーサーは慌てて手を放す。

「すいません。ダメでしたか？」

「いいのよ。好きに触って。わたしアーサーになら、何をされても怒らないわ」

「はい」

憧れというか、信仰に近い敬愛の念を持った忠義の対象である。

そんな女性の陰唇に触れてしまったアーサーは、興奮に頭をクラクラさせながら、今度は右手の人差し指を、瞳孔へと突っ込んだ。

「あひっ！」

ピクンとオクタヴィアの身体が震えて、悲痛な悲鳴を上げたものだから、アーサーは慌てて再び謝る。

「すいません」

「いえ、教えておかなかった私が悪いわね。そこにはね、処女膜があるの」

「処女膜!？」

驚愕するアーサーに、オクタヴィアは不快そうな表情を浮かべる。

「あら、意外そうな顔をしているわね。わたし、まだ処女よ」

こんな大胆な誘惑をしてくるお姉様が、処女とは予想もしていなかった。

戸惑うアーサーに、オクタヴィアは少し口元を尖らせる。

「まったく、主人を疑うなんて、不遜な小姓ね」

「いや、そういうわけでは……」

慌てるアーサーに、オクタヴィアは気を取り直したように笑った。

「いいわ、証拠を見せてあげる」

「証拠ですか？」

「処女膜を見せてあげるわ」

そう言ったオクタヴィアは、両手の指先を膣孔の左右に添えて、豪快に開く。

「さあ、よく見なさい。わたしが生娘だという証よ」

オクタヴィアの膣孔の奥には、ピンク色の膜状のものがたしかにあった。

薄い粘膜には三つの孔があり、三つ穴状処女膜という形である。

「どう、わたしの処女膜は見えた？」

「はい。凄い綺麗です」

「ありがとう。わたしがこんな恥ずかしいことをしたのは、アーサーの前が初めてなのよ。少しは感謝して欲しいわ」

そう言ってオクタヴィアは陰唇から手を離れた。

「はい。感謝しています」

「素直でよろしい。アーサーとこうやってラブラブできるなんて夢みたいね。ドモスにいらるときは寂しかったわ。国元でアーサーにいい子ができちゃうんじゃないかって、気が気でなかった。でも、わたしがこうやってアーサーに女を教えるあげられている。あ、無駄話が過ぎたわね。ほら、再開しなさい。いや、待って。指だといろいろと難しいようだか

ら、舐めてちょうだい。その……そ、そこはその、おしっこするところだし、汚いと思うけど、で、できるわよね」

「はい。オクタヴィア様に汚いところなんてありません！」

小水だって嬉々として飲みそうなアーサーは、なんの躊躇ためらいもなくオクタヴィアの陰唇に顔を埋めた。

「く、臭くない？ わたしのオマ○コ」

「いえ、いい匂いがします」

さすがに恥じらうオクタヴィアの陰唇を、アーサーは夢中になって舐める。

ピチャピチャピチャピチャ……。

「ああん、そんな飢えた獣のように貪らなくても、ああ、歯は立てちゃダメよ。それ以外は何してもいいから♪ ああ、そこいい♪ あ、自分の指で触れるよりも、何倍も気持ちいい♪」

クンニリングス。女にとって、ある意味、セックス以上に気持ちいい行為の一つだという。

オクタヴィアは寝台に後ろ手をついて、のけぞり、両足でアーサーの頭を挟んだ。

「あ、そんなに勢いよく、むしゃぶりつかなくても、ああ、舌、アーサーのペロ。凄い回転している。ああ、凄い、気持ちいい♪ ああ、これ癖になる。これ覚えたら、もう忘れられない。わたし、アーサーに舐めてもらわないと、もう満足できない女になっちゃった

かも♪」

凛々しい姫將軍も、クンニリングスされているときには理性が飛んでしまっているらしい。

我を忘れた嬌声を張り上げる。

「もう、イク、イク、いっちやう、イクウウウウ!!!」

牝叫びと同時にアーサーの頭を突き飛ばしたオクタヴィアは、そのまま寝台の上で仰向けになった。

「はあ、はあ、はあ、いっちやう。アーサーにイカされちゃった。職権を濫用して、お気に入りの可愛い小姓に、オマ○コ舐めさせてイってしまふなんて、これぞ世にバカにされる淫乱女貴族というやつね……」

絶頂の余韻とともにオクタヴィアは軽い自己嫌悪に陥っているようだ。

「オクタヴィア様、大丈夫ですか？」

「ええ、こんな体験初めてよ……」

トロンとした視線を送ってくるオクタヴィアを見下ろして、アーサーもまた満足する。「それはよかった……くっ」

思わずアーサーが痛恨の呻きを漏らしてしまったことを、オクタヴィアは聞き咎めた。

「あら、どうしたの？」

「い、いえ、その……」

アーサーは自らの股間を押さえて、脂汗を流す。オクタヴィアが不審そうな顔をする。

「何を隠しているの？」

「いえ、そのなんでもないです……」

オクタヴィアの視線が自分の下半身に向いていることを悟ったアーサーは硬直し、冷や汗を流す。

「なんでもないはずないでしょ。見せなさい」

「いや、これは……っ!」

「いまさら、アーサーとわたしの仲で隠しごとはなしよ」

実の姉。いや実の姉よりも親近感を持つ女性とはいえ、いや、親近感を持っているからこそ、いきり立つ逸物を見せるのは恥ずかしい。

「さあ、観念しなさい」

ただでさえ童貞少年にとって、綺麗なお姉さんというのは、逆らいがたい権威である。その上司からの命令という形を取られたのでは、アーサーに抗弁する余地はなかった。

オクタヴィアの手によって、ズボンと下着が引きずり降ろされる。

ピョンツと元気よく逸物が跳ね上がった。

それをしげしげと観察したオクタヴィアは、楽しげに笑う。

「まあ、グチョグチョね。これってもしかして、もう出してしまったってことなの？」

「それは……はい」

恥ずかしいがもはや隠しようがない。アーサーは肩を落として認めた。

クンニしているうちに、我慢できず、いや、我慢する暇もなく射精していたのだ。

「もう、だらしのない子ね」

呆れた、と言いたげに溜め息をついたオクタヴィアは、寝台から身を起こした。

「ほら、ここに座りなさい」

オクタヴィアに代わって、今度はアーサーが寝台の縁に腰を下ろす。

その前に屈み込んだオクタヴィアは、嬉々としてドロドロの逸物を手に取った。そして、軽く上下に扱いた次の瞬間である。

プシャッ!

白い飛沫がオクタヴィアの顔にかかった。

「えっ、アーサー、また出したの……って、あら？」

ドクンドクンドクン。

オクタヴィアの手の内で逸物は脈打ち続け、先端からはとめどなく白濁液が溢れ続けている。

「これって、射精しているわよね？」

「はい……」

恥じ入りながらもアーサーは認めた。

逸物を握るオクタヴィアの手の上にこんもりと白濁液が溜まっていた。いや、溜まり続

けている。

「発情期の犬よりもだらしのないおちんちんね。うふふ、でも、美味しそう♪」

満足そうな顔でピンクの舌を伸ばしたオクタヴィアは、自らの手に付着した液体を舐めた。

（あ、飲んでいる？ ぼくのザーメンをオクタヴィア様が飲んでる♪）

申し訳なさと歎びで、頭がどうにかなってしまいそうだ。

プシャッ！

さらにオクタヴィアの顔にかかる。いまさら顔にかけられても怒りはしなかったが、痴情に狂ったお姫様もいささか呆れたようだ。

「少し悪戯するとすぐ出ちゃうのね。こんなに出したら、身体に悪いと思うわ。わたしのせいで干からびてしまったら、さすがに寝覚めが悪いし、今日はこの程度にしておきましようか？」

「え、そんなあ……」

「あ、そうだ。これならどうかしら？」

不意にオクタヴィアは部屋にあった紙で紙繕こよりを作ると、逸物の根元を縛り上げた。

「え、オクタヴィア様、こ、これは……!？」

「根元を縛ってしまえば、出したくとも出せないでしょ」

「は、はい……」

自他ともに認める早漏である。

無様に暴発させる心配がなくなったのは嬉しいが、嬉しくないような気もする。

「どお、少しは落ち着いた？」

「は、はい……」

出したくても出せないというだけで、落ちついた、というのとは少し違うと思うが、オクタヴィアの言い分には逆らえない。

「今度はわたしが気持ちよくしてあげるわ。わたしだけ気持ちよくしてもらったのでは不公平だからね」

そうなたまったオクタヴィアは、アーサーの上に覆いかぶさるようにして四つん這いになると、首まわりに接吻した。

それから鎖骨。そして、腕を上げさせると、腋の下を舐め。さらには乳首を舐めしやぶる。

「あはっ、やっぱり、男の子も乳首を突起させるのね。可愛いわよ、アーサー♪」

恍惚とした笑みを浮かべたオクタヴィアは、勃起した男の乳首を夢中になって舐めしやぶる。

（うう……男なのに、乳首を舐められて感じるなんて、恥ずかしい。でも、気持ちいいよお♪）

男としての矜持と肉体的な快楽の間で身悶えるアーサーを見下ろして、オクタヴィアは

目を細める。

少年の自尊心を存分になぶったお姉様は、さらに下半身に移った。

そして、紙縫りに縛り上げられた逸物を愛しげに手に取る。

「うふふ、可愛いおちんちんだわ。これをオマ○コの中に入れるのを、セックスというのよ。わたしの中に入れていい？」

「はい！」

「ほんと素直ね。でも、今夜はダメよ」

思わず泣きそうな顔になるアーサーを見下ろして、オクタヴィアは笑う。

「だってアーサーだったら、すぐ出しちゃうんだもん。そんなんじゃ入れられないわ」
自分の早漏が恨めしい。

「うふふ、そんな絶望しなくていいわよ。アーサーになら、わたしの初めてをあげてもいい。いや、あげたい、と思っているんだから。でも、その前にまだまだ精進が必要ね」

「はい。頑張ります」

「うふふ、まだまだ対陣は続きそうだし、じっくりと楽しませよう♪」

そうなたまったオクタヴィアは、舌を伸ばし、亀頭を包む包皮を完全に剥き上げる。
チロチロチロ。

舌先が愛しげに亀頭部を舐め回す。

「はうう!!!」

強すぎる刺激に、亀頭といわず全身が痙攣する。

本来ならば射精していたところだろう。しかし、肉筒の根元を紙縊りで縛られているから、噴出することはない。

そんな様子にオクタヴィアは嗜虐的に笑う。

「わたしがあなたを育ててあげるわ。どこに出しても恥ずかしくない。一人前の男にね。そして、入れられた女は、みんな腰を抜かしておちんちんの奴隷になっちゃう。そんな凄いいちんちんにわたしが育ててあげるわ。だから、すべてわたしに任せておきなさい」

そうのためったオクタヴィアは、アーサーの腰を上げさせた。そして、股を開かせる。俗にチングリ返しという姿勢である。

オクタヴィアの舌先が、爆発したくてもできない肉袋の中身。二つの睾丸を舐め回す。

「あひっ」

気持ちいい。処女で欲求不満なお姉様に弄ばれる少年は、ただただ喘いでいた。

オクタヴィアの舌先は、蟻ありの門とわた渡りを通して、肛門に達する。

ピチャ。ピチャ。ピチャ。

「あ、そんな、汚い」

美しいお姉様の舌先で、人間のもっとも汚い部分を舐められるのは申し訳ない気分になる。

しかし、肉体的にはどうしようもなく気持ちよかった。

悶える少年と、弄ぶお姉様の視線が、逸物越しに正対する。

プラチナブロードの絹のような艶やかな顔、繊細でありながら、鋭角な顔立ち。切れ長の瞳の奥で輝く、力強い藍晶石の瞳。口元は大きく薄い唇はピンク色に輝いている。

近くで見ると、しみじみ美人である。

「あ、あの……オクタヴィア様」

「なに？」

「もう、苦しいです」

綺麗なお姉様に弄ばれて、少年の哀れに赤剥けた逸物は爆発したがっている。しかし、できないのだ。

ついに耐えかねて懇願してしまった少年の肛門を舐め穿りながら、いきり立つ逸物を手で扱くお姉様は冷淡だった。

「これは修行なんだから、苦しくてあたりまえよ」

「は、はい……」

やむなくアーサーは頷く。

射精のできない逸物を、オクタヴィアは実に美味しそうにしゃぶっている。

「うふふ、今日は垢がついてないな。可愛い」

剥き出しの亀頭部を、ペロリペロリと舐める。

そして、泣きそうな少年の顔を見て、さすがに罪悪感を覚えたようである。

「そんなに出したいの？」

「は、はい。おちんちん爆発しそうで……」

「うふふ、もう少し我慢しなさい」

嗜虐心を刺激されたのかオクタヴィアは、さらに愛しげに亀頭部を口に咥えようと、尿道をチュウチュウと吸った。

「あひいいいい」

爆発したくても爆発できない逸物を持って余し、アーサーの理性は飛んだ。

ついに恥も外聞も投げ捨てて、泣きながら懇願する。

「も、もう、らめです。お願いします。射精させてくらさい」

舌足らずになってしまったアーサーの様子から、只事ではないと察したのだろう。オクタヴィアは顔を上げる。

「仕方ないわね。今日はこの程度で勘弁してあげようかしら？」

「あ、ありがとうございます」

「アーサーは今後、わたしの忠実な舐め犬になる、と誓うのなら、これを解いてあげる」
オクタヴィアの織手が、逸物をきつく縛った紙繕りにかかる。

「ち、誓います。ぼくは、オクタヴィア様に命を捧げると決めているんです。おしっこだつてなんだって飲んで飲みます」

「こら、さすがにわたしはそこまでしないわよ。でも、そうか、アーサーはわたしのおし



つこを飲みたいんだ……。考えておいてあげる。さあ、いまは気持ちよく出しなさい」
オクタヴィアは紙縫りを解いた。

「はああああ〜!!!」

安堵すると同時に、根元で止められていた熱い昂りが、一気に肉棒を駆け上がる。

ちなみに寝台に仰向けになり、アーサーは腰を高く翳して、足を開いたチングリ返しの姿勢である。

これで蛇口の栓を取られたのだ。

ドッパン！ ブシュブシュブシュ!!!

溜まりに溜まったフラストレーションが爆発したのだ。その解放感はかつてないものであった。

理性を失ったアーサーは、乙女が絶頂しているときよりも、なお艶めかしい声を上げてしまう。

そして、熱い飛沫が、自分の顔にかかる。

「うふふ、こんなにいっぱい出して、しょうのない子ね♪」

アーサーの惨状を見下ろしたオクタヴィアは、愛しげに目を細めると、その顔や胸元にかかった少年の残滓を丁寧に舐め清める。

「アーサー、今日からあなたはこの寝台で、わたしと一緒に寝るのよ」

「え、しかし、それは恐れ多いです」

慌てるアーサーを、オクタヴィアは窘める。

「小姓は主人の身の回りにいる義務があるのよ。より近くにいてくれたほうが何かと便利でしょ」

「それはそうでしょうが……」

不意にオクタヴィアは両腕を伸ばすと、アーサーの頭を抱き寄せた。
むにゅ。

アーサーの顔が、豊麗な双丘の谷間に沈む。

「温かい。アーサーはわたしの最高の抱き枕だよ」

綺麗なお姉さんの乳房の谷間に、少年の顔が埋まる。

(ああ、頬に当たるプリンプリンの感覚。それに汗のいい匂い)
この誘惑に耐えられず、アーサーはそのまま眠りに落ちた。

第三章 暇潰し

「あゝ……暇だわゝゝ」

戦乙女騎士団の副将であるペラが、軍議の机に上体を突っ伏しながらぼやく。

オクタヴィアたちがガルータ城の付け城に入って、はや一週間が過ぎようとしていた。

薔薇の香りのするお茶の入ったティーカップの取っ手を小指を立てながら持ち上げ、香りを味わう参謀のシエスタが受ける。

「これぞ最前線の無聊むりようというやつね」

「……」

魔女のマルローゼに至っては、軍議の席で分厚い事典のような書物を広げて黙々と読書している。

「ドモス軍のやつらはまだ進撃しないの？」

「そろそろ、アレックス殿下がサジタリウス城に入ったころよ。もうすぐ動きがあるでしょ」

「あたしら絶対、来るタイミング間違ったわよね。早すぎたよ」

ペラのぼやきを、シエスタが窺める。

「そんなことないわよ。実績作りのために早く来ておくにこしたことはないわ。血を流さ

ないでアピールできるんだもん。早く来ておいて正解よ」

「はあく、そんなもんかね、あく、そういえば、ユーディ姫がアレックス殿下の恋人になったという噂があるんだけど……」

「噂よ、噂。あの王子様には例のおっかない女がびったりと張りついてるんだし、他国の女は近づけないわよ」

そんな弛緩しきった空気の中で、一人堅苦しい鎧を着て、硬い表情を作っていたオクタヴィアが提案した。

「一旦、休憩としよう」

「賛成……」

騎士団のみなは、三々五々に散っていく。

オクタヴィアも席を立つたので、アーサーはついていく。

小姓である。いついかなるときも離れないのが仕事だ。

それはトイレであっても変わらない。「人間がもつとも無防備になるとき、睡眠、風呂、排泄のときは特に注意しなさい」とシエスタから硬く申し付けられている。

トイレに行くんだろうな、と漠然と思いつき従っていると、不意にオクタヴィアは、自らにあてがわれている部屋に入った。

「……っ」

部屋に入ると同時にアーサーを部屋の壁に押しつけたオクタヴィアは、有無を言わず

に唇を重ねてくる。

驚く間もなく、オクタヴィアの右手が、アーサーの股間をまさぐる。

「あ、あの……オクタヴィア様」

「うふふ♪ 真っ昼間からこんなに大きくなって……もうアーサーったら、節操がないんだから♪」

切れ長の目元に、藍晶石の瞳。細く高い鼻梁に、大きな口元に薄い唇のお姉様に至近距離から睨まれる。

「す、すいません」

「昨日の晩、あんなにいっぱい出させてあげたのに、一晚経つともうこんなにしちゃうなんて、アーサーはエッチね♪」

「も、申し訳ありません」

エッチなのは、オクタヴィア様のほうです。とは口が裂けても言えないアーサーであった。

この付け城に入ってからというもの、オクタヴィアの寝る前の習慣は、小姓であるアーサーを絞り取れるだけ絞り取ることである。

フェラチオやテコキ、素股で、アーサーを射精に促す。それも一発二発ではない。文字通り、最後の一滴まで絞り取り、完全にふにゃちんにしてから、アーサーを抱いて眠る。

これだけ痴女っぷりを発揮しながらも、最後の一线は越えていない。王女としての節度

なのか、根が真面目なゆえなのか、アーサーには窺い知れない。

意のままになるアーサーを愛玩動物のように可愛がり、性的好奇心と性欲を満たしているようである。

「こんなに大きくなってしまったら、仕事に支障が出るわね。一発抜いてあげる」

「えっ、こ、ここでですか？」

思わず出たアーサーの迷惑そうな声に、オクタヴィアは表情を険しくする。

「なに、主君に逆らうの？ せっかくわたしは修行に付き合っただけで、というのに」
「どうやら、オクタヴィアも相当に暇を持って余っていたらしい。」

「いえ……そんな。ありがたいです」

その言葉にウソ偽りはない。オクタヴィアとエッチな遊戯に耽溺たんできするのは楽しかった。

普段はクールな姫將軍を演じるオクタヴィアの陰唇を、舌が疲れて痙攣するほどに入念にクンニをして、身も世もないアへ面を晒させる。これこそアーサーしか知らないオクタヴィアの素顔だ。男として優越感を覚えている。

「ここに座りなさい。頭はここ」

部屋にあった長椅子に腰を下ろしたオクタヴィアは、長い足を蟹股に開く。

クンニをしろ、ということかな、と思って顔を近づけようとする、オクタヴィアが訂正した。

「顔を向こうよ。頭を乗せなさいと言っているの」

今日はいったい、何をするつもりおつもりなのかな？ と内心でおっかなびっくりしながらもアーサーは、指定された位置に腰を下ろすと、後頭部をオクタヴィアの陰部に預けた。

「うふふ♪ 靴を脱がせて」

「了解しました」

アーサーの頭髪を樂しげに撫でたオクタヴィアの命令に従って、アーサーは左右に伸びた美脚から軍靴を脱がす。

「ありがとう。それじゃ、アーサーのだからしないおちんちんに修行を付けてあげるわ」

長い足でアーサーの胴体を挟んだオクタヴィアは、両足の裏で逸物を挟んだ。

「まったく、もうこんなに大きくしちやって、アーサーったら、節操がないんだから♪」
非難しながらも、その口調はとっても嬉しそうである。

「うふふ、剥いてあげる」

オクタヴィアは器用に、両足の親指を使って、亀頭部の包皮を剥いていく。

「あう」

足で逸物を弄られるのは屈辱ではあるが、オクタヴィアにやられるのなら、それすらも歡びである。

「ほらほら、どんどん剥ける」

赤剥けた亀頭部が外界に露出する。オクタヴィアにすっかり剥き癖をつけられてしまっ

た。

「あはっ、こんなに腫れ上がっちゃって……痛いのか？」

「はい。痛いです……」

アーサーは素直に頷く。

「我慢なさい。これも修行よ」

「はい」

逸物を悪戯しているオクタヴィアは実に楽しげである。

(まあ、オクタヴィア様が喜んでくれるならいいけど……ぼくだって気持ちいいし)

とは思うものの、人間何事も慣れるものである。当初こそ物凄い興奮した淫らな遊びも時間とともにマンネリを感じないわけではない。

(どうせなら、もう一段進んで、オクタヴィア様のオマ○コの中におちんちん入れたいなあ)

という本心がないと言えばウソになるであろう。しかし、アーサーの口からそれを言うことはできない。

所詮は主君と小姓である。主導権はオクタヴィアにあり、アーサーはその性欲処理係でしかないのだ。

「うふふ、昼間っからこんなにいっぱい汁を出して、だらしないおちんちんだわ♪」

「すいません……」

シコシコシコシコ。

綺麗なお姉様の足の裏で挟まれた逸物が扱かれ、擲擲される、そんな性的な苛めに耐えているところに、いささかパツが悪そうな声が聞こえた。

「あちやう、お楽しみの真つ最中だったか」

顔を上げるといつの間にか、部屋には副将のペラが入室しており、右手で頭を押さえていた。

「えっ!? ペ、ペラ! これは違うの、これはその……」

お遊びに熱中していたオクタヴィアも気付かなかつたらしく、従姉に秘事を見られて動揺を隠せない声を出す。

そして、ようやっと言い訳を思いついたらしい。

「そ、そう……修行よ、修行。アーサーのおちんちんつてとっても、緩いの。ちよつと弄つただけでピューピュー出しちやうから。少しは我慢強くしてあげようと思ってね」

「まあ、いいけどな」

必死すぎる従妹の、苦しすぎる言い訳を受けたペラは、苦笑を浮かべながら肩を竦める。「別に咎めだてするつもりはないさ。オクタヴィアが、アーサーに不寝番をさせろ、と言つたときから、こういうことするつもりだな、ということはわかっていたわけだし……」

「え、そ、そんなことは……」

あたふたと言ひ訳を続けようとする従妹を、ペラは片手で制すると、オクタヴィアの右

側に腰を下ろす。

「同じ女同士だ。王女に性欲はないなんて、寝言を言うつもりはないし、可愛い男の子のおちんちんをしゃぶり尽くしたい、という気持ちは理解できる」

「しゃ、しゃぶり尽くすだなんて……」

声を裏返したオクタヴィアだが、否定はしなかった。実際、間違いなくしゃぶり尽くしていた。そのことは被害者であるアーサーが誰よりも知っていた。

「というか、その様子じゃ、まだやってなかったんだ。あたしはもうとっくにできているんだと思っていた」

「いつ」

引き攣るオクタヴィアを他所に、ベラは部屋の外に呼びかける。

「シエスタだって、そのつもりでアーサーを差し出したんだろ」

「まあね」

やれやれ。まったくヤボなんだから、と言いたげな顔で、シエスタも入室してきた。

「シエスタこれは」

「義姉さん！」

爛れた関係を見つかったら一番ヤバイ相手だ、ということを実感していたオクタヴィアとアーサーは青くなる。

シエスタは右手で眼鏡のつるを直しながら口を開く。

「主君の手がついた家臣は、お手付きといつて、出世間違いなしなんだからね。我が家としては何歳よ」

「えっ」

義姉の打算的すぎる言葉に、思わず引くアーサーを前に、シエスタは握り拳を作つて力説する。

「オクタヴィア様の婿として、ナウシアカ王家の種馬になるもよし、オクタヴィア様を嫁に迎えるもよし、どちらにしてもマクスウェル家としてはこの上ない誉れよ」

戦慄する当事者たちの顔を見て、シエスタはわざとらしく、口元を隠して笑う。

「おほほ、冗談ですよ」

（目が笑つてない……）

アーサーの頬に冷や汗が伝う。そこにペラが口を挟む。

「でも、若い男にハマった女つて、最初こそ有利なだけで、すぐに立場は逆転。ドロッド口に墮とされる、というのはよく聴く話よ」

「いい、アーサー、あなたはオクタヴィア様を骨抜きにする覚悟で奉仕しないとダメよ。テクニクに自信がないなら、わたしが練習台になってあげるわ」

「いや、ちよつと義姉さん……」

冷や汗を掻くアーサーの後ろで、オクタヴィアが声を荒らげる。

「おまえたち、わたしをからかって楽しんでるだろ」

シエスタとペラは悪びれずに応じた。

「あら、主君の幸せを願うのは、家臣として当然のことですわよ」

「うんうん。二十歳過ぎた従妹が未だに処女なのは恥ずかしいなんて思っていないわよ」

「お〜ま〜え〜ら〜」

オクタヴィアが怒気をあらわにして、コンコンとのノックがあり、マルローゼがのっそりと入ってきた。

「失礼します。……っ!」

マルローゼは部屋の惨状に立ち尽くす。

オクタヴィアがアーサーを背後から抱き締めて、両足で逸物を挟んでいるのだ。ペラは思わず額を押さえた。

「あちやく、マルローゼには少しショックな光景だったかも……」

「なんでわたしが……」

恨みがましい顔で睨むマルローゼに、ペラは肩を竦める。

「あんた、好きだったんでしょ。アーサーのことを割と本気で♪」

「えっ」

思わずアーサーは、マルローゼの顔を見る。

眼つきの悪い色白の少女は、きつと年上の同僚を睨み返す。

「……べ、別に……わたしのことをからかうと、呪うわ」

「はいはい。怖い怖い。それで何か用があったんじゃないのか？」

ここに至ってマルローゼは、自分がここに来た理由を思い出したようだ。

「敵に動きがあったって」

「おお、すわ、決戦かつ!!」

ペラは勇み立った声を上げたが、それは単なる願望というものだろう。

それでもオクタヴィアは表情を厳しくして応じる。

「すぐに行く。支度を手伝ってくれ」

側近たちにレッグアーマーを付け直してもらったオクタヴィアは部屋を出る。

それに付き従うアーサーにのみ聞こえるような小さな声で、マルローゼはぼそつと呟く。

「……色小姓」

「え……？」

思わず振り返ったアーサーに、マルローゼは嫌味つたらしく言う。

「あなたに相應しい呼称でしょ」

「ぐっ」

言われてみればまさにそうだ。

自分はオクタヴィアの単なる愛玩動物でしかない。それと自覚して、なんともいたたまれない気持ちになった。

(色小姓か……)

オクタヴィアとエッチなことをしているのは楽しい。しかし、それだけではダメだと思う。なんとかして、オクタヴィアに相応しい男になりたい。

そんな願望が胸のうちに沸々と滾ってきた。

※

「いつまでも城に籠もった穴熊ども、我と思わんやつは出てきて、我と立ちあえ！」
付け城を前に単騎、黒き馬を出していたのは、薄手の黒き鎧をスラリとした肢体に纏った女騎士であった。

顔には頬当てを付けている。

それを眺望したオクタヴィアが苦々しく口を開く。

「あれは、この間の騎士か」

「御意」

傍らに立ったシエスタが真面目に頷く。

腕組みをしたペラが楽しげに応じる。

「どうやら、長い対陣に飽きたのは敵さんも同様らしいな」

「相変わらず元気なことね」

シエスタは野蛮だと言いたげに眉をひそめる。

一騎討ちで、戦争の勝敗が決まるはずがない。勝敗の結果で手に入るのは、一時的な盛り上がりだと、個人的な名誉だけだ。あくまでも座興の類である。

真面目に相手にするだけ馬鹿らしいというものだ。

「そういえば、あいつの出自とかわかってるのか？」

ベラの質問に、シエスタが応じる。

「名前はレイチエル。フレイア国王の右腕であるダングラー将軍の外孫にあたるらしいわよ」

「へえ、そりやまた名門じゃない。そんなところのお嬢様が最前線で自ら槍を振るって闘わないといけないってあたり、フレイア王国の内情ってかなりヤバそうね」

自分もナウシアカ王国の超名門のお嬢様であるベラが他人事のように論評する。

そんな会話をしているところに、ナウシアカの陣営からも馬が出た。

「女狐め、なめた真似を、よかろう。俺が相手になる」

ナウシアカ軍にも血の気が多い者がいたようで、名を売ろうと応じたようだ。

「あらあら、王女様のご観覧ってことで張りきっちゃってもう。頑張れ〜♪」

いい退屈まぎれになるとばかりに、ベラは大声で声援を送る。

騎士と騎士がすれ違う。

ドサリ、とナウシアカの騎士が落馬した。

「おおおおお!!!」

敵陣営が沸く。

あまりにも鮮やかな手並みに、思わずナウシアカ陣営からも、感嘆の声が上がってしま

った。

レイチエルは血塗られた槍を翳して、さらに挑発してくる。

「こんな雑魚じゃ食い足りないよ。もっと骨のあるやつはいないのかい」

「ちきしょう。言いたい放題に言ってくるな」

さすがにペラが苦々しく応じる。

「なら、今度はあたしが」

ペラが出ようとするのを、オクタヴィアが止めた。

「馬鹿、おまえも王家の連枝れんしだぞ。匹夫のように一騎討ちに応じてどうする」

「我が家はナウシアカ王家筆頭で、敵さんもフレイア王家筆頭の家らしい。釣りあいとしてはちようどいいだろう」

国王の弟の娘であるペラは、青竜円月刀を担ぐと、鹿毛の馬に跨がり飛び出していった。しまった。

「あはは、ナウシアカには玉なし男しかいないと見える」

レイチエルが気持ちよさそうに哄笑こうしょうしているところに、ペラが応じる。

「ナウシアカ王国は女性上位のお国柄なんだ。勉強しておきな」

「ふん、何者だい」

「ナウシアカ国王が姪ペラだ。一つ揉んでやるぜ」

かくして、両陣営を代表する武闘派女傑同士の一騎討ちが始まった。

「たあ！」

パシッ！

互いの武器が打ちあい、稲妻のような音を上げてすれ違う。

「やるわね」

「そっちこそ」

馬の首を返した二人は再び激突。

今度はすれ違わずに、馬を止め、激しく槍を打ちあう。

パシ、パシ、パシ。

青竜円月刀と黒き槍が唸りを上げてぶつかりあう。

見学している両陣営の兵士たちは、大いに沸き上がった。

豪快に青竜円月刀を振るうペラに対して、黒き槍を振るうレイチエルは華麗だ。

（うわ、カッコイイな）

一騎討ちは戦場の華だ。アーサーもまるで絵巻物でも見ているような気分で魅入っていたが、不意に白き砂漠の中に違和感を見つける。

（あれは……狙撃兵っ!!）

白き砂の中に隠れている兵士がいる。それも弓をつがえようとしている。

それを見た瞬間、アーサーの身体は動いていた。

「とりや！」

青竜円月刀が、胴を薙ぎにいくと、レイチエルは鞍から飛び上がった。普通の高さではない。魔法の補助があつて初めて可能な跳躍だ。

「せあ！」

太陽を背にした黒き影から槍が降り注ぐ。

必殺の一撃だが、ペラは弾く。

レイチエルは大地に転がり落ちるかと思つたが、違つた。

「ふっ」

レイチエルは空中に止まる。足を上にし、頭を下にした状態で空中に留まり、槍を縦横に振るつてきた。

もちろん、魔法を使っているからこそできる荒技だ。

そのトリッキーな攻撃に、ペラは驚いたようだが、焦りはしなかつた。

冷静に打ちあう。

同じ打ちあいなら、魔法を併用しているレイチエルのほうに余計な負担が多い。

そのときだ。

ヒュッ！

一矢が飛来して、ペラの右腕を貫く。

「卑怯者っ！」

城外に飛び出していたアーサーは馬に乗つたまま、矢を放つた直後の狙撃兵を叩き斬つ

ていた。

「ベラ様っ!!」

馬に飛び降りたレイチエルはベラを追い詰めている。利き腕に手傷を負ったベラは明らかに不利になった。

(一瞬遅かった)

アーサーは後悔する。

両陣営ともに騒然している。

敵ははじめから、まともな一騎討ちなどするつもりはなかったのだ。不利になったり、よき敵が出てきたりしたら、仕留めるように狙撃兵を伏していたのだ。

見学していたオクタヴィアが、大声で叫んでいる。

「ベラ、引け！」

といつても、レイチエルは逃がすつもりはないらしい。

もはや一騎討ちではない。ナウシアカ陣営から増援が飛び出す。当然、フレイア陣営からも増援が出る。

参謀たるシエスタが矢継ぎ早に指示を出す。

「マルローゼ。魔法で援護して」

「やってみる」

といつても、魔法の発動までは時間がかかる。

(間に合わない。間に合うのはぼくだけだ)

アーサーは馬を駆ける。

黒き槍が、青竜円月刀を弾き飛ばす。ベラの逞しい身体が鹿毛の馬の背から落ち、白き砂に尻餅をついた。

「もらった！」

歓喜の声を上げたレイチェルは馬上から、黒き槍を振り下ろす。

その横腹にアーサーは飛びついた。

二人は転がりながら白き砂の上に落ちる。

アーサーが上になって止まった。レイチェルはぐったりしている。

転がった拍子に頬当てが取れたのだろう。レイチェルの素顔が露呈している。

(い、意外に綺麗……)

猛々しくも狡猾な敵の女勇者を、勝手にごっつい猪のような女だと思い込んでいたのだが、頬当ての下から現れたのは、年のころは二十代の半ば、シャープな印象のある美顔だった。

「よくやった！」

二の腕を押さえながら、ベラが褒めてくれる。

「死んだのか？」

「いえ、気絶しているだけだと思います」

思いがけない方角からの体当たりを受けて、受け身を取りそこなったのだろう。

「うーん、気絶しているやつにトドメを刺すのは気が引けるな。よし、捕虜にしよう。もたもたしている暇はない。急いで引くぞ」

「はい」

アーサーは気絶している女性を自らの馬の背に腹這いに横乗せした。ベラもまた愛馬に跨がる。

自分たちの斬り込み隊長を救おうと、フレリア軍は追いつがるが、そこに城の物見台からマルローゼの魔法が発動する。

ピューン！

黒きレーザーのような魔法光が一閃すると、

ドドドドドドドド！

白き砂がさながら壁のように舞い上がった。

その間に、ベラとアーサーと、そして気絶しているレイチェルは、ナウシアカの兵士たちの中に逃げ込んでいた。

※

「まったく、ハラハラさせないでよ」

自城に戻ったベラとアーサーに真っ先に駆け寄ってきたシエスタが、ぼやく。続いて現れたオクタヴィアも頷く。

「まったくだ。マルローゼ、ペラを魔法治療してやれ。それからアーサー。よくやった」
マルローゼはただちに、先輩の腕の治療をする。

「あの、この人、どうしますか？」

アーサーは馬の鞍に腹這いになっている女性を指し示す。

「とりあえず、地下牢にでも放り込んでおけ」

オクタヴィアの指示で、レイチエルは連れていかれる。

手柄をあげ、みなに称賛されたアーサーは舞い上がった。そして、ペラの治療を終えたマルローゼを見かけると、わざわざ近づいていって胸を張る。

「もう、色小姓なんて言わせないぞ」

「ふん」

マルローゼは面白くなさそうに顔を背ける。

その夜、アーサーはいつものように小姓としてオクタヴィアの寝室に侍る。

「今日は見事だった。ナウシアカの騎士の面目を保ったな」

単純な被害でいうと、ナウシアカを代表する勇士の幾人かを、レイチエルに討たれていく。

しかし、その女傑を捕えることができたのだから、城内は大いに盛り上がった。

特にみな暇を持て余していたところに起こった事件である。国王の姪であるペラを救ったアーサーも、一躍時の人となった。

「おまえの実力は証明された。これでもう、色小姓などと陰口を聞かれずに済むわね」

「いえ、ぼくなんてまだまだです」

俯いて答えるアーサーの頬を、オクタヴィアは撫でる。

「一人前の男には、一人前の扱いをしてやらないとね」

「そ、それは……」

潤んだ瞳が何を言わんとしているのか、察することのできたアーサーはドギマギする。

「シエスタのお墨付きも出たことだし、初手柄のご褒美といってはなんだが、初手柄をあげた記念に奪ってみるか？ わたしの処女」

「え、でも、それは……嬉しいですけど……」

正直、オクタヴィアに一人前として認めてもらいたくて、手柄を立てる機会をうずうずした気持ちで探していた。

その気持ちがあつたればこそ、あるとき躊躇わずに行動できたのだ。

しかし、それを素直に認めるのは気恥かしい。

アーサーの躊躇いを見て取ったオクタヴィアは、拗ねた表情をする。

「そうか、わたしとやれても嬉しくないか。おまえから見ると、わたしはかなり年上だしな。オパサンに見えて、やる気がしないのか。いままでは仕事でいやいや付き合ってくれていたんだな」

「そんなことあるはずがありません！ オクタヴィア様の最初の相手になれるなんて、嬉

しいです。でも、身分が違うというか、その……」

おたおたしているアーサーの頬を、オクタヴィアは手で挟む。

「わたしが王女であるとか、おまえの上司であるとかは関係ない。おまえがわたしとやりたいかどうかが問題だ。どっちなんだ？」

「そりゃ、それは、やりたいです！ オクタヴィア様のオマ○コにおちんちん入れたい！」
血を吐くようなアーサーの告白に、オクタヴィアは満足げに頷く。

「よし、ならやろう。わたしもおまえに女にしてもらいたい。アーサーのおちんちんに貫かletたくてうずうずしている」

「オクタヴィア様♪」

憧れのお姉様にこう促されては、もはやアーサーに選択の余地はなかった。
力いっぱい抱き締めて、唇を奪う。

接吻を終えると、裸体のオクタヴィアは寝台の上に仰向けになる。

「今夜はおまえにすべて任せる。好きなようにしなさい」

いつも主導権は、オクタヴィアにあった。

おっぱいを揉めと言われたから揉み、乳首を吸えと言われたから吸い、オマ○コを舐めろと言われたから舐めた。

それが、こうもあっさりと主導権を手渡されると困惑してしまう。

「どうしたの？」

「いや、好きにしていると言われても……」

「遠慮はいらないわ。その代わり、思いつきり気持ちよくしてくれないとダメよ」

好きにしていると言いながら、さりげなくプレッシャーをかけてくるお姉様である。

(ああ、でも、オクタヴィア様とセックスできるなんて夢のようだ)

改めて見下ろすと、本当に綺麗な女性である。処女雪のように透き通るような肌、瘦身なのに肩幅が広く、綺麗な逆三角形の体型で、手足は長く引き締まっている。股間を彩る金色の陰毛も卵型で美しい。

どこをとっても神々しくて、月の女神だとて、これほどまでに美しいことはないだろう、とアーサーは信じている。

「……ごくり」

生唾を飲んだアーサーは、オクタヴィアの上に四つん這いになると、恐る恐る乳房へと手を伸ばす。

「あん、まずおっぱいなね」

皮肉を言われたが、一度籠たかが外れると、もう止まれない。

アーサーは両手で持った乳房を夢中になって揉みしだき、左右の乳首を夢中になって吸いまくった。

「ああ、もうそんなにがつつかなくても」

この一週間ばかり、毎日吸っていた乳房だが、今夜は初体験できるのだ、と思うと新鮮

な気分となり、常以上に興奮してしまう。

「ああ、もう、そんな……ああくん♪ はあ、はあ、はあ……もう、アーサーったら上手なんだから、またおっぱいだけでイカされちゃった♪」

頬を染め照れ臭そうにするオクタヴィアに、アーサーは頷く。

「オクタヴィア様を必ずやご満足させてみせます」

乳房が終わったら、クンニ。そのあと挿入というのがセオリーであろう。

オクタヴィアもまた、それを期待しているのが見て取れる。

しかし、それではダメだ、と思った。

もつと意表を突かなくては、満足させることはできない。

知恵を絞ったアーサーは、その美しいおみ足を持ち上げた。そして、足の裏に頬ずりを
する。

「ちよ、ちよつと、何をやっているの？」

さすがに驚くオクタヴィアに、アーサーは嘯く。

「オクタヴィア様が好きにしている、と言ったのですよ」

「そ、そう言ったけど」

「なら好きにさせてもらいます」

興奮したアーサーは、美しい足の指にしゃぶりついた。

「き、汚いわよ」

「オクタヴィア様に汚いところなんてありません」

「もう……仕方ないわね」

我が儘な弟にじゃれつかれたお姉さん、といった風情でオクタヴィアは、アーサーに好きにさせてくれた。

それをいいことに足の指を一本一本舐めしゃぶり、足の指の股や、爪の狭間に舌を入れて舐めしゃぶる。

右足が終われば、次は左足だ。

同じように舌を這わせる。

「あん、そんなに……アーサーったら♪」

単純な快感という意味では、足を舐められたからといって、それほど強い刺激はないだろう。

しかし、自分の足を舐められているのだ、という視覚的な歓びに、官能を刺激されるものらしい。

頬を染めたオクタヴィアは恍惚とした表情で溜め息をつく。

足の指を舐め終えたアーサーは、両足を持って、左右の脰くびら脛はざに交互に接吻。それから少しずつ、下へと降りていく。

その最下層には、当然、黄金の織毛に彩られた女性の秘部が待っている。

この城に入ってからというもの、連日連夜、オクタヴィアはアーサーにクニニされてい

る。

クンニされる気持ちよさにハマってしまっている女の身としては、一刻も早くしゃぶりつかれたいことだろう。

しかし、あえて焦らす。

「あ、ああ……」

年上の女としての見栄からだろうか、オクタヴィアは切なそうにしながらも、急かしはしない。

オクタヴィアの性感帯を知るという意味では、本人以上に把握している自負のあるアーサーである。

じつくりと焦らすように、内腿を舐め下りていき、両の膝の裏を持つと、ぐいと押し広げた。

いわゆるマングリ返しの姿勢だ。

「あはっ、オクタヴィア様のオマ○コ、今日もドロドロですね」

「もう、意地悪」

濡れた陰唇や肛門を丸晒しにしたオクタヴィアは、恥ずかしそうに拗ねてみせる。

兵士たちの前では強気で隙なく振る舞ってみせる女将軍が、アーサーと寝台を共にしたときだけ見せてくれる表情だ。

まさに男冥利に尽きる。

「ぼくの大好物です♪」

熱く煮えたぎった陰唇に、アーサーはむしゃぶりついた。

ジュル、ジュルジュルジュル……。

「ああ、そんなに音を立てたら、は、恥ずかしい……♪」

美しき戦乙女の陰唇を隅々まで舐め回したアーサーは、さらに肛門まで舐め穿る。

「ひい、そこはダメえええ!!!」

羞恥に悶えるお姉様の肛門を舐め穿りながら、右手の指先で淫核を捕え、包皮から掴み出した中身を、下から持ち上げつつ、左右に高速で動かす。

「ああ、らめええ、それやられたら、わたし、わたしは……」

神話の女神の如き美貌を誇るオクタヴィアだが、淫核を弄り倒されたとき、ただの牝と化す。

口元がだらしなく開いて、涎が垂れている。

まさに牝顔。アーサーしか知らない、オクタヴィアの秘密の顔だ。

ごく最近まで包茎クリトリスだったのだが、この一週間アーサーに弄らせた結果、すっかり剥き癖が付いている。

いまだ未通である膣孔が大きく開き、中から熱い間欠泉を止め処なく溢れさせている。

「も、もう、ダメエエエ!!!」

ピクピクとオクタヴィアの裸体は痙攣し、絶頂したことを見て取ったアーサーは、よう

やく顔を上げた。

「アーサーったら、もう上手ね♪」

もはやオクタヴィアを絶頂させるコツに関して言えば、オクタヴィア本人よりも、アーサーのほうが上手であろう。

オクタヴィアははにかむ。

「そろそろ、い・れ・て♪」

大好きなお姉様に、こう言われて拒否できる童貞少年というのはまずいないであろう。あるいは、武功のない時点のアーサーならば、恐れ多いと土下座して辞退したかもしれない。

しかし、なまじ武功をあげた直後だけに、気が大きくなっていた。

「そ、それじゃ、入れます！」

すつくと立ち上がったアーサーは、オクタヴィアの両足を押しさえつけ、マンダリ返しの際勢のまま、いきり立つ逸物を、ヒクヒク痙攣している膣孔に添えた。

「はあ……はあ……はあ……」

王女様の初めての相手になれるのだ。誇らしい気持ちと恐れ多い気持ちがないまぜである。それプラス、初めての女性への好奇心で身が震えた。

ゆつくりと腰を下ろす。

切っ先にたしかな抵抗がある。

(こ、これがオクタヴィア様の処女膜っ!?)

以前、見せてもらった三つ穴状処女膜。あれはオクタヴィアの鎧同様にちよつとやそつとでは突破できないような気がしたので、体重をかけて一気に押し込む。

プチッ……ズブズブズブ。

未開の肉門をぶち抜いた感触がたしかにあり、直後に一気に沈んだ。

「あっ！」

オクタヴィアは細い顎を、ピクンとはね上げる。処女雪のように白かった肌がみるみるうちに桃色に染まっていく。

ザラザラとした贅肉が、みっちり肉棒に絡みついてくる。

「は、入った。入りましたよ。オクタヴィア様のオマ○コに、ぼくのおちんちんが全部」

「そ、そう？」

興奮して叫ぶアーサーとは対照的に、オクタヴィアは眉間に皺を寄せながら頷く。

破瓜の痛みは、男にはわからないし、それをおもんばかるにはアーサーは子供すぎた。

「それで、その……気持ちいい？」

「気持ちいいです！ すっごく気持ちいいです！ 最高に気持ちいいです！」

満面の笑みで叫ぶアーサーを、オクタヴィアは眩しそうに見る。

「そ、そうか。おまえが喜んでくれるなら、よかった♪」

「あー、これがセックスなんだ。オクタヴィア様の体内ってこんなになっていたんですね。

温かくて、ヌルヌルしていて、おちんちんが溶けそう」

興奮し、素直に歓びを口走るアーサーに、オクタヴィアは満足げな顔をする。

「なら、少し動いてみなさい」

「はい。こんな感じですか？」

言われるがままに、アーサーは腰を引いた。

ザラザラザラ……。

贅肉が亀頭部の鰓えらの部分に絡みついてくる。

(うお、溶ける。マジで溶ける。ちんちん溶ける)

アーサーは射精したいと思ったが、寸前のところで止めることができた。

これは日ごろのオクタヴィアの教育の成果であろう。

この城に入る前のアーサーであつたら、入れた直後に暴発させていた自信がある。

「それじゃ、戻します」

亀頭部が抜けそうになつたところで、慌てて押し戻す。

「あん」

再び最深部まで押し込まれたオクタヴィアは、細い顎を上げて喘ぐ。

痛みにも苦悶しているのか、快感からなのかわからないが、その普段決して見られない表情にアーサーはさらなる興奮を促された。

情にアーサーはさらなる興奮を促された。

牡としての本能のままに、逸物の根元まで押し込んで、再び亀頭部ギリギリまで引く。

「ああ……」

オクタヴィアは言葉少なく応じる。そこでアーサーもまた射精を我慢しながら、黙々と抽送運動を繰り返した。

(うわ、気持ちいい♪)

自然と腰使いが激しくなっていく。

「こら、乱暴に扱うな」

オクタヴィアに窘められて我に返ったが、腰が止まらない。

「すいません。気持ちよくて、止まりません」

アーサーの半泣きの懇願に、オクタヴィアは苦笑する。

「もう、仕方ないわね。好きにしていいわよ」

「ありがとうございます！」

諦めたと言いたげなオクタヴィアから許可を貰ったアーサーは、遠慮なく夢中になって腰を使い続けた。

ガツ！ ガツ！ ガツ！

「ひっ、ひっ、ひっ」

男女の恥骨が砕けんばかりにぶつかりあい、オクタヴィアは必死に悲鳴を嘯み締める。

「オクタヴィア様、も、もう」

「いいわよ。出しなさい。わたしの中に全部出しなさい」



「はい。出します。オクタヴィア様のオマ○コの中に、ぼくのザーメンを全部、いっぱい！」

頭が煮えたぎるような興奮状態になったアーサーは、激情のままに思いつき欲望を吐き出す。

どびゅ！ どびゅっ！ どびゅびゅびゅ!!!

「ああ、熱い。熱いアーサーのザーメンが、ザーメンがわたしの中に入ってくる！ いっぱい、いっぱい、入ってくる」

生まれて初めて膣内射精されたお姉様もまた、我を忘れた悩乱の声を張り上げる。

「はあ……、はあ……、はあ……」

ようやく一線を超えた主従は、射精が終わってもしばし抱きあったままであったが、逸物が小さくなったところで、結合を解くと互いの下半身を確認する。

「おまえが乱暴にするから、痛んでしまったじゃない。シーツなんて血だらけよ。これでわたしが破瓜したことがみんなにばれてしまう」

「すいません」

激情と快感に我を忘れて、無茶苦茶をしてしまったということを目覚めたアーサーは、その場で土下座して平謝りするしかない。

そんなお気に入りのお小姓をオクタヴィアは抱き寄せる。

「まあ、いいわ。罰として、今夜からは繋がって眠りましょうか？」

「はい。ぼくも離れたくないです」
最前線にいながら、どこまでもものんきな主従であった。

第四章 捕虜

「まずは名を聞こうか？」

翌朝、気を取り戻したレイチエルは、ナウシアカ軍の総大将たるオクタヴィアのもとに引き立てられた。

武器を取り上げられ、後ろ手に縛られ、周りは敵ばかりという状況であつたが、レイチエルは悪びれるでもなく堂々と立つ。

「フレイアの騎士レイチエルだ」

「よろしい。わたしは当遠征軍の総司令官を務めるオクタヴィアだ」

白銀の鎧に身を包んだ女騎士と、漆黒の鎧に身を包んだ女騎士の視線が正対する。

殺生与奪の権利を完全に握られているのに、堂々と胸を張る捕らわれの女騎士の姿に、いささか意地悪を試してみたい気分になつたのだろうか。

オクタヴィアは皮肉げに質問した。

「おまえには先日、命を狙われたな」

レイチエルは肩を竦めて鼻で笑つた。

「惜しいことをした、と思つているよ」

「言いおる」

勝者の余裕だろう。相手の暴言にもオクタヴィアは、気分を悪くするでもなく受け流す。「貴様が勇者であることは認める。勝敗は兵家の常。運が悪ければ捕虜になることもあるだろう。恥じ入ることはない」

明日は我が身かもしれないと思えば、必要以上に貶めないのが騎士道というものだろう。慰めの言葉をかけられて、レイチエルは冷笑を浮かべる。

ここで何か口を開いても、負け犬の遠吠えにしかならない、と自覚しているのだろう。戦士である。いまさら死ぬことを恐れるような玉ではないだろう。

「思うにフレイア王国の滅亡は必至だぞ。このまま我が軍に仕官するつもりはないか？」
「ふっ、寝言は寝て言え」

レイチエルの嘲笑に、オクタヴィアは頷いた。

好意を拒絶されても、誰も激昂しなかった。誰もが予想できた答えだからだ。

なりふり構わず戦いを仕掛けてくる。フレイア軍の中でも主戦派筆頭のような女だ。

彼女が降れば、政治的な影響力は大きいだしろうし、案内役にもなる。いいことづくめだが、決してあり得ないことだろう。

また、そのような事態になったら、かえって不快感を示したかもしれない。

騎士道的な美意識を見て満足したオクタヴィアは寛大に頷く。

「よろしい。ならば貴公を捕虜とする」

「まあ、そうなるだろうね」

そこに戦乙女騎士団の参謀にして、アーサーの義理の姉であるシエスタが口を挟む。

「身代金さえ払ってもらえばすぐに釈放します。そのために実家に手紙を書いてもらいます」

「それはいいが、食事にはワインを付けてくれ」

レイチェルの厚かましさに、一同から失笑が漏れた。そこに一騎討ちで危うく罨にかかりそうだったベラが口を挟む。

「よかろう。あたしが手配してやるよ。赤ワインと白ワインどちらがいい？」

「ふっ、赤」

「承知した。連れていけ」

ベラの懐の広さに一同が感心しているところに、兵士たちに連れられてレイチェルは指令室を出ていった。

それを見送りながら、マルローゼが首を傾げる。

「……ずいぶんと寛大なのね」

その疑問にベラが口を開く。

「我々は戦争をしているのであって、個人的な恨みがあつて殺しあつていくわけではないからな。そもそもこれはドモス王国の戦争であり、我々は手伝いに過ぎない。もつともあの女にしてみれば、国家存亡のときだから必死なんだろうがね」

オクタヴィアもまた、最年少の団員に論じて聞かせる。

「わたしたちは騎士だ。友であつても、戦場で出会えば殺しあう。逆に言えば、殺しあつた仲でも、友になれる。心得ておきなさい」

「ふん」

納得しがたいと言いたげなマルローゼはとりあえず横に置いて、オクタヴィアは参謀に質問した。

「身代金は取れると思う？」

「さて、どうかしら？ フレイア王国はかなり追い詰められているわ」

現在、フレイアの大地には、北からナウシアカ軍が南下しているだけではなく、東からはドモス軍の大侵攻がいまにも始まろうとしている。

悪くするとこのまま一気に、フレイア王国は滅亡ということになつても不思議ではない。「その意味で、あの女はここで捕えられたのは幸いかも……、このまま推移すれば死ぬだけだったし」

マルローゼの身も蓋もない感想に、一同は肩を竦め、ペラが窘める。

「まあ、その通りちゃ、その通りなんだが、それを口にしてしまったら、風情がなさすぎる。まあ、身代金の交渉は真面目にやらんでいいさ」

「どういふことです？」

ペラの言葉に、思わずアーサーの声が険悪になる。

それは捕虜に対して、あまりにも誠意がないと感じたのだ。

そんな少年騎士の潔癖さを察して、ベラは苦笑する。

「遅かれ早かれ、フレイア王国は終わる。身代金を払って祖国に帰っても、死に帰るよなもんだ。それよりも、終戦までここにいれば、オクタヴィアの希望通り、我々の仲間になるって話だ」

「……なるほど」

国が滅んでしまったら、騎士は存在意義を失う。新しい主取りをせざるをえない。納得したアーサーを他所に、シエスタがからかう。

「卑怯な手で矢を受けたというのに、ずいぶんと買っているのね」

「まあ、ああいうパカな女は嫌いじゃない。あたしだって、国が滅びそうだからって理由で宗旨替えをしようとは思わないからね」

ベラの主張に、一同は頷く。

少なくとも、ここにいる面子めんつは国家のため、オクタヴィアのために死ぬことをいとわな
い覚悟である。

「ということだ。アーサー、おまえが捕虜にしたんだ。責任を持って面倒を見るのだぞ」
「承知しました」

アーサーは力強く頷いた。

どうやら、騎士団の面々は、恐るべき敵であったレイチェルに対して、少なからず好意的なようである。

(昨日の敵は今日の友、というからな)

捕虜とはいっても、近い将来、仲間になるかもしれない相手だと思い、丁重に扱うことを決意する。

コンコン。

捕虜の監禁されている部屋の木製のドアをノックすると蓮はすつ葉はないらえがあつた。

「こつちから閉める鍵はないよ」

「失礼します。食事をお持ちしました」

アーサーは室内に入った。

狭いがそれほど悪い部屋でもないだろう。明かり取りのための小さな窓には、逃亡を防ぐための格子が付き、装飾品の類はないのも仕方がないが、それなりに綺麗な室内だ。

オクタヴィアをはじめとして、戦乙女騎士団の面々が、この恐るべき敵の勇将に対して好意的であることを示しているかのようだ。

アーサーの持参した食事も、粗食ではあるが、一般兵士たちと同じものだ。

「さつて、お楽しみの食事か」

そう明るい声を出したレイチエルは、武器こそ取り上げられているが、鎧はそのままである。

「どうぞ。ご希望通り赤ワインも付けました」

「ああ、ありがとさん」

膳を素直に受け取ったレイチェルは、寝台の上に胡坐をかき、躊躇いもせず木のスプーンでスープを掻き込む。

上半身は身体にぴったりとした薄手の鎧だが、下半身は太腿を大胆に露出させた装いである。

そのため、胡坐をかくと、まるで黒いハイレグシューズが見えているかのような錯覚に陥る。

(まあ、見せることを意識した服装なんだろうけどな)

そう頭でわかっていても、いろいろと意識してしまう。

(この人って、なんか凄いセクシーだよな。露出という意味だけなら、ベラ様のほうが凄
いけど、レイチェルさんのほうが断然エロく感じるのはなぜだろう?)

股間ばかり見ているのも失礼な気がしたので、食事をするレイチェルの顔を見る。

(しかし、まさかあの面頬の女騎士がこんな美人なお姉さんだったとはなあ、クールでセクシー。この顔が戦場で傷付くのはもったいない、という理由で周りの人が付けさせていたのかな)

することもなく食事をしている美人お姉さんの顔を見ていると、いろいろとあらぬ妄想が生まれてくる。

(エッチとか凄そうだよなあ。並の男じゃ相手にならないというか、あつという間に絞り

取られて鼻で笑われそうというか。おっぱいでかいよなあ、鎧の上からでもわかる巨乳だ。それでいて腰のくびれ、腰とかガンガン使ってきそう。オマ○コの縮まりもハンパなさそうだ)

昨晚、オクタヴィアと初体験したばかりのせいか、いろいろと生々しい妄想が膨らんでしまう。

瞬く間に食事を終えたレイチエルは、不意に少年を見咎めた。

「どうかしたか？」

「い、いや、毒殺とか気にしないですね」

あらぬ妄想に取りつかれていたアーサーは、我に返って、適当なことを口走ってしまった。

出された食事を綺麗さっぱりたいらげたレイチエルは、ナプキンで口元を拭いながら悠然と応じる。

「あたりまえだ。いまさらそんなことを気にしてなんになる？ それよりも、あたしが食事をする分だけ、敵の食糧を減らせる。これがあたしのいまできる唯一の攻撃だからな」

「あはは、さすがは闘将ですな」

捕虜になっても、いささかも卑屈にならないレイチエルの姿に、アーサーは好感を持った。

(騎士の鑑だな。捕虜になんかなりたくないけど、もしなるようなことになったら、彼女

のように堂々と振る舞いたいものだ)

アーサーが捕えたといっても、偶然の産物である。

もし、互いに同じ条件でやりあったなら、とても勝てる気がしない。

不運にして捕虜になってしまった彼女に、できるだけのことをしたいと感じたアーサーは、食器を下げる前に質問する。

「何か不自由はありませんか？」

寝台の上に胡坐をかいたままレイチェルは、殺風景な室内を見渡しながら思案する。

「そうだね。強いて言えば、暇で死にそうだ」

「それは大変だ。ぼくでよろしければ話し相手ぐらいは付き合いますよ」

「ふん」

レイチェルは推し量るようにしてアーサーを見る。

「そうだね。退屈凌ぎに、少し遊んでいかないかい？」

「遊びですか？ トランプゲームでもお待ちしましょうか？ それともチェスのようなものをお望みで」

その程度の差し入れをするのは問題ないだろう。アーサーは請け負った。

レイチェルは失笑する。

「何的外れなことを言っているんだい。男と女の遊びといたら、一つしかないじゃないか？」

「え、なんですか？」

戸惑うアーサーの顔を見上げながら、レイチエルは膝の上に右腕で顎杖をつきながら意味ありげに笑う。

「セックス」

「ぶっ！」

予想はしていた。いや、期待していた答えではあるのだが、アーサーは驚愕した。

「ふ、ふざけないでください」

からかわれているのだと解釈したアーサーは、血相を変えて叫ぶ。

レイチエルのほうは、セックスぐらいなんでもない、と言いたげに両手で伸びをしながら答える。

「坊やはあたしに勝ったんだ。戦場で捕えた女を犯すというのは、男の特権ってやつだろ？」

「ぼくはそんなことしません！」

捕虜を陵辱するなど、騎士としてあるまじき行為だ。少なくともアーサーはそう思っている。

「あたしが欲しいって言っているんだから、いいじゃない」

そう嘯いたレイチエルは、いきなり薄手の鎧を外しにかかった。

「あたしってさ、キミみたい子。好みなのよ」

「からかわないでください」

「からかってないわよ。あたしがキミに欲情しているって証拠を見せればいいのかしら？」
「そうこう言っているうちに鎧は外され、さらに下着の類もあっさりど、いや、アーサーを挑発するように脱いでいく。」

「……っ!? な、なに脱いでいるんですか!？」

慌てて視線を逸らそうとしたが、美しい女性の裸体には、少年の視線を吸い寄せ磁力がある。いくら逸らそうとしても、チラリチラリと見てしまう。

（でか、おっぱいデカ。スレンダーだとばかり思っていたのに、おっぱいあんなに大きいんだ）

スレンダーな肢体とは裏腹に、爆乳を誇るお姉様は、少年の視線を楽しみつつ濃紫の髪を掻き上げる。

「単なる暇つぶしだ。難しく考えることはない。お互い後腐れなく、気持ちよく楽しもうじゃないか。いわばオナニーだよ」

「で、でも……」

心は動いているのだが、煮えきららない少年の態度に、裸となったお姉さんは、何か悟るところがあった、と言いたげな表情を浮かべる。

「もしかして、あの取り澄ました女に遠慮しているかしら？」

「取り澄ました女？」

「聞いているわよ。あんた、あの女の色だって話じゃない」
意味ありげに笑ったレイチェルは小指を立ててみせる。

「っ」

自軍はおろか、敵軍にまで届いている噂に、アーサーは鼻白んだ。

実際にオクタヴィアのことか脳裏にちらついていると言えないと云えばウソになる。

（昨日初体験させてもらったばかりなのに、浮気というのは、オクタヴィア様に対する重大な裏切りだ）

と理性は告げている。

そして、理性的な判断としては、もう食事を運ぶという目的は達したのだし、とつとつ部屋を出るべきだ、ということにはわかっている。

しかし、そんな頭ではわかっていても、身体が動かない。

それだけ目の前のお姉様が魅力的すぎた。

動けない少年を前に、レイチェルは自らの乳房を両手で持ち上げてみる。

「このおっぱいでは、物足りないかい？」

「……」

物足りないはずがない。むしろ、むしろぶりつきたい衝動を止めるのに、全身全霊を使っている。

そんな少年の葛藤を見抜いているかのように、レイチェルは笑う。

「あの偉そうな女じゃ、坊やにああしろ、こうしろって煩く命じるだけで、坊やにまったく奉仕してくれないんじゃないか？」

「そんなことは……」

実際、指示が煩わしいと思ったことが、ないわけではない。

「あたしなら、いっぱい奉仕するわよ。玉だって舐めてあげるしね。ああ、パイズリってやつてもらったことあるかしら？」

「パイズリ……」

「そう、パイズリ。このおっぱいのおちんちんを入れて、シコシコしてあげるわよ」
淫らに笑ったレイチェルは自らの両の乳房を左右から押し潰し、深い谷間を作ってみせた。

ゴクリ。

思わず生唾を飲んでしまった。

(あのおっぱいにおちんちんを入れてみたい)

パイズリは男のロマンの一つだろう。残念ながらオクタヴィアはやつてくれたことがなかった。

夢膨らむ少年の前に、魔乳を誇るお姉様は歩み寄ってきた。

「うふふ、ここでやる分には誰にもばれないわよ。もちろん、坊やの飼主にもね」
妖しく微笑んだレイチェルは、アーサーの頭を抱くと、唇を重ねてきた。

「う、うむ、ふむ……」

頭を左右に振りながら、情熱的に唇を擦りあわせる。

さらに舌が唇を舐め回し、口内に押し入ってきた。

有無を言わさず舌を搦め捕られ、吸い上げられる。

そのキステクニツクだけでも圧倒されるのに、レイチエルはさらにアーサーの手を取って自らの乳房を握らせた。

(すげえ、バインバインだ)

オクタヴィアの美乳、シエスタの爆乳に勝るとも劣らぬ魔乳であった。

(手が吸いついて離れない。うお、揉みだしたら止まらない。なんだこれ、魔法にでもかかっているみたいだ)

レイチエルの手が離れても、アーサーの手は乳房から離れることはなかった。

それどころから濃厚な接吻を楽しみながら、夢中になってモミモミと乳房を揉み続けた。
(あ、乳首が硬くなってきた♪)

少年にとって綺麗なお姉様の乳房ほどに、魅惑的な玩具はない。ほとんど無意識のうちに、コリコリの乳首を弄り回している。

やがてレイチエルは絡まる舌を解き、唇を離れた。

「ふう、……それとも、あたしみたいな淫乱な女は嫌いかしら？」

プリンプリンとアーサーは盛大に首を横に振るってしまった。

(美人で淫乱なお姉さんが嫌いな男はいません)

脳裏にそんなフレーズが浮かんだが、口にする勇氣はなかった。

そんな声無き声が聞こえたと言いたげなレイチエルは、妖しく耳元で囁いた。

「なぐに、キミはしなくていい。あたしが一方的に全部やってあげるよ」

「……」

アーサーは答えられなかった。この場合、沈黙というのは肯定と同じだ。

「うふふ♪」

意味ありげに笑ったレイチエルは、その場に屈み込むと、少年のズボンの中から逸物を引っぱり出す。

「いまだ半萎えだ。」

「あら、可愛い。これがあの気取った姫將軍様のお気に入りの宝物ってわけね」

ニヤリと笑ったレイチエルは、半萎えの逸物を紫色の紅の引かれた唇に啜えた。

「う」

逸物は男の急所である。そんなところを、昨日まで敵。いや、いまだに敵であり、ただ捕虜となって近くにいるだけの女性に預けるのは怖い。

まして、レイチエルは物凄い美人ではあるが、同時にも物凄く怖そうな女性である。

前歯でがつつり噛み切れそうさだ。

そんな恐怖の想像にかられながらも、逃げることもできない。

期待と不安で身を固くしている少年を上目遣いに見上げつつ、レイチエルは逸物をしゃぶった。

「ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ」

温かい唾液に浸された逸物は、瞬く間に隆起していく。

「うふふ」

逸物を口いっぱい頬張ったレイチエルは妖しく笑った。

一旦逸物から口を離すお姉様は、右手の人差し指で尿道口を捕えて捏ね回しながら囁く。

「さすがはあたしを負かせた男のおちんちんね。素敵だわ♪」

そう言われると悪い気はしない。

仮性包茎気味の逸物は勃起しても、鰓の部分に少し皮が残ってしまっている。左手で肉幹を握ったレイチエルは、無言で包皮を根元まで剥き下ろし、自ら股の間に入って上向きになり、肉袋を舐め始めた。

シコシコシコシコ。

左手で肉棒を扱き上げながら、二つの睾丸を舐める。

男の最大の急所が、美しくも恐ろしいお姉様の玩具にされているのだ。

ゾクゾクするような快感が、少年の身を襲う。

「うん、うん、うん……」

鼻を鳴らしながら、レイチエルの舌は裏筋を舐め上げてきて、亀頭部を舐め回し、裏の

襷を左右に捏ね回す。

まさに男のツボを知り尽くした練達の技だ。

それでいて、レイチェルは決して射精はさせない。意図的に快感だけを与えて、射精に至らないように調整している。

「あう、あうう……」

アーサーは思わず、情けない官能の声を上げてしまった。

(やっぱり、見た目通り経験豊富なんだ。オクタヴィア様より断然うまい)

熟練の技を思わせる女の手管に、アーサーは追い詰められた。そして、いよいよ我慢が聞かないと思ったとき、レイチェルは逸物から離れた。

「っ!？」

驚くアーサーの前で、レイチェルは両手でそれぞれ両の乳房を持ち上げてみせた。そして、自らの乳首に交互に舐めてみせる。

「さてと、次はお待ちかね。これで挟んであげるよ♪」

「ぜ、ぜひ!？」

「うふふ、やっと素直になったわね」

鼻息も荒く頷いてしまう少年を見上げて、満足げに頷いたレイチェルは、蹲踞そんきょの姿勢で上体を伸ばし、いきり立つ逸物を胸の谷間に挟んだ。

(お、すげえ、パイナップルのおっぱいにおちんちんが包まれたっ!?)

柔らかい肉感に包まれる感触が気持ちいいのはもちろんだが、自分の逸物が女性の象徴に包まれている、という視覚効果によって、歡びが倍化する。

「あらあら、こんなに先走りの液を垂らしちゃって♪」

卑猥に笑ったレイチエルは、大きく口を開くと赤い舌を伸ばして、亀頭部をペロリペロリと舐め始めた。

「はう」

あまりの気持ちよさに、アーサーは情けない呻き声とともに震える。

「好きなときに出していいわよ。時間はいくらでもあるんだし、何発だって付き合うわ」
クールな眼差しで見上げてきながら、レイチエルは舌を動かし、男を包み込んだ魔乳を上下させる。

「でも、このままじゃ……」

「遠慮はいらないわ。あたしの顔にぶっかけなさい」

クールで怖いほどの美人顔。そこに自分の精液をかける。それはなんとも背徳的なことに感じた。

しかし、それゆえにやってみたい衝動が抑えがたく湧き上がる。

「そ、それじゃ……いきますよ」

「ええ、ぶっかけて♪」

少年が限界に達したことを察したレイチエルは、その射精を促すべくますます乳房の上

下運動を激しくし、さらに口先に啞えて、尿道口をちゅつと吸った。

それが呼び水となった。

少年の欲望は一気に噴き出す。

ドビュッ!

レイチェルの唾液によって濡れた睾丸から噴き出した液体が、肉筒を通過して、レイチェルの顔に飛翔する。

ドッビュユユ!!!

猛々しくも美しい女勇将たるレイチェルの顔が、みるみるうちに白く染まっていく。

(うわ……)

きつい美貌である。性格もきつそうだ。おそらく彼女の部下たちは、上司のことを鬼のように恐れていたに違いない。

そんな怖いお姉さんの顔が、見るも無残に自分の吐き出した精液で汚されたのだ。

その惨状を見下ろして、アーサーは申し訳ない気分とは裏腹に、とてつもない爽快感を覚えた。

(こんな綺麗な誇り高い女性の顔に、ぼくの精液をかけちゃったよ。オクタヴィア様には絶対できないことだよな)

満足感に浸っているアーサーを見上げて、精液塗れのお姉様は、ニヤリと笑う。

「いっぱい出したわね。こういうチンポ好きよ♪」



精液塗れの顔がエロカッコイイ。

レイチェルは器用に顔や胸元にかかった精液を、指で掬って口に運ぶと、さらに半萎えとなった逸物を舐め清めてくる。

（一見、怖そうなお姉さんなのに、とんでもない淫乱だったんだ。人は見かけによらないというか、見かけ通りというか♪）

かつてない幸福感に包まれたアーサーは、淫乱お姉様の魅力にハマってしまった。

お掃除フェラを終えたレイチェルは、アーサーに背を向けると、寝台に両肘をつき、肩幅よりも開いた長い足を、ぴんと伸ばして逆V字にする。

「さあ、今度は坊やの男を見せておくれよ」

きゅつと吊り上がった女尻が、アーサーの目の前に差し出された。

筋肉と脂肪が程よく乗った、パンと張りつめた見事なお尻である。しかも、レイチェルは右手を股の間から入れると、陰唇をくぱっと開いてみせた。

「ごくり……」

紅色をした濡れた陰唇を見せつけられて、アーサーは生唾を飲んだ。

そして、慌てて首を横に振ろう。

「あんまりぼくを子供だと思って、侮っていると痛い目を見ますよ」

「思いつきり痛い目見せて欲しいわ」

「わかりました。ひいーひいー泣かせてあげますからね」

淫乱お姉様になめられるのは癪だ。ここは男としての意地を見せ、自分のテクニクで身も世もない快感に翻弄させたい。

そんな欲望に刺激されたアーサーは、レイチェルの背後に立つとしやがみ込み、尻朶を両手に持ってぐいっと左右に広げた。

「あは、肛門から陰唇まで丸晒しだ」

尾骨の下に、薄紅色の菊花状の肛門が鎮座している。

「ちょ、ちよつと、どこ見ている？」

肛門を視姦されていると知ったレイチェルはいまさらながら、羞恥の悲鳴を上げて身悶えるが、逃げようとはしなかった。

それは少年の興奮を煽るための演技なのかもしれない。

(こんなにコワカッコイお姉さんでも肛門はあるんだよな)

このような生意気な羞恥責め、オクタヴィア相手ではとてもできない。すっかり気が大きくなってしまっているアーサーは、菊華をペロンと舐めた。

「ひい、いきなりそこから責めるの？」

レイチェルはらしくない黄色い悲鳴を上げる。

肛門を舐めても、特に変わった味はしなかった。それでも相手が羞恥に身悶えていると思えば、入念に舐める。

「もちろん、オマ○コだって隅々まで舐めますよ。任せてください。クンニは得意ですか

ら♪」

その言葉にウソはない。主君に舐め犬調教されてしまった身だ。クンニに関してはかなり自信がある。

肛門をたっぷりと舐め清めたあとに、顔を下ろし、陰唇を覗き込む。

(うわ、意外と綺麗なオマ○コ。まるで梅の花みたいだ)

ダークローズの妖花に魅せられたアーサーは、嬉々としてしゃぶりついた。

「あん♪」

ようやくきた生殖器への刺激に、レイチエルは甘い官能的な声を上げる。

(へえ、これがレイチエルさんのオマ○コの味か。やっぱりオクタヴィア様と少し違うな)

女性ごとに、顔も違えば、おっぱいも違う。陰唇の形状や味が違うのも当然であろう。

全体的に大きめであり、膣孔や淫核も一回り大きい気がする。

それならを十全に舐め回しつつ、吸い上げた。

「ジュルジュルジュ……」

「あん、そんなに音を立てて飲んじゃダメよ」

淫乱お姉様の上げる羞恥の悲鳴が心地いい。アーサーは思う存分に舌を振るい、さらには膣孔に舌をぶっ込むと、体内を舐め回した。

「あは♪ すごい、なに、この子の舌、オマ○コの中を舐められている。ああ、体の奥ま

で舐められちゃう♪」

オクタヴィア仕込みの色小姓の舌技は、他の女にも有効だったようである。

執拗なクンニを受けたレイチェルは、尻を高く翳したまま、シーツに上体を突っ伏させてシクシクと泣いた。

ピクピクピク……。

スレンダーでグラマラスな肢体が、哀れに痙攣する。

熱い愛液が大量に溢れ出し、レイチェルが絶頂していることはわかったが、アーサーはしつこくクンニを続けた。

「あひ、も、もう、やめて、そんなに舐められたら、おかしくなる。おかしくなっちゃう♪」

啜り泣きの入ったレイチェルの懇願を聞いて、アーサーはようやく陰唇から口を離した。口元を手の甲で拭いながら、悠然と挿入する。

「レイチェルさん、悪ぶっていたわりに、意外とたいしたことないですね。もう泣き言でですか？」

「だ、だってえ……♪ 坊やの舌、凄すぎる♪ スッポンに吸いつかれたかと思ったわ」淫乱ぶっていたお姉さんを、自分のテクニクで翻弄し、泣き言を吐かせたという現実

に、アーサーは大いに自尊心を刺激された。「まだまだですよ。次はこんなのはどうですか？」

調子に乗ったアーサーは膣孔に指をすぽっと入れると、入口の腹部側をコリコリと掻いてやる。

「そ、そこは……ああ」

慌てるお姉さんを抑えつけ、指を高速で出し入れさせる。

「ここ感じるみたいですね」

いわゆるGスポットを責めているのだ。

女性のここに性感帯があり、ここでイカされると、失禁してしまうのだ、という豆知識を聞いたことがあった。

しかし、まさかオクタヴィア相手に試す勇氣はなかった。そこで実験してみたくなったのだ。

レイチエルの白かった肌が、みるみるうちに赤く染まる。

「あ、ああ、もう、もう……ダメええ!!! でちやう!!!」

プシュー……。

断末魔の悲鳴とともに、アーサーが指をぶち込んでいる穴のすぐ下から、熱い飛沫がほとばしる。

(うわ、ほんとに漏らしちゃった。こんなにカッコイイお姉様が、無様に失禁するだなんて……)

やがて失禁を終えたレイチエルは、ぐっちりと寝台にうつ伏せに潰れた。

「はあ……はあ……はあ……」

「あはっ、なに満足しているんですか？ これからが本番でしょ♪」

淫乱お姉様に対して、完全に有利になっていることを確信したアーサーは、すでにギンギンに復活している逸物を構える。

そして、物欲しそうにヒクヒクしている華やかな陰唇にあてがう。

「誘ったのはレイチェルさんのほうですからね。これ以上はダメとは言わせませんからね」
調子に乗っているアーサーは、思いつきりぶっ込んでやった。

「あんっ」

レイチェルは背筋をのけぞらして喘ぐ。

（こ、これがオクタヴィア様以外のオマ○コなんだ。オクタヴィア様よりキュッて締まる）
締まりだけが、女性器の価値ではない。褻とか、匂いとか、濡れ具合とか、感じやすさとか、様々な判断基準があるだろう。

だから、単純に甲乙を決められるものではない。

しかし、新鮮さというのは何にも代えがたい、妙薬である。

オクタヴィアとは昨晚、初体験したばかりだ。それは嬉しくて、この上ない至福の体験であったとはいえ、ここ一週間ばかりは濃厚なペッティング三昧さんまいの日常を過ごしてから行われた体験である。

ある意味、予定調和。いずれやらせてもらえるだろう、という心のどこかに確信があっ

た。

一方で、このレイチェルとエッチできるなどと予想していなかった。

牡の身体というものは、現金なもので、同じ女性と何度もエッチしていると、快感は下がり、噴き出す精液の量まで減っていくのだという。

それに対して、初めての女性との性交渉のときに、快感はいや増し、噴き出す精液は劇的に増えるのだ。

その意味で、この体験は新鮮を極めており、痺れるような快感が、逸物から全身を駆け抜ける。

(淫乱お姉さんに負けられない！)

少年らしい克己心を刺激されたアーサーは、両手を腋の下から入れると、左右の乳房を手を取った。

それを豪快に揉みしだきながら、腰を火が出るほどに動かした。

「は、激しい♪ あん、あん、あん」

「まだまだ」

淫乱お姉さんが自分の逸物で感じてくれている、という事実をよくしたアーサーは、ますます調子に乗って、火が出るほどに激しく腰を振るい、指に挟んだ硬く尖った乳首を引っ張り上げる。

パンッ！ パンッ！ パンッ！



女の尻と男の腰がぶつかりあって、派手な拍手音が、狭い室内に響き渡る。

「すごい、こんなのはじめてえええええッ!!!」

活きのよすぎる少年に滅茶苦茶に突き回されたお姉様は、白目を剥いてしまい、口を大きく開けて、涎をタラーつと垂らしている。

もはや理性は消失し、完全に牝になり果ててしまったようだ。

あの恐ろしい女性を、逸物一本で屈服させているような優越感を覚える。

「もう、らめえ、これ以上耐えられない。イク、イク、イク、もうイッちやう、きて、きて、きて、いっばいきて」

「くっ、それじゃいきますよ」

淫乱お姉様に煽られて、逸物を思いっきり押し込んだ状態で射精する。

ドピュ！ ドピュ！ ドピュピュピュ!!!

「ああ、すごい、いっばい、いっばい！ きた！ イクーツ!!!」

射精する逸物を、膣壁がキュンキュンと締めてくる。

精液と同時に、魂を吸われているかのような感覚だ。

（すげえ、気持ちよかった。なんか男になった気分♪）

オクタヴィアとのエッチは、いつも主導権を握られていた。それに対して、アーサーは思う存分、自分の願望のままに振る舞ったのだ。

心行くまで精液を注ぎ込んでから、小さくなった逸物を引き抜く。

ぬちやつ。

半萎えの逸物と半開きの陰唇の間で、透明な糸が引き、ぷつりと切れた。それから、瞳孔からごぼつと白い液体が溢れる。

長い足の間を雫となって垂れていく。

「はあ……はあ……はあ……」

荒い呼吸を整えながら余韻に浸っているアーサーに、シートから顔を上げたレイチェルが背後を窺う。

「あはっ、凄い凄いいっぱい出したわね。二発目だというのに、驚いちやうわ」

「いや、その……レイチェルさんのオマ○コ、凄く気持ちよかったから」

いかにもがつついてしまった、という気がして、我に返ると恥ずかしい。

「ありがとう。でも、もう終わり？」

「えっ?! いや、まだまだ、まだまだいけます！」

さすがは淫乱お姉様。一発くらいでは満足してくれないようである。

女が満足していないのに、もう終わりというのは、男としての沽券にかかわるような気がして、アーサーは見栄を張る。

「うふふ、若い子はそうでないとね。今度はあたしが上になってあげるよ」

レイチェルに手を引かれたアーサーは、操られるがままに寝台の上に仰向けになった。

その上に、レイチェルが跨がる。

すると、たったいま二度目の射精をしたばかりの逸物が、期待と不安から何事もなかったかのようにそそり立つ。

「うふふ、元気なおちんちんって好きよ」

上体を起こしレイチェルは、結合部を見せつけるように股を開く。その下にはいきり立つ逸物。そして、レイチェルは腰を落とした。

「では、再び頂きま〜す♪」
ズボリ。

逸物は再び、レイチェルの体内に入った。

今度は騎乗位だ。先ほどの後背位とは逸物にかかる刺激が違う。

そして何よりも、アーサーを興奮させたのは、レイチェルのスタイルだ。

（うわ、この人、こうやって見上げると、ほんとスタイルいいなあ）

エロカッコイイお姉さんというのは、こういう女性をいうのだろう。

思わず魅入るアーサーの視線を意識したのだろう。レイチェルは両手で濃紫色の髪を掻き上げる。

晒された腋の下から見えないフェロモンが匂い立つ。

「それじゃ、動くわよ」

少年の視線を意識しつつ、レイチェルは腰を前後に振り始めた。

グチュグチュ……。

先ほどアーサーが注ぎ込んだ液体が卑猥な音とともに絡みついてくる。

騎乗位というのは、基本的に女が動いて、男は受け身だ。じっくりと女性の美しくも官能的な裸体を觀賞することができる。

(このままエッチしたら、最後の一滴まで絞り取られるのは確実だ。いや、絞り取られたい)

そんな少年の願望を満たすかのように、最初の前後から次第に上下運動や円運動が加わって、逸物が縦横無尽に振り回される。

「あう、レイチエルさん、そんなに激しくされたら、すぐ出ちゃう」

「あら、さっきの騎虎の勢いはどうしちゃったのかしら？」

レイチエルの嘲笑に、アーサーはしどろもどろになる。

「いや、さっきのは少し調子に乗っていたというか」

「まあいいけど、すぐ出したらダメだよ。もう二発も出しているんだ。我慢できるだろ」

「はい」

いくら無限の性欲のあるお年頃とはいえ、連続で射精していれば、やがては興奮度が落ちてしまう。

淫乱お姉様と楽しむのに、そうそう何度も射精していたら興奮めというものだろう。

相手の意図をくんだアーサーは頷いた。丹田たんでんに気合いを入れて我慢することにする。

「それじゃ、そろそろ本気になるよ」

「え、いままで本気じゃなかったの？」

「ええ、さっきの仕返し♪」

そう挑発的に笑ったお姉様は、一気に腰使いの速度を上げた。

「ひい」

グチュグチュグチュ……。

逸物が文字通り振り回される。

同時に目の前では、豊かな乳房が揺れまくる。

（このお姉さん、凄い。淫乱お姉様とエッチするのって楽しい♪）

女性観が開眼していくのをアーサーは感じた。しかし、楽しくて気持ちよければ気持ちいいほどに、射精感は耐えがたいものになっていく。

「レイチェルさん、も、もう！」

「我慢我慢。男の子は我慢が肝心だよ」

「ひいやい！」

淫乱お姉様の本気の荒腰。それを食らった少年は、老練な親父に弄ばれる乙女のように、身を固くして耐えることしかでない。

少しでも油断したら、一瞬で持っていかれる。

必死に我慢していたが、ついに心身ともに限界に達した。

「も、もうらめえええ!!! でちやう!!!」

泣き叫んだときには、逸物は爆発していた。

「あ、いいわよ!!!」

ドクン、ドクン、ドクン!

淫乱お姉さんの子宮を目指して、睾丸から駆け出した熱い液体が、肉棒を上がり、噴き出した。

三発目とはいえ、我慢に我慢したあとの射精である。まさに愉悦。

「あああああああ~~~~!!!」

大きな乳房を天高く振り上げたレイチェルは、弓なりに反り返った。

その絶頂姿もカッコイイ。アーサーはすべての精液を捧げていいと思った。

「はあ……、はあ……、は……」

射精を終えて心地よい余韻に浸っているアーサーの逸物を、いまだ体内に啜えたまま、レイチェルが質問してきた。

「どうだった？ あたしとのセックス」

「最高に気持ちよかったです」

認めたくないが、オクタヴィアとのセックスより気持ちよかった。

愛情などといった不純物はまったくくない、純粋に肉体的な娯楽として楽しいセックスだった。

「なら、もっともっと楽しまないとね。あたしは坊やの捕虜。遠慮はいらぬのよ。好き

なだけやっちなさい」

「う、うん」

返事をしたときにはアーサーは手を伸ばし、魔乳を鷲掴みにしていた。

そこから二人は、さらに獣となって求めあう。

オクタヴィアとのセックスのとき、なんだかんだ言っただけでアーサーには遠慮があった。

しかし、レイチエル相手には遠慮をする必要がないのだ。しかも、この淫乱お姉様なら、どんなことをやっても受け止めてくれるような安心感がある。

おかげでアーサーは、狂ったように腰を使いまくり、何回も何回も射精してしまった。

「はあ、はあ、はあ……」

精根尽き果てるまでに射精したアーサーを、ゆっくりと外しながらレイチエルは身を起す。

「さすがに十発もやれるというのは計算外だったわ。まさかおしっこまで漏らすハメになるとはね。おかげで腰がガクガク。これじゃ、その辺の葉武者はむしやにも負けそう」

そして、自分を捕えるために用意されていた拘束具で、気絶しているアーサーを縛り上げると、悠然と身支度を整える。

「うふふ、お馬鹿な子って可愛いわ♪ バイバイ♪」

第五章 お仕置き

「おい、起きろ！」

捕らわれの女勇士レイチエルとの狂乱する淫行を楽しんだ翌朝の目覚めは、アーサーのこれまでの人生で最悪のものとなった。

怖い声に驚いて瞼を開くと、視界にオクタヴィアの顔がある、というシチュエーションは最近、よくある光景であったが、その顔が憤怒に歪んでいるのである。

「あ、オクタヴィア様、おはようございます」

仰向けであったアーサーは、慌てて身を起こす。

（あれ、なんで腕が縛られているんだろう）

拘束されている腕に戸惑いながら、室内を見渡すと、オクタヴィアだけではなく、戦乙女騎士団の幹部であるベラとシエスタとマルローゼといった顔もあった。

いずれの顔も、いつにも増して厳しい雰囲気である。

戸惑いながらも、自分の姿を見下ろせば、素っ裸。しかも、逸物にはいろいろな液体がかかって乾いたあとがあり、ガビガビである。

さすがに恥ずかしくなったアーサーは、両手で股間を押さえた。

「あの……みなさん打ち揃って何事でしょうか？」

いまさら裸を見られて恥ずかしい仲ではないが、周りにはみんな服を着ているのに自分だけ裸というのは、かなりパツが悪い。

怯えた小動物のようになっていてるアーサーを見下ろしたオクタヴィアは、威圧するように指を二本突き立てる。

「さて、わたしからの質問は二つだ。おまえはなぜこんなところで寝ている？ この部屋にいるべき本来の住人はどこだ？」

「え、ええ……？」

寝ぼけていた脳に活を入れながら、改めて室内を見回しながら思考を巡らす。

そこはオクタヴィアの私室に比べると、格段に狭く殺風景な室内である。

ここは先日捕虜となったレイチェルが監禁されていた部屋だ。そして、昨日のことを思い出す。

(たしか、レイチェルさんとすっごい激しいエッチをして、それから……あれ？) 記憶が途切れていることに気付く。

そして、いまこの場にはレイチェルはいない、と詰問きつもんされている。そこから導き出されることは、おのずと決まっているのではなからうか？

ザザ……。

全身の血が、音を立てて引く、という体験をアーサーは初めて味わったと思う。認めたくない現実を確認するために、縮こまっている逸物を握り締めながら恐る恐る口

を開く。

「……あの、レイチェルさん、いないんですか？」

「ああ」

オクタヴィアの短い返事は、とことん冷たい。

失禁しそうな恐怖に襲われながらも、一縷の望みに縋って再確認。

「どこにも？」

「いないな。ちなみに馬も一頭持ち出されていることが確認されている。馬番はおまえの許可状を渡されているとのことだ」

万事休す。

この事実から導き出される結論は、もはや一つしかない。

アーサーは、レイチェルのハニートラップにかかったのだ。

スケベな少年を誘惑し、油断しているところを気絶させる。そのあとでアーサーの身分証明書を使って、城内を自由に出歩くための書類を偽造し、まんまと馬までせしめて逃亡してしまった。

すべてを悟ったアーサーは、素っ裸のまま、床に飛び降りてオクタヴィアの足下に土下座する。

「申し訳ありません！」

全面降伏である。ことここに至ったら平身低頭するしかない。

素っ裸のまま土下座している少年の頭上に、真冬のナウシアカの吹雪に匹敵する冷たい声^{こゑ}が浴びせられる。

「言い訳を聞こうかしら？」

世の中で、もつとも恐ろしい体験というものは何か？

アーサーはこの日、真の恐怖というものを実感した。

戦場で命がけの敵に刃を突き立てられるよりも恐ろしい体験に、全身といわず心までガクガクと震えるアーサーは、もつれる舌を必死に動かしながら、昨晚の出来事を細部に至るまで告白する。いや、告白させられた。

「つまり、要約するとあんたは、あの女を相手に気持ちよくエッチしたあと爆睡しているところを、まんまと逃げられた、ということよね」

「は、はい………面目次第もございません」

弁明のしようがない。

床に額がつかんばかりに頭垂れる^{うなだ}アーサーの頭髪を鷲掴みにしたオクタヴィアは、むんずと頭を上げさせる。

「アーサー、覚えているかしら？ 二日前、わたしはあなたの手柄に報いるために、エッチさせてあげたわよね。それもわたしの初めてをあげたのよ」

「はい………」

至近距離にある藍晶石の瞳が怖すぎる。まともに見ることができず、視線を外すが、オ

クタヴィアは容赦なく視線を合わせて睨んでくる。

「わたしの処女を食べた翌日に、浮気とはやってくれるわね♪」

「……いや、それは、その……だから、なんとというか、ごめんなさい」

視線が痛い。オクタヴィアの眼光は、さながら氷の刃物のように、アーサーの身体を切り裂くようである。

「そんなにわたしの身体じゃ、物足りなかったってことかしら？」

「いや、そんなことは。オクタヴィア様の身体は最高です。オマ○コも絶品で」

「それじゃ、なんで浮気したの？」

据わった目で詰問されたアーサーは全身から滝の汗を流しながら、なんとか理由を絞り出す。

「それはその……、目の前にレイチエルさんのおっぱいがきたらついムラムラと……」

「なるほど、悪いのはあなたじゃなくて、このおちんちんかしら？」

不意にオクタヴィアの右足が持ち上がったと思ったら、アーサーの正座している太腿の狭間に振り下ろされた。

「はう……っ!!」

苦悶の声を嘯み殺したアーサーは涙目を大きく見開いて、身を固くした。オクタヴィアの右足の爪先が、縮こまっている逸物を踏み潰している。

「言うこと聞かない悪いおちんちんは、掃り潰しましょう」

オクタヴィアはニコリともせず、冷たい眼差しで、硬い靴底に体重をかけていく。

「ひいあ……ご、ごめんなさい。許してください」

幸いなことに、鞆丸は踏まれていないから、地獄の激痛というわけではない。しかし、精神的な威圧感は、戦場で槍を喉元に突きつけられたようなものだ。

逸物を踏みにじられた少年は恥も外聞もなく、涙はもとより、涎や鼻水まで流して懇願する。

さすがに見かねたシエスタが、進み出てアーサーと並んで懇願した。

「申し訳ありません。オクタヴィア様の寵愛を受ける身でありながら、それを裏切るなど万死に値いたします。さりながら、我が愚弟の忠義は人後に落ちぬものと信じます。ぜひともご堪忍あつて、いま一度、名誉挽回の機会を下されますよう、伏してお願い申し上げます」

幼少のころからネエヤとして側仕えをしてきた女の懇願には直接答えず、氷の国の王女様は冷笑を浮かべる。

「こら、おまえはなんでちんちん大きくしているんだ？」

「それはその……」

軍靴で逸物を踏まれるというのは、男として大変な屈辱的であり、痛いはずなのに、逸物はどんどん大きくなっている。

(いや、なんで大きくなっているか、ぼくにもわからないし……)

これにはシエスタも弁解できないらしく、呆れた視線を義弟に送る。

義姉に軽蔑されたアーサーは、混乱してあわあわすることしかできない。

「これではお仕置きにならないじゃないか？　なるほど、おまえは変態ドマゾ男だったんだな」

やる気を削がれた、と言いたげにオクタヴィアは逸物から足を引き、掴んでいた頭髪から手を放した。

アーサーは無様に横倒しになる。

「まあいいわ。あなたは譜代の家臣だしね。あなたの父上はドモス軍を相手に面目を施した名将。その先祖の功績を鑑^{かん}みて許してあげる」

「ありがとうございます」

声もないアーサーに代わって、傍らのシエスタがお礼を言う。しかし、オクタヴィアの怒りはこれでは収まらなかった。

「ただし、小姓は解任する」

「はい」

この程度は覚悟すべきだろう。マクスウェル家の姉弟は素直に了承した。

(命を拾っただけ儲けものだ。この上は死ぬ気で働こう)

そんな決意をしているアーサーを見下ろして、オクタヴィアの口元が皮肉げに歪む。

「新しい役職として、女騎士たちの慰安役を命じるわ」

「……慰安ですか？」

意味がわからず反芻するアーサーに、オクタヴィアは冷たく笑って解説する。

「平たく言うと、女騎士たちの公衆便所というやつね」

「っ!？」

絶句するアーサーをまえに、オクタヴィアは声もなく凶悪な笑みを口元に浮かべる。

言葉もないアーサーに代わって、表情を引き攣らせたシエスタが口を挟む。

「じよ、冗談ですよ」

「もちろん、本気よ。適材適所という言葉があるでしょ。ドスケベなその子にはお似合いの役目だわ」

「……」

アーサーも、シエスタもぐうの音も出ない。

「おまえは、見た目はいいからね。女騎士たちに人気がある。長い戦陣でみな性欲が溜まっているからね。わたしだけ色小姓を連れていて不公平だ、という不満の声が上がっているのは知っているわ。それを解消するためにも頑張ってもらおう」

「は、はい……」

頬を引き攣らせながらも、アーサーは頷くしかない。

そんなやり取りをニヤニヤしながら見守っていた副将に、オクタヴィアは声をかける。

「ベラ、あなたもやりたがっていたでしょ」

「まあ、ね、男つてのはちよつと遊んでやるつもりでも、すぐ本気になるから面倒臭いんだけど、後腐れなく遊べる相手がいるっていうのはいいわね。みんな歡ぶと思うわよ」

戦場に出る男女比でいえば、男のほうが絶対的に多い。だから、女がその気になれば、男に困る状況ではない。しかし、ことに及んだあと、いろいろと困るのは女だ。

妊娠などしてしまつたら、戦にならない。

だから、女騎士たる者は、総じて操が堅いものだ。

「もうこいつに貞操なんてないに等しいのだから、好きにしちゃっていいわよ」

「りようかゝい。隊のやつにも言っておくよ」

両手を頭の後ろで組んだベラは軽く請け負う。

「ということだから、アーサー、新しいお仕事に励みなさいね。大好きなオマ○コを舐めていればいいだけなんだから、理想の職場でしょ」

冷たくそう言い残してオクタヴィアは、ベラとマルローゼを従えて部屋を後にした。

※

「わかってるんでしょね。オクタヴィア様が激怒するのも当然だわ」

部屋に残ったアーサーを、義理の姉シエスタが厳しく叱りつける。

いつもアマアマな姉としても、今回はかりは腹にすえかねたのだろう。

「申し訳ありません、義姉さん。家名に傷をつけました」

「まったく我が弟ながら、今回のことは弁護のしようがないわ。せつかく、オクタヴィア

様の寵愛を得たというのに、すべてを台無しにして……」

「すいません」

本当に自分でもバカなことをしたと思う。

レイチエルとのエッチは気持ちよかったが、それは単に肉体だけのことであり、心の交流があつたわけではない。

相手が何を考えているか、まったく想像しなかった。

ただただ、セクシーで綺麗なお姉さんとエッチできる、という甘すぎる夢に溺れた結果だ。

そして、たった一度の関係で、敬愛し尊敬していた女性からの、信頼と愛情をすべて失つたのである。

自分の軽率さが腹立たしくもあり、慙愧ざんきに堪たえない。

アーサーの落ち込みようを見て取ったシエスタは、明るい表情を無理やり作る。

「まあ、やってしまったことは仕方ないわ。もうオクタヴィア様をあなたの嫁にするという夢は台無しだろうけど、あなたはクロムウェル家の嫡男として、手柄をあげ、家名をあげることを使命とするのよ」

「……。はい」

本当にそれしかないのだ。

（次の戦では討ち死に覚悟で闘おう）

と決意を新たにするアーサーを、一通り叱責したシエスタは、結局、いつもの甘い姉の顔になる。

「それよりおちんちん、大丈夫？」

「あ、はい……」

オクタヴィアに踏みにじられたことを、心配しているようだ。

「ちよつと、見せてごらんさい」

「え、いいよ」

「ダメよ。あなたはマクスウェル家の大事な跡取り息子なのよ。おちんちんにもしものことがあつたら、大変よ」

そう言ったシエスタは、弟の逸物を手に取り、丁寧に調べる。

「まったく、オクタヴィア様にも困ったものね。いくら腹立たしいからといって、世の中にはやっていいことと悪いことがあるわ。男の子のおちんちんを足蹴にするとするのは、一番やってはいけないことよ」

「まあ、ぼくが悪いんだし……」

そんなやり取りをしていると、シエスタの手の中で、逸物はみるみるうちに体積を膨張させて、臍にとどかんばかりに反り返ってしまった。

これにシエスタは、眼鏡の奥で目を剥く。

「ちよ、ちよつとなに大きくしているの？」

「だって、義姉さんがそうやって弄るから……」

慌てたアーサーの言い訳に、シエスタは憤然と吐き捨てる。

「まったく、姉に弄られて大きくするだなんて、あなたって、オクタヴィア様の言う通り、色情狂なのかしら？」

逸物を左手に持ったまま、右手で頬を押さえたシエスタは、困ったものだと言いたげに溜め息をつく。

（いや、女性におちんちんを握られたら、大きくなって当然というか。はあく……義姉さんも、こういうところは処女なんだよなあ）

頭のいい女性であることは誰も認めるところなのだが、いかんせん、男と付き合ったことがないから、男の生態がわかっていないのだ。

「いい。あなたのこのだらしないおちんちんが、今回の事態を招いたのよ。反省しなさい！」
逸物を握り締めたシエスタが、不満顔の弟をお説教しているところに、部屋の扉が開いて、ひよっこりとベラが顔を覗かせた。

「お、さっそくやっているね。参謀殿が来ないから、さてはとは思ったけど、やっぱり、愛しの弟をようやく食えるってことで、お姉ちゃんは張りきっているってわけだ」

「そんなんじゃないわよ！」

揶揄されたと思ったのだろう。逸物から手を離れたシエスタは、血相を変えて叫ぶ。
その剣幕にベラは肩を竦める。

「まあ、どつちでもいいけど、……ということ、アーサーくん。ご奉仕よろしく♪」
そう言ったベラがアーサーを押し倒そうとしたものだから、シエスタは慌てる。

「ちよ、ちよつと、ベラ。あなた、本気でうちの弟を、肉パイプ扱いするつもり？」

アーサーを抱き締めながらベラは、キョトンとした顔で応じる。

「何言ってるの？ それがアーサーくんの新しい仕事でしょ」

「ぐっ、でも、あんなのオクタヴィアの嫌味よ。アーサーは名門マクスウェル家の跡取り息子なのよ。そのおちんちんを入れられるのは選ばれた女であるべきだわ。そんな誰彼構わずあげていいものではないわ」

弟を特別視しまくっているシエスタの主張を聞き流したベラは、露悪的な表情で少年の顔を覗き込む。

「アーサーくんは、自分の仕事をないがしろにするのかな？」

「そ、そんなことはありません。ぐっ、や、やります」

オクタヴィアに命じられたことを反故にはできない。たとえどんなに理不尽な命令であっても、従う義務がある。

その答えにシエスタが喫驚きつきょうの声を上げる。

「ちよ、ちよつと……アーサー、何言っているの！ あなたはマクスウェル家の次期当主としてプライドを持たなくてはならないわ」

「というわけで、アーサーくんのお仕事の邪魔をしないでね♪」

絶望の表情を浮かべているシエスタに向かって、ペラはシッシッと犬でも追い払うように右手で煽る。

「アーサーは罰を受ける身なんだから、それっぽくしないとダメよね。幸い、ここは罪人を収監するための道具は揃っているしね」

妖しく笑ったペラは、レイチエルを捕えていた縄を持って、アーサーの両腕を縛る。

「さ、そのまま寝台の上に横になりなさい」

「……。これでいいですか？」

素っ裸のまま、両腕を拘束され身動きが取れなくなってしまったアーサーは、さすがに不安になる。

そんなアーサーの顎に、ペラは指をかけると、鼻先で甘く囁く。

「そんなに怖がることはないわ。ペラお姉さんがたつぷりと気持ちよくしてあげてるよ」

「あ、ありがとうございます……」

戸惑いながらもアーサーとしては、そうとしか言いようがない。

「でも、男としての自尊心とかはコナツゴナになるから覚悟しておいてね。一度やってみたかったのよね。アーサーくんみたいな美少年を、盛りのついた猫みたいに、無様に喘がせるってよ」

「あ、あははは……」

頬を引き攣らせたアーサーは、全身から滝のような汗を流しながら、乾いた笑い声を上

げることしかできなかつた。

その顔を跨がる形で、ペラはすつくと立つ。

「ふっ、素直ね。仕事に忠実なのか、それとも単なるドスケベなのか、まあ、あたしはどっちでもいいけどね♪」

そう嘯いたペラは、鎧と下着を脱ぎ捨て、豊麗な女体を晒す。そして、わざとらしく両手で股間を隠す。

「うふふ、さすがにちよつと恥ずかしいな」

「……」

少年の視線を自らの股間に釘付けにしながら、ペラは膝を開き、ゆつくりと腰を下ろしていた。

アーサーの鼻先に、手で覆われたペラの股間がくる。指の狭間から赤い陰毛が飛び出しているペラは、舌舐めずりをしながら笑う。

「見たい？ あたしのオマ○コ♪」

「み、見たいです」

相手の思惑は承知していながらもアーサーは、牡としての欲望と好奇心を抑えることができなかつた。

「仕方ないわね。アーサーくんがそう言うなら、見せてあ・げ・る♪」
勿体ぶりながら、ペラは指を離す。否、指を開いた。

くばっ。

アーサーの鼻先で、女唇が開かれた。

(うわ、これがペラさんのオマ○コか。やっぱり従姉妹だからかな。オクタヴィア様のオマ○コと少し似ている)

アーサーの見たことのある陰唇は、オクタヴィアとレイチェルの二人だけだが、明らかにオクタヴィアの形状に近い気がする。

「あは、食い入るように見ちゃってもう♪ あはっ、でも、あたし、エッチな男の子って好きよ。やっぱ若い男はガツガツしていてナンボよね」

気取った仕草で赤毛を掻き上げたペラは、そのまま腰をさらに落とした。

ムチュ!

鼻と口が同時に湿った粘膜に塞がる。

「っ!」

「さあ、お舐め♪」

アーサーは否応を言えるはずがない。騎士団随一の武闘派のお姉様の陰唇に吸いついた。ピチャ。ピチャ。ピチャ。ピチャ。

飢えた犬が肉を貪るように、無心に貪る。

いや、下手に逆らったら陰唇で窒息させられてしまう。その意味で生死をかけたクンニだ。

「ああん、さすがに色小姓ね。オマ○コ舐めるの上手♪」

膝を思いつきり開いて、蹲踞の姿勢で少年の顔面に座り込むペラは、たまらないといった様子で吐息を上げ。

見かねたシエスタが叫ぶ。

「ちよ、ちよっと、我が家の跡取り息子になんてことを」

「うふふ、何言っているのよ、参謀殿。この子、凄い飲んでるわよ。ほら、よく見なよ。この子のおちんちん」

ペラが指し示したのは、アーサーの下半身だ。

仰向けになっている少年の腰では、逸物が天高くそびえ立っている。

それを見たシエスタは、血相を変えて叱責する。

「アーサー！ そんな屈辱的な扱いを受けながら、何おちんちん大きくしているの！ 恥を知りなさい！」

そうは言っても、無理やり舐めさせられているとはいえ、ワイルドセクシーなお姉さんの陰唇に顔をつっ込んでいる最中である。

興奮するな、というほうが無理だ。

「あ、気持ちいい♪ あはっ、この舌使いといい、無駄に上手すぎ。オクタヴィアのやつ、仕込みすぎよ。まったく、どれだけ可愛がったんだか」

アーサーの上でペラが悶えていると、怒りを抑えられないシエスタの声が陰々と聞こえ

てきた。

「ああ、もうアーサー。あなたはそんなにオマ○コが好きなの」

「……」

口と鼻を陰唇で塞がれているアーサーに答える余裕はない。しかし、本能的に頷いてしまったかもしれない。

そのさまにシエスタは激怒する。

「ああ、もう、そんなにオマ○コ好きなら、そんなあばずれではなくわたしのオマ○コも舐めなさい！」

シエスタは無言を言わず、ペラを追い落とすと、自らがアーサーの顔を跨がってきた。タイトなスカートがたくし上がり、腹巻き状態になってしまった。

スカイブルーのショーツは、お洒落なお姉さんに相応しいアダルトなものだが、そのまただり部分には大きな濡れ染みができている。

「いつ、義姉さん!？」

驚くアーサーに跨がった状態でスカートの中に両手をつっ込んだシエスタは、スカイブルーのショーツを脱ぎながら険悪な表情で睨みつける。

「なに、ペラのオマ○コは美味しそうに舐めるくせに、義姉さんのオマ○コは舐められないというの」

「い、いえ……」

赤縁眼鏡越しのシエスタの眼差しが据わっていて恐ろしい。

血は繋がっていないとはいえ、幼少のころから実の姉のように、大事に守り育ててくれた女性だ。

大好きであったし、尊敬も敬愛もしていたが、一線を越えようと思ったことはなかった。しかし、いまこの場で拒絶することなど、できるはずがない。

「な、舐めたいです。義姉さんのオマ○コ」

「まったく、舐めたいなら舐めたいって、わたしにお願いすればよかったのよ。アーサーのことを一番可愛く思っているのは、わたしのなのよ」

そう言ってシエスタは腰を下ろしてきた。

（これが義姉さんのオマ○コか……。陰毛が濃いな。まるでジャングルみたいだ）

男に見せることを想定していなかった無防備な秘部ということなのかもしれない。かなり広範囲にもつきりと茂っている。

その奥に半開きになった陰唇があった。

いままで見たことのある女性の中で一番年上の陰唇であるが、未使用なためか、単なる体質なのか、綺麗なサーモンピンクをしている。

それを顔に乗せられたアーサーは、亀裂の中に舌を押し入れてみた。

「ああん♪ ほんと誰のオマ○コでも、差し出されたら舐めるのね。なんでこんなスケベな男の子に育ってしまったらかしら。昔はもつと奥手で、わたしの背中を流すふりをして、

おっぱいに触る程度だったのに♪」

「いや、こいつが好きものになった元凶は、間違いなくあんただから」

吹っ飛ばされ尻餅をついていたベラが、思わず突っ込む。しかし、アーサーの顔面に座り込んでしまったシエスタは聞いていない。

「あは♪ アーサーに、弟に舐められちゃう。わたしの汚いオマ○コを舐めさせるだなんて」

「き、綺麗ですよ。義姉さんのオマ○コ。それに美味しい」

幼少のころから実の姉のように接してくれた、血の繋がらない姉。その陰唇に舌を突っ込んだアーサーは高速回転させていた。

「ああ、大事な弟の顔に跨がるだなんて、わたし姉失格だわ。ああん♪ でも、この子の舌、すごい、痺れる♪」

痴情に狂ったシエスタは、もうきつくてかなわないと言いたげに、ブラウスの中から爆乳を引きずり出すと、両手で豪快に揉みしだきつつ、蹲踞の姿勢のまま弟の顔面にヌレヌレの陰部を擦りつける。

半開きにした口元から涎と嬌声を絶え間なく垂れ流すさまは、まさに痴女の様相だ。

そんな痴態を横目に床から立ち上がったベラは、呆れた顔で肩を竦める。

「なんだかんだ言っつて、ブラコンの正体を現したわね」

「違うわ。この子は女にだらしなすぎなのよ。このままでは女で身を滅ぼすのが目に見

えている。それを克服するために、わたしも身体を張って修行してあげるのよ」

「うわ、そこまで酷い屁理屈を聞いたのは初めてよ」

盛り上がる義理の姉弟の間に入ることを躊躇ったベラは、部屋の入り口に向かって声をかける。

「マルローゼ。あなたも入ってきなさいよ」

「えっ」

どうやら部屋の扉を少しだけ開いて、その隙間から陰気な少女は覗いていたらしい。

「あんたまだ男知らないんでしょ。いろいろ教えてあげるわよ」

「わ、わたし……別に……」

見つかってしまったって身の置き所がないといった様子のマルローゼは、赤面した顔を俯かせる。

「いいからいいから、オクタヴィアやシエスタを見ていたらわかるでしょ。二十歳をすぎても、男とまともに付き合ったことがない女って惨めよ。将来、悪い男に騙されないうちにも少し遊んでおいたほうがいいわ」

その理屈に、思わずアーサーの顔の上で、腰を振るっていたシエスタが反論する。

「結婚する気もないのに、男とホイホイやる女のほうが問題です」

そんな参謀の姿をまじまじと見たマルローゼは納得したように頷く。

「わ、わかった……」

「うっ」

トコトコと部屋に入ってきたマルローゼの心理を想像して、シエスタは少し傷付いたようである。

「よし、いいいいこ」

明るく笑ったペラは、パツが悪そうなマルローゼの前頭葉を撫でる。

「男ってなんだかんだ言っつて、淫乱女が大好きよ。だからこいつも、あの女狐の手管に嵌まつて、こんなざまになったわけ。裏を返せば、マルローゼもエッチなテクニクを修得すれば、この子もあなたに惚れちゃうわよ」

「変な勘ぐりはやめて。呪うわよ」

不機嫌そうに不良の先輩の手を張り払ったマルローゼは、顔を背けてぼそぼそと呟く。

「アーサーなんてどうでもいいけど、男をメロメロにする技はちよつと、興味あるだけ……」

「もう、マルローゼだったら、素直じゃないんだから。でも、そこが可愛いのよね」

ペラに限らないが、戦乙女騎士団のお姉様方は、マルローゼが妹のようにお気に入りなのだ。

「よし、どうせだから、アーサーくんを選ばせてあげよう。わたしのオマ○コとマルローゼのオマ○コ。どっちに入りたい？」

「い、どっちと言われても……」

本音を言えば、どちらかやりたいといえはやりたい。しかし、そんなことを口にしたなら、また目の前のシエスタが激怒する。

答えに詰まるアーサーに、ペラは悪戯つぽく蘊蓄うんちくを垂れる。

「マルローゼは処女よ。処女は重いわよ。痛がるし、テクニクなくせに、いろいろと責任とか取らされるし……」

「そんなこと考えてない」

思わず怒った口調で反論するマルローゼに、ペラは悪戯つぽく笑う。

「その点、あたしは経験者。テクニクにも自信あり、後腐れなく遊べるわ。さつ、どつちのオマ○コに入りたいの？」

「……」

究極の二者択一だ。

ペラとマルローゼ。どちらが好きか、と聞かれれば、どちらも同じ程度には好きだ。でも、どちらか一番ではない。

アーサーが一番好きなのは、オクタヴィアである。次いでシエスタであろう。

「ちよ、ちよつと、ペラ。あんた本気でそこまでするつもりなの？」

クンニが中断しても黙って様子を見ていたシエスタの声に、ペラは顎に人差し指を当ててわざとらしく考える仕草をした。

「さあ、どうしようかな？ ……プブー、時間切れ。ということで本日の一番槍はあたし

「がいただき♪」

そう嘯いたペラは、流れるような動作でアーサーのいきり立つ逸物の上に跨がると、腰を下ろしてきた。

「ずぼり……」

いきり立つ逸物は、逞しい女体の中に呑み込まれた。

（これがペラ様のオマ○コ。やっぱり、どこかオクタヴィア様のオマ○コに似ているな）
年齢が四つ上で、経験者のせいかな、全体にオクタヴィアよりも広い肉壺だが、襲の感覚といい、締めつけといい、どこか似ている。

しかし、ペラの膣孔は広いのだが、きつく締まる。

（オマ○コって入れ心地がみんな違って、奥が深い）

どれがいい悪いではなく、個性の違いが楽しい。

「うんうん、なるほど♪　これがオクタヴィアの色小姓のおちんぼか、さすがに絶品だわ」
気持ちよさそうにペラは目を細めた。そこにアーサーの顔に跨がっていたシエスタが半狂乱になって非難する。

「食べたわね。よくも、うちの子のおちんちん食べたわね」

「まあ、この年頃の男の子の下半身に節操を求めても無駄よ。いくら涎の出る美少年といつても、中身は単なるやりたい盛りのガキなんだから。そここのところがオクタヴィアも、あんたもわかってないのよね」

騎乗位になったペラは、両手をアーサーの腹部に置きながら舌舐めずりをする。

「アーサーくんは激しいのが好きなんだって？ あたしも腰使いには自信があるわよ。フレイアの女になんか負けてらんないからね。がつつりいくわよ。マルローゼも見てなさい。男をメロメロにする技を見せてあげるわ」

そう言っつてペラは、腰を動かし始めた。

ぐいぐいぐいぐい……。

逸物が縦横無尽に振り回される。

驚いてシエスタの股間の下から覗き見ると、巨大な乳房が二つド迫力で揺れていた。

（すげえ、オクタヴィア様の美乳。シエスタ義姉さんの爆乳。レイチエルさんの魔乳にも勝るとも劣らない。これぞ巨乳って感じだ）

単に大きさだけを問題にするなら、シエスタのほうが大きい。しかし、シエスタの乳房はいかにも柔らかかそうなのに対して、ペラの乳房は弾力がありそうなのだ。

褐色の乳首も、太い乳頭がニョッキリと勃起している。

（下手に触ったら弾き飛ばされそうだ。ああ、あのおっぱい触りたい、揉みたい。あの大きな乳首を口に啜えて舐めしゃぶりしたい）

両手を縛り上げられているのが残念でならない。

アーサーの物欲しげな視線を察したペラはニヤリと笑う。

「どお、あたしのオマ○コ、あの性悪女に落ちる？」

「凄い、凄い気持ちいいです。こんなの初めて」

シエスタの陰唇に顔を埋めながら、アーサーは叫んだ。

淫乱お姉様レイチェルに勝るとも劣らぬ腰使いだ。いや、ベラのほうが体格がいい分、体重もあるのだろう。

逸物に伝わる力感は格段に上だ。

(ちんちん、もぎ取られそう♪)

かつて受けたことのない逞しい女の力業に、アーサーは悲鳴を上げた。

「もう、ダメ、そんなにされたら、すぐ出ちやう」

「いいわよ。いつ出しても。好きなときに出しさない。いい女は男がいついつたって、合わせられるのよ」

「は、はい……」

そんな会話をしているところに、シエスタの叱責がきた。

「アーサー、舌がお留守になっているわよ」

「はい。ごめんなさい」

アーサーは射精を我慢するためにも、目前の陰唇に集中することにする。

淫核を捏ね回し、包皮を剥き上げ、尿道口を探った後、膣孔に舌を思いっきり押し入れた。

「はいいいいいい!!!」

シエスタが頓狂な声を上げた。

（あ、そういえば義姉さんには処女膜があつたんだっけ。そうか、義姉さんの処女膜か。誰にもあげたくないな……）

視点が近すぎて見えないが、いま舌先には敬愛する義姉の二十七年間も守られてきた開かずの扉がある。

シエスタには幸せになつてもらいたいと思うが、これを破る男がいることは許しがたいことのような気がした。

他の男のものになつてしまふくらいなら、このまま舌先で破つてしまいたい。そんな願望に捕らわれて、瞳孔に入れた舌を高速回転させる。

「ああ、そ、そこ……ダメ、そこ舐められたら、わたし……もう、ダメえええええ!!!」
プシュ——ッ!

啜り泣きとともに、アーサーの鼻先で熱い滴が弾けた。

（うわ、義姉さんイッたんだ。ぼくにオマ○コを舐められて。いや、処女膜を舐め穿られて）

誇らしい気分と、いささかの罪悪感に浸った次の瞬間、油断した。

下半身は赤い獅子のような女に捕食され、貪り食われていたのだ。

「あはは、ピクンピクンしている。くるくるくる、きたああああ!!!」

陰囊から噴き出した熱い血潮が、女たちの媚肉に包まれた肉棒を駆け上がり、そして、

天高く舞い上がった。

ブシユユユユユツツ!!!

逞しい女の広い膣孔に、牡の欲望は無限に呑み込まれていくかのようにであった。やがて射精が収まると、ペラは満足そうに吐息をつく。

「ふう……。凄い量きたわ。さすがは本日が一番槍。精液でお腹いっぱいになる感覚。これこそ女の幸せってやつね。これ以上のストレス解消はないわ」

満足と言いたげに溜息をつくペラを、シエスタが幼児退行したかのような声で非難する。「ああん、ずるい。わたしもアーサーのおちんちん食べたい」

ダダを捏ねるシエスタを前に、ペラがからかうように応じる。

「こいつはもうあたしらの肉便器ってことになったからね。やりたければ別に構わないけど、いいの？ 我らが参謀殿は、オクタヴィアが結婚するまで結婚しないって言ってなかったっけ」

「結婚はしないわよ。でも、セックスしないとは言っていないわ。アーサーのおちんちんは別物よ」

シエスタの主張に、ペラは呆れたと言いたげに肩を竦める。

「まあ、いいけどね」

ズボリ。

熱い女体から逸物が飛び出す。



「ああ、アーサーのおちんちん」

もう我慢できないとばかりに、肩にかかっていた軍服やブラウス、インナー、スカートまでポイポイポイと脱ぎ捨てて、アーサーの腰の上に跨がったシエスタが腰を落としてきた。

しかし、射精したばかりの逸物は、半萎えである。シエスタの膣孔の前で頭を垂れる。

「ああ、もう、アーサー。これはどういうこと。お姉ちゃんとやりたくないの！」

「そう言われても」

シエスタの愛液で顔をドロドロにしているアーサーは、困った顔をする。

見かねたベラが口を挟む。

「たつく、手間がかかるわね。マルローゼ。今度はあんたが、アーサーの顔に跨がりなさい」

「え、なんでわたしがそんなことを」

不機嫌そうに応じる最年少団員に、ベラは説明する。

「男をすぐに復活させるには、若い女の処女マ○コが一番よ」

その言葉に、半萎えの逸物の上に跨がったシエスタが、縫るようにマルローゼを見る。

「わ、わたしは……そういうのは、ちよつと……」

困ったように赤面して顔を背けるマルローゼの背後に回り込んだベラは、そのゴテゴテとしたローブを脱がせてやりながら悪魔のように囁く。

「アーサーの舌は、オナニーより気持ちいいわよ」

「……」

何か反論しようとしたマルローゼの口に、ペラは指を立てる。

「オナニーはしない、なんてカマトトぶらなくてもいいわよ。オナニーぐらい普通のことよ」

年上の先輩の言葉に、マルローゼは思わず頷いてしまった。しかし、なお反論する。

「でも、そこ汚いし……お風呂あんまり入れてない」

出征中である。いくら幹部といえども、風呂は自由に入れられない。

さらに言えば、マルローゼはあまり風呂が好きなタチではないようだ。

その懸念に、ペラはあっけらかんと応じる。

「あはっ、オマ○コは臭くてあたりまえ。野郎は臭いオマ○コが大好きだから安心しなさい。アーサーくん、マルローゼのおしっこ臭いオマ○コを舐めたい？ 舐めたくない？」

「そんな、臭くはないと思う」

マルローゼは心外そうに抗議する。しかし、アーサーは聞いていなかった。

ペラと一発やったことで、一線を越えてしまったというか、理性が溶けたということだろうか。欲望の赴くままに叫ぶ。

「舐めたいです！ マルローゼの臭いオマ○コ！」

「だからそんなに臭くない！ 呪うわよ！」

怒りをあらわに叫んだマルローゼは、激情のままにアーサーの顔面に腰を落とした。

「うぷっ」

黒いパンストに包まれたマルローゼの股間に顔が埋まる。

マルローゼは素肌を晒すのがあまり好きではないらしく、全身タイトのインナーに包まれていたのだ。

タイト越しに白いショーツが見える。黒い水玉による幾何学模様が付いているのが、マルローゼらしい。

布越しにふつくらとした柔らかさと温かさを感じるが、女の子の股間を顔面に感じているのに、布越しでは物足りない。

「ちよ、ちよっどっ!?」

驚くマルローゼにお構いなく、アーサーはほとんど本能の赴くままに、彼女の股間にむしゃぶりついた。いや、かぶりついた。タイトを噛み破り、ショーツのまたぐり部分を引きずり退かすことに成功する。

「うわ、これがマルローゼのオマ○コなんだ」

「呪われるといいわ、この野蛮人」

マルローゼは顔を真っ赤にして叫ぶ。

オクタヴィア、レイチェル、ベラ、シエスタと年上の陰唇しか見たことのないアーサーにとって、同じ歳の少女の陰唇というのは新鮮だった。

（うわ、陰毛がほとんど生えてない。ツルツルで綺麗だ。それなのになんか凄い匂いきつ
い）

バターっぽい臭気が、鼻腔を刺激する。いわゆる処女臭だ。

きつい臭いだが、嫌悪感はない。逆に男の性欲を駆り立てるスパイスである。

本日三個目の陰唇に、アーサーは躊躇わずしゃぶりついでしまった。

「ああ〜〜!!!」

普段陰気な少女も、驚いて甲高い悲鳴を上げる。

細身のマルローゼは、陰唇も脂が少ないと言うべきか、全体に小ぶりである。しかし、溢れる愛液に関して言えば濃密である。

どろっと濃い、濃密な愛液がアーサーの口腔に溢れ返る。

「……オマ○コならなんでもいいんだ」

歓喜するアーサーを軽蔑した眼差しで見下ろしながらマルローゼは吐き捨てる。

「いや、そういうわけではなくて……」

しどろもどろになるアーサーに、ペラが助け舟を出す。

「こいつを人だと思っているから恥じらうのよ。単なるオナニーの道具と思えばいいの」

「そうね。この駄犬。わたしのオマ○コをお舐め」

どこかふつきれたようなマルローゼの命令を受けて、アーサーは改めて舌を動かす。

「こ、これ……凄い……ああ……」

大人ぶったマルローゼだが、その身体は敏感な思春期の少女に過ぎない。

悶絶するマルローゼの姿に、ベラはうっとり溜め息をつく。

「でしょ。男を知っちゃった女が、もう男なしの生活に耐えられなくなっちゃうっていうのわかるでしょ」

「はうああん♪」

普段の陰気な少女の口から漏れているとは思えない、艶めかしい吐息だ。

それを聞いて、アーサーはますます夢中になって舌を動かしてしまう。

ピチャピチャピチャ……。

「あ、アーサーのおちんちん大きくなってきた」

射精したばかりの逸物が再び隆起していくさまを、シエスタが目ざとく見つけた。

今度こそと、自らの瞳孔に添えて腰を落とした。

「ひい」

逸物が少しだけ埋まったところで、シエスタは眼鏡の奥で、苦しそうに眉をひそめる。

「参謀殿って、ネタじゃなくて本当に処女だったんだなあ」

「そうよ。悪い」

強気に応じたシエスタだが、逸物はなかなか入れられない。どうやら、かなり硬い処女膜らしい。

「悪くはないけど、年齢が年齢だし、噂に聞く処女膜硬化を起こしているだろうね」



見るに堪えないといった表情を浮かべたペラは、シエスタの背後に立つと、その両肩に手を乗せて、そのまま体重をかけた。

「あっ！」

鉄壁を誇った乙女の砦が突破された。

ズブズブズブ……。

狭い隧道すいどうを押し広げるようにして逸物が埋まっていく。

（うわ、きつい。これがシエスタ姉さんのオマ○コ……）

まさに破瓜ならではの締めつけた。

敬愛する姉の初めての相手になれた歓びに浸る間もなく、逸物は根元まで入った。

「くぅ〜〜」

シエスタは眼鏡の奥で、目をきつく閉じている。

「うわ、かなり痛めたわね。血が結構出てるわ。まったく、早く処女膜を捨てないからよ。年取ってからの初体験って悲惨ね」

「……」

ペラの解説に、シエスタは憎まれ口を返す余裕もないようだ。

本気で痛そうだと察したペラは肩を竦める。

「今日のところはこの程度でいいじゃない。アーサーくんは逃げないわ」

なんだかんだで面倒見のいいペラは、シエスタの腋の下に腕を入れると、持ち上げて結

合を解かせた。

ぶるん。

血塗られた逸物が外界に元気よく飛び出す。

内腿を血で汚して、ぐったりと脱力するシエスタを脇に置きながら、ペラはアーサーの顔に跨がり、茫然としている少女に声をかける。

「次はマルローゼ。あんたやっちやいなさいよ」

「わたしは別にそこまでは……」

どうやら、壮絶な初体験を目の当たりにして、かなり委縮しているようである。

「処女膜なんてあったところで、百害あって一利なし。早く捨てたほうがいいわよ。二十代後半になって捨てた女の哀れな姿があれよ」

ペラが後ろ手に指差した先には、股間を押さえて蹲うずくまっているシエスタの姿があった。

それを一瞥して、マルローゼの腹は決まったらしい。

「まあ、経験者に見守ってもらったほうが、安全だから……」

アーサーの顔から腰を上げたマルローゼは、いそいそと前任者の破瓜の血で汚れた逸物の上に移動した。

「す……は……す……は……」

大きく深呼吸をするマルローゼを、アーサーは戸惑ったように見守る。

「あの……マルローゼ？」

「黙って。呪うわよ」

ピシヤリと言われたので、アーサーは押し黙る。

(ベラ様のときは義姉さんのオマ○コが邪魔で、義姉さんのときはマルローゼのオマ○コが邪魔で見られなかった。でも、今度はマルローゼの結合姿を見守ることができると)

恋人でもない女性と次々と結合する。なんとも不思議な気分になっているアーサーの前で、さらに大きく息を吸ったマルローゼは、思いきりよく腰を下ろす。

ずぼん！

逸物はあつさりマルローゼの体内に呑み込まれた。

それをベラが心配する。

「大丈夫、痛くないの？」

それに対してマルローゼは、いささかバツが悪そうに応じる。

「わたし……道具使っていたから……」

「あは、自分で処女膜を破っていたんだ。なら、ますますいいじゃない。今後はこの生チンポをパイプとして使えばいいわ」

「うん、こいつは単なる肉パイプ。下僕なんだわ」

アーサーを見下ろすマルローゼは、なぜか妙に格好つけた表情を浮かべると、長い黒髪をさらっと払った。

これが二十歳過ぎの女性であったなら、妖艶な悪女っぽくて格好よかったのだろうが、

現在のマルローゼでは、背伸びした子供そのままだ。

そんな大人ぶった仕草が、ペラには可愛くて仕方ないらしい。

「それじゃ、その調子で、ザーメンを搾り取っちゃいなさい。あたしのやっているのを見ていたんだから、やり方わかるでしょ」

「……うん」

多少不安そうながらマルローゼは、慎重に腰を前後に使いだした。

（うわ、マルローゼのオマ○コって、小さくてすげえザラザラ）

身体が小さいだけあって、腔洞も小さいようだ。コンパクトなのに、高性能。

いや、アーサーと年齢が同じだけに、互いの性器の大きさが同規模であり、相性がばっちりなのかもしれない。

腰使いはお世辞にも上手とは言えないが、アーサーの逸物にはちようどよかった。

（レイチエルさんや、ペラ様のような激しい腰使いもよかったけど、マルローゼのこの初々しい感じもたまらない）

スケベ少年は、喘ぎながら訴える。

「マルローゼのオマ○コって気持ちいい」

「くっ、当然でしょ。呪うわよ」

いつもの憎まれ口を叩きながらも、マルローゼは少し嬉しそうに赤面する。

「あの……、マルローゼのオマ○コ、気持ちいいから我慢できない。な、中に出していい？」

「仕方ないわね。いつでも」

顔を真っ赤にしながら、マルローゼは頷く。

「そ、それじゃ……出すよ。くっ」

逸物と膣孔が、一对の刀と鞘のように隙間なく合わさったとき、アーサーは欲望を爆破させた。

ドピユ！ ドピユ！ ドピユ！

「ひい、ひいい、ええ、奥に入ってくる。何これ、熱い。ああ」

男が射精するということを何度も見ても、膣内射精される感覚は、マルローゼの想像力を超えていたようだ。

動揺を隠しきれない慌てた声を出し、やがて顔を真っ赤にして身を固くする。

いわゆる絶頂ではないが、膣内射精される気持ちよさは、否応なく体験しているようであった。

やがて射精が終わると、マルローゼは安堵したように溜め息をつく。

「ふう〜」

その背をベラが抱き締めた。

「よかったわね。好きな男のおちんちんを食べられて♪」

「単なる好奇心でやっただけです。変なことを言うと、副団長でも呪います」

「はいはい」



ペラは肩を竦める。

「それじゃ、そろそろ交代して」

「え、まだやるんですか？」

驚くアーサーに、ペラもまた驚いた表情を作ってみせる。

「あれ、もう終えるつもりだったの？」

あたりまえに聞かれて、アーサーは冷や汗を流す。

そして、決然と頷いた。

「まだまだ、できます」

「そうこなくっちゃ」

そこにシエスタが割って入った。

「ちよつと待ちなさい。わたしはまだ中に出してもらってないわよ」

「あんた、オマ○コ裂けて死んでいたんじゃないの？」

「もう治ったわよ」

揶揄されたシエスタは、ムキになって叫ぶ。

「まあ、いいか。それじゃ、三人で代わりばんこに楽しませよう」

かくしてペラとマルローゼとシエスタの三人と、アーサーは乱交をすることになってしまった。

今度は手鎖を外してもらって、アーサーも積極的に三人の美女美少女相手に大暴れする。

(三人と同時にやれるなんて、幸せ♪)

アーサーが一番好きなのは、オクタヴィアである。そのことは幼少のころから身も心も実感している。

しかし、この三人も嫌いなわけではない。目の前の女性との情交に溺れてしまうのは、悪い癖と言うべきであろう。

「三人とも徹底的にイかせてあげます。三人とも明日は足腰は立たなくて、戦力にならないですけど、いいですね」

いままで学んだテクニックを総動員して、アーサーは三人の痴女を立て続けにイかせまくった。

「ひいあああ!!!」

三匹の牝猫の上げる嬌声を聞きながら、アーサーが思いっきり調子に乗っていたときである。

部屋の扉が開いた。

※

「あの……アーサー、さつきは言いすぎた。わたしはおまえのことが可愛くて、可愛さ余って憎さ百倍というか、おまえさえ反省しているというなら、浮気の一回ぐらい許してやっても……」

室内にオクタヴィアが入ってきた。

「あ……?」

思わずアーサーは硬直した。

青水晶の瞳に映ったもの。

それはベラ、シエスタ、マルローゼの三人を並べて、三つの穴を交互に嬉々として逸物を叩き込んでいるアーサーの姿である。

「すごい、アーサーくん凄い。ベラお姉さんはもうメロメロだよ」

「アーサー、もっとよ、もっと。わたしはあなたの玩具になるわ」

「わたしをこんなふうに感じさせるだなんて、の、呪うわ」

少なくとも、そこにいたアーサーには、オクタヴィアにきつい言葉を浴びせられ落ち込んでいるようなそぶりは欠片も感じられなかったことだろう。

「へえ、三人同時なんだ。楽しそうね」

オクタヴィアはにっこりと笑った。その笑顔はとても美しかったが、同時に底冷えするような怒気があった。

「あ、あのオクタヴィア様、これは……」

「お仕事、頑張りなさいね」

ピュ——!!!

吹雪が吹いた。

少なくともアーサーの体感では。

雪女と出会ったとしても、ここまでの恐怖と冷気は感じなかつただろう。

パタン！

小さな音とともに扉が閉じる。

「オクタヴィア様くくく」

アーサーは慌てて追いかけてみようとしたが、できなかつた。

「ダメよ。どんな理由があつても、ちんぽ入れている女を途中で放り出すなんて許されることじゃないわ」

「ええ、マクスウェル家の男たるもの、ベッドを共にした女は、きっちり満足させないといけないわ」

「いまやめたら、呪うわ」

背後からベラ、シエスタ、マルローゼ。合計六本の腕に搦め捕られたのである。

「あう、あう……」

自業自得とはいえ、ショックのあまりアーサーは喘ぐことしかできない。

「こりゃ、完全に振られちゃったわね。いいの、いいの、アーサーくんのおちんぽの面倒はあたしが見るわ」

ベラの楽しいげな声に涙を飲んだアーサーだが、結局、三人の女性との同時プレイを続ける。

こうしてアーサーは、戦乙女騎士団公認、欲求不満の女騎士たちの性処理用の肉パイプ

ということになってしまった。



第六章 死のルーレット

「ドモス軍の進撃はさながら津波のようで、フレイア王国の東部戦線は一気に崩壊していきます」

山が動いた、といったところだろうか。

ドモス王国の王太子アレックスが、総勢五万とも言われる大軍を率いてフレイアの白砂の大地に降り立った。そして、怒涛の快進撃が始まったのである。

ナウシアカ軍は、この援軍という形で北のターラキア山脈を越えてきたわけだが、正直、なめていた。

適当にお茶を濁そうと思っていたのに、ドモス軍の勢いに、フレイア軍はほとんど抵抗らしい抵抗ができない有り様だと知って、オクタヴィアらナウシアカ軍の幹部たちは慌てた。

軍議の席で、戦乙女騎士団の副将ペラが口を開く。

「このままフレイア王国が滅ぶ前に、あたしらも城の一つぐらいは落としておかないと格好がつかないわね」

戦乙女騎士団というより、ナウシアカ王国きつてのタカ派の意見に、一応、理性派で知られたシエスタも同調する。

「ことはもはや戦術や戦略でなく、政治の問題になったわ。このまま手をこまねいて、ドモス王国にフレイア王国が滅ぼされたのでは、戦後、我々の立場がなくなる。ここは多少の犠牲は覚悟で総攻めするしかありません」

もつとも信頼する側近二人の意見を入れて、オクタヴィアは頷いた。

「ただちにガルータ城の攻略を開始する。総員、総攻めの準備にかかれ」
「はっ」

被害を度外視した力攻めを開始することに、オクタヴィアを補佐すべき歴戦の將軍たちも異存はなかった。

もはや、戦略を語る時期は逸した。もたもたしていたら、ドモス王国の心証を害して、新たな標的にされかねない。敵は目の前の城ではないのだ。

みなが一刻を争って動き出した中、末席にあったアーサーが進み出た。

「恐れながら申し上げます。先鋒はそれがしにお任せください！」
ざわ……。

活気づいていた軍議の席に、いささか水が差されたような雰囲気になる。

オクタヴィアとアーサーの痴情のもつれは、もはやナウシアカ軍に知らぬ者としてないほどこに有名事件であろう。

「ふむ」

周囲の好奇な視線に晒されながら、オクタヴィアは思案顔になる。

先鋒というのは、一番死傷する可能性が高いものだ。

人間誰も死ぬのは嫌だから、先鋒なんてやりたがらない。やりたがらないからこそ、名誉なことなのだ。

そして戦闘の様相は、先鋒の活躍如何いかんによって大きく変わる。

「それがし若輩なれど、先陣を駆け、見事討ち死にしてご覧に入れます」

これはいわば、言葉のあやだ。死ぬと言つても、死ぬ気で働く、という意味だ。

もちろん、ここで死んでも悔いはない。死ぬに値する戦場だ、と判断した。

とはいえ、シエスタは血相を変える。

「ちよ、ちよつと、アーサー、何言つてるうぐつ!？」

弟のことになると理性を失う困った義姉の口元を、背後からペラが押さえた。

「はいはい。弟が男を上げようつとときに水を差さない」

そんな小さな騒動を他所に、オクタヴィアとアーサーの目が正対し、やがてオクタヴィアは小さく吐息をついた。

「ふう……よかろう。そこまでの覚悟ならば先陣を任せた。見事、死んでこい」

「ありがたき幸せ」

アーサーは勇躍、出撃の準備にかかった。

※

「先陣は武人の誉れである。だから、ぼくは先頭に立って死のうと思う」

アーサーは郎党を前に宣言した。

「悪いが、みなたちの命はぼくがもらう。命が惜しい者は申し出てくれ」
ゴクリ……。

若い上司の悲壮な決意を聞いて、郎党はさすがに生唾を飲んだ。

そこに軍服を肩にかけたシエスタが颯爽と進み出て口を開く。

「いい、あなたたち、ここがマクスウェル家の家運の分かれ道よ。もし、アーサーを含めて全滅しても、遺族にはわたしが必ず報いる。子供がいるなら子供を取りたてるし、子供がいなければ弟を、それもないければ草の根分けても親類縁者を捜してきつと取りたてる。マクスウェル家は忠義の士には絶対に報いる。だから安心して死になさい」

一見、おっかない女であるシエスタだが、血の繋がらない弟であるアーサーを猫可愛がりしていることは、一族郎党であれば周知のことである。それがここまで言うのだ。

(本気だ)

マクスウェル家の人々は本気で追い詰められ、この一戦に懸けているのだと伝わったのだろう。

緊張に身を強張らせた人々は、力強く頷いた。

「おう。お家の一大事に逃げ出す者がどこにおりましようや。いまこそご当家に報いるとき、俺らの命はここを捨てどきと心得ました」

「よろしい。ならば、アーサーについていく者は、ここに署名をしなさい」

決死を誓った将兵の名簿を懐に抱いたシエスタは、肩に軍服を引っかけ、背筋を伸ばして最前線をあとにした。

それを見送ると、アーサーの郎党たちは血走った眼差しで、水杯を交わす。

総攻撃の準備に入ったナウシアカ軍の動きが活発化したように、ガルータ城内にもわか騒がしくなったようだ。

「ありや、敵さんにも東部戦線崩壊の報告が届いて、動揺しているな」

そうアドバイスをくれたのはベラだ。後方で鎮座して全軍の指揮を執るオクタヴィアに代わって、前線部隊の指揮は彼女が執る。

「兵法の基本通り、ガルータ城を三方から囲む。意図的に南門は開けておく。おそらく、大半の兵は逃げ出すだろうが、一部の兵は窮鼠ききゅうそとなる可能性がある。油断するな」

「はい」

敵を殲滅する必要はない。敵には逃げてもらえればそれでいいのだ。

言うだけ言って、他の陣営に馬を駆けさせるベラを見送ったあと、いまや遅しと突撃命令を待つアーサーの脇に、いつの間にか立っていたマルローゼが無表情にからかう。

「必死ね」

「必死だよ」

「ふん」

マルローゼは面白くなさそうに鼻を鳴らす。

先鋒を申し出たアーサーが最前線にいるのは当然として、マルローゼがここにいるのは、魔法使いだからだ。

突撃の前に矢合わせや魔法合戦といった、射撃戦を行うのが常識である。

総攻撃開始の合図まで、時間を持って余したのだろうマルローゼが、つまらない質問をし
てきた。

「オクタヴィア様のこと、まだ好きなの？」

「好きとか、嫌いじゃないよ。オクタヴィア様は主君だし……」

アーサーの言葉に、マルローゼは冷たい視線を送る。

「まあ、いいんじゃない」

「……」

微妙な空気が流れる。マルローゼが何を言いたいかわからず、アーサーは思わず横顔を見したが、マルローゼはいつものように不機嫌そうに沈黙している。

総攻撃の直前の、独特の緊張感があたりを支配していた。

（いったい、何を言いたかったのだろう？）

騎士団の肉パイプとされてから、マルローゼとも何度かエッチをしている。処女ももらった。

しかし、どうもマルローゼが何を考えているのか、いささか把握しかねる。城壁のほうを向いたまま再びマルローゼが口を開いた。

「参謀殿がしきりに言うの。あなたとわたしなら年齢も身分も釣りあうし、ぜひ嫁に来て欲しいって」

「え、えーとその、ご迷惑をおかけしてます」

自分のことを思ってくれているというのはわかるのだが、義姉さんにも困ったものだなあ、と思いつつも、アーサーとしては謝ることしかできない。

「わたしもそう思う」

「……えっ!？」

戸惑うアーサーを、チラリと横目で一瞬見たマルローゼは頬を染めながら続ける。

「あんたみたいにいろんな女のオマ○コの垢で汚れたおちんちんをした男のお嫁さんになりたい女なんて、いないと思うの。でも、どうしても、というなら、わたしがお嫁さんになつてあげてもいいよ」

手持ち無沙汰で冗談でも言っているのだろうか。

しかし、前を見ているマルローゼの頬が赤い。どうも本気っぽい。

「そりゃ、まあ……ありがたいけど」

「そう」

マルローゼは満足げに頷く。

その真意を探ろうとアーサーが口を開く前に、準備を整えたオクタヴィアが攻撃命令を下したようだ。

「魔法攻撃、始め！」

伝令が駆け回る。

「あの、マルローゼ？」

「煩い。魔法の邪魔をしたら呪うわ」

一瞬、失言したと言いたげな表情を浮かべたマルローゼは、それ以上の会話を断ち切って大魔法の予備動作に入った。

黒き四枚翼を背負った少女は、胸部の青黒い魔法宝珠を中心に魔法陣を展開する。

膨大な魔力が集まっていることが、素人目にも見て取れて、とてもではないが話しかけられる雰囲気ではない。

「深遠なる闇の奥深くに鎮座せし、漆黒の剣よ。なぎ払え！」

いつになく鋭い声とともに、マルローゼは右手を横に振るった。

「ダークレイザー。ファイヤー!!!」

少女の前から黒光りする太い光線が、空気を呑み込みながら、一直線にガルータ城の防壁に吸い込まれていく。

パリパリパリパリ!

城壁にも当然、防御魔法がかけられているのだろう。攻撃魔法とのせめぎあいが起こっている。

他の魔法使いたちも魔法を発動しているが、マルローゼほどに凄まじい魔法を発動した

者はない。

(こうして見ると、マルローゼってやっぱ天才魔法使いなんだな)

普段は地味で目立たなく、口を開くと「呪うわ」などと憎まれ口を叩いている少女だが、最年少でオクタヴィアの側近に選ばれたのは伊達ではない、ということ改めて実感した。

ドォーン!!!

凄まじい轟音とともに、城壁が焼ける。

「すげえ」

大魔法の威力に、アーサーは素直に感嘆した。

魔法を終えたマルローゼは、精根尽き果てたといった具合に膝から崩れ落ちる。

「はあ、はあ、はあ……」

「大丈夫？」

思わずその小さな身体を抱き寄せようとするアーサーを、マルローゼは叱責した。

「馬鹿。何もたまたしているの？ 呪うわよ」

「えっ!？」

「第一陣、突撃」

聞き返すアーサーのもとに、ベラの大音声が聞こえた。

ナウシアカ軍が動き始める。先鋒を賜ったマクスウェル家が遅れを取るわけにはいかない。

我に返ったアーサーは抜劍して叫ぶ。

「マクスウェル家の勇者たちよ、ぼくに続け！」

号令とともにアーサーは真つ先に飛び出し、それに遅れまじとマクスウェル家の家臣たちは続く。

「いやいや、若はおモテになる。羨ましいですな」

そんな老臣たちのからかいの言葉を聞きながら、城壁に向かう。

弓矢の有効射程に入るとみなひと固まりになって、盾を戸板のように翳し雨あられと降り注ぐ魔法や矢を防ぎつつ、慎重に城壁に近づく。

亀のように進むアーサーの後方では、マルローゼの魔法や、ベラの指揮する第二陣の弓箭隊せんたいが城壁へと攻撃を加えている。

(これが戦争だな)

今までの長い対陣。そして、一騎討ちなど遊戯に過ぎず、いま行っている戦いこそ、本物の戦争なのだ、と実感させられた。

兵士たちに人格はなく、ただ駒として動き、駒として死ぬ。親しい友人が傷付き、亡くなったとしても、それを悲しむ余地はない。

心を無にして、機械的に進むしかないのだ。

そんな決死の覚悟とは裏腹に、アーサーたちは思いの外、死傷者を増やすことなく、城壁に到達することに成功した。

「よし、梯子はしごをかける」

付き従う郎党たちが、用意していた梯子をかけるさまを見ながらアーサーは、ふと頭上を見上げた。

城壁の上に、黒き槍を片手に赤いマントを柵引かせながら、颯爽と立つ女傑がいる。

その恐れ気もない姿を憎らしく思い、ナウシアカ軍は矢を放つが、魔法障壁が強力で突破できない。

その蛮勇と喋っていい行いが、ガルータ城の将兵に勇気を与えているだろうことは疑いなかった。

「あれは……レイチェルさんっ!? いや、レイチェル！」

脳裏がカアツと熱くなるのを感じた。

主君の寵愛を受けて、この世の春を謳歌していたアーサーを地獄の底と叩き落とした悪女である。

ナウシアカ軍の陣営から脱出した彼女が、ガルータ城に入っているのは当然だ。

そして、闘将である以上は、陣頭指揮を執っていることだろう。

一度は捕らえられながらも、不死鳥のように舞い戻った彼女が、城内の兵士たちに信頼され、心よりどころになっていることは容易に想像がついた。

彼女を倒さない限り、城壁を突破できない。そんな気がした。

「よし、ぼくが行く」

「若。お待ちください」

驚く郎党たちを尻目に、アーサーは先頭に立って軽快に、梯子を登った。

もともと人望があっただろう彼女に、神秘的な箔を付けてしまったとしたら、自分の責任である。自分でケリを付けねばならない。

途中で矢玉魔法に当たるか当たらないかは、運任せだ。

（ぼくはここで死ぬ。死ぬと決意しているんだから、怖くはない）

矢が当たる。幸いよい鎧を付けていたから、弾くことはできた。

しかし、滅茶苦茶な恐怖である。アーサーは幾度も心が萎えそうになったが、ここで手柄を立てられなかったら、生きていても意味がない。

（オクタヴィア様の愛情を失い。さらに家臣としての信頼まで失うくらいなら、死んだほうがマシだ）

小便を漏らしそうな恐怖を、愚直なまでの忠義心と義務感で乗り越えたアーサーは、普段の行いがよかったのか、それとも悪魔に愛されているのか、無事に城壁の上に登ることに成功した。

「戦乙女騎士団のアーサー、一番乗り！」

高らかなアーサーの名乗りに、後方で見守っていたナウシアカ軍の兵士たちは湧く。

「推参なり小僧」

たちまち大勢の兵士に囲まれたが、アーサーに続いて城壁に登ってきた兵士たちが次々

と迎え討つ。

「若をお救いしろ！」

ガルータ城側から見れば、ついに城壁の上にまで侵入を許したのだ。必死に交戦してくる。

そんな乱戦の中、アーサーは敵の最前線の指揮官に向かって、声を限りに呼びかけた。

「レイチェル！ ぼくだ！ アーサーだ！ ぼくと闘え！」

「あら、坊やじゃない。奇遇ね」

アーサーの正体を悟ったレイチェルは、軽く目を剥いた。

「あなたのせいでぼくはっ！」

あんな手に騙された自分がバカだった、ということにはわかっているのだが、それでもやはり、騙した相手を目の当たりにすれば、抑えきれない怒りが湧く。

アーサーの血を吐くような叫びに、口元に手をやったレイチェルは冷笑を返す。

「随分と肝を舐めたようね。いい面構えになった。あたしが男にしてあげたってことね。感謝して欲しいわ」

「戯れ言を！」

激昂に捕らわれたアーサーは剣を持って突っ込んだ。

ここは戦場である。それも最激戦区と言っているいい場所だ。悠長に会話をしている余裕はない。

アーサーの一撃を、レイチエルは黒い槍で払いながら飛び下がる。ふわりと手すりの上に乗った。

「おっと、相変わらず早漏な坊やだ」

どうやらレイチエルは、どこまでもアーサーを侮るつもりらしい。

「絶対に逃がさない！」

アーサーもまた、手すりに飛び乗ると、レイチエルを追いかけた。

「あはは、その熱い想い、受け止めてあげる」

「くそ、バカにして」

人間の頭幅もないような狭い足場。城外に落ちれば、即死という絶壁だ。

非常に狭く危険な足場であったが、警沢は言っていられない。武者走りなど足場のいい

場所には、様々な雑兵ぞうひょうが溢れ返ってしまい、一騎討ちをするスペースなどないのだ。

半月前にアーサーが捕えた相手とはいえ、それが実力でのこととは両者ともに思っていない。

（挑発されている。頭に血を登らせてはダメだ。冷静にならなくては……）

ということとは頭でわかるが、心が従わない。

赤い布を晒された牛のように、アーサーは猛然と追いかけて、レイチエルはさながら闘牛士のようにヒラリヒラリとかわ躲す。

カン！　カン！　カン！

黒き槍と鉄剣が激しく打ちあう。

二人の激闘に誰も手を出さなかったのは、騎士的なロマンチズムというだけではない。上級騎士というのは、よい鎧を着て、よい魔法宝珠を持っているから強力な魔法障壁があり、一般的な雑兵の武器では手を出せないのだ。

猛然と切り込むアーサーを、いなしながら闘うレイチェル。

「あはは、あたしが憎い。憎いのね、あはは」

戦場の中での、危険な追いかっこ。それは思いの外に早く終わった。

アーサーの足が止まったのである。

「？ 何、どうしたのかしら？ 観念したの？」

「もう、いいでしょう。周りを見てください」

アーサーの言葉に、レイチェルは戸惑ったようにあたりを見渡す。

「っ!!」

レイチェルは息を呑む。

いつの間にか城壁に登ってきていたペラが、青竜円月刀を突き出して啖呵たんかを切る。

「城主エスタークは降伏したぞ。もうこの城で闘っているのはおまえ一人だ。観念しな」

「あの糞爺」

憤懣かんまんやるかたないと言いたげにレイチェルは吐き捨てた。

もともと、フレイア軍の士気は高くなかった。というよりも、いろいろと限界に達して

いたのだろうか。

東部から津波のように押し寄せ寄せるドモス軍を前に、国全体が崩壊している最中である。ガルータ城だけが士気旺盛というはずがない。

軽く呼吸を整えたアーサーは、孤立してしまった女勇者に呼びかけた。

「もう勝敗は決しました。レイチエルさん、降伏してください。あなたの身の安全はぼくが保障します」

「冗談でしょ！」

気合いを入れ直したレイチエルは、黒き槍を構えた。

「あたしもね。フレイア王国譜代の臣なんだ。国が滅びるなら最後まで付き合うよ。このあたしに降伏を求めるなんて侮辱ってもんだ。坊や、あんたとはいろいろと縁があった。討ち取って、手柄にしな」

いままで逃げながら闘っていたレイチエルが初めて、自ら斬り込んできた。

(あ、この人、死ぬ気なんだな)

祖国に殉じる。斬り死にするのも、武に生きる者にとって本懐というものだろう。

たしかにアーサーも、ナウシアカ王国が滅びるからといって、降伏することはないだろう。

相手の覚悟に美を感じたアーサーは受けて立った。

カン！

黒き槍と鉄剣が激突し、黒き槍は女の手から弾け飛んだ。クルクル回って、城外に落ちる。

無防備となった女闘士の腹部に、アーサーは剣を叩き込む。

ブン！

「ふごっ」

レイチェルは両目を見開き、口を大きく開いて涎を噴いた。身体をくの字に曲げるが、両断はされなかった。

アーサーが剣の平で打ったのだ。

腹部を打たれても、気絶することはない。代わりに激痛にのたうつことになるだけだ。

細く長い両足をプルプルと痙攣させながら、腹部を押さえたレイチェルは、切られていないことに気付いて驚いたのだろう。

「ど、どういふつもりだい？」

シャー。

眼光鋭く睨んだ顔とは裏腹に、レイチェルの過激な見せパンの中心から液体が勢いよく噴き出した。

これにはアーサーも、周りの者たちも驚いた。

戦場で糞尿を垂れ流すことなど珍しくもない。どんな豪胆な勇者とて、自らの生命の危機を実感すれば、例外ではいられないものだ。

しかし、この場合はいささか違うだろう。

女性の身体というのは、男性の身体に比べて尿道が短い。そのため我慢が利かず、失禁しやすいのだと聞いたことがある。

腹部への強い刺激で、一時的に括約筋がマヒしてしまったのだ。

レイチェルの痴態に、意図的に気付かないふりをしながらアーサーは、剣をしまった。

「死なせるのは惜しいと思いました」

「あたしに生き恥を晒せ、というのか？」

「いや、まあ、たしかに……」

アーサーとしては、腹部を打って戦闘力を奪おうとしただけで、まさか失禁を誘発させてしまう事態になるとは予想していなかった。

敵味方に鬼のように恐れられていた女が、衆人環視の中で失禁である。プライドがズタボロであろう。

申し訳ない気分でいっぱいになりながら、アーサーは口を開いた。

「レイチェルさんは、その……名器だから？」

「……えっ!？」

意表を突かれたレイチェルは、腹部を押さえたまま目を剥く。

もつといい説得方法はないか、とアーサーも思うのだが、レイチェルの事情にそれほど詳しいわけではない。

とりあえずいいところを褒めるしかないと思ったアーサーは、熱病に捕らわれたように必死に語った。

「だから、レイチエルさんのオマ○コ、凄く気持ちよかったです。あんな超絶名器の持ち主を殺すなんて、ぼくにはできません」

「……」

思いもかけない告白に、レイチエルが思考停止に陥っているところに、アーサーは手を伸ばし、レイチエルの細い顎を掴まえて上げさせると、その唇を奪った。

「おおお！」

あたりからどよめきが起こる。

「うむ、うむ、ふむ……」

短い接吻を終えたところで、至近距離で黄色い瞳を見つめながらアーサーは口を開いた。「ナウシアカ王国に仕える気がないというなら、ぼくの愛人になってください。大事にしますから」

茫然としていたレイチエルだが、やがて表情を和らげた。

「女を弱らせてから口説くだなんて、とんだ女ったらしだね」

体力的な限界に達したのだろう。レイチエルはアーサーの胸に顔を埋める。

かくして、ガルータ城とともに、フレイア王国の女闘士は、陥落した。

※

「まあ、この城を落としたことで、とりあえずドモス王国への義理は果たしたことになるだろう」

ガルータ城の戦いは、わずか半日にも満たず決着がついた。

決死の覚悟をしていたアーサー及びびに、その郎党たちになると、いささか拍子抜けな気分がしないでもなかったが、総攻めは総攻めである。

戦後は論功行賞が行われることになった。

ペラの言葉に、戦闘中はずっと後方にあつたシエスタが応じる。

「所詮は手伝い戦だからね。どうせ、この城もドモスにくれてやるつもりだし、これ以上、血を流すつもりはないわ……で、それはともかくアーサー」

「は、はい」

義姉の呼びかけに、アーサーはいささか震える声を返した。

「それってどういふことか説明してもらえろ」

「これはその、だから……」

汚名返上をしようと奮戦し、見事、先鋒の大役を果たしたアーサーが意気揚々と本陣に帰ると、その身体には、見慣れぬ生き物がへばりついていて、

すなわち、レイチエルが、わざとらしくアーサーの背中から抱きつき、その頭上には乳房などを乗せていたのだ。

なんとも説明しづらい体勢だ。

「……」

上座に鎮座していたオクタヴィアもまた、無視していたようだが、目元がピクピク痙攣している。

室内の微妙な空気の中、レイチェルが陽気に手を上げる。

「あ、あたしのことはお構いなく、あたしは単なるこの子の肉便器だから」

しかし、そんな説明で誰も納得するはずがない。

頬を引き攣らせながらオクタヴィアが口を開く。

「たしかレイチェルといったわよね。貴様とは三度目の対面になるわけだけど……」

「ああ、そうね♪」

いまさらオクタヴィアになど興味ないと言いたげなレイチェルは、アーサーの頬などを手で撫でながら面倒臭そうに応じる。

ごほん！

咳払いを一つしたオクタヴィアは、再び口を開く。

「貴様がアーサーの捕虜になった、という話は聞いたわ。一人の人間が、同じ相手の捕虜になる、という話は聞いたことがないな」

「あたしもないわ。だから、運命の赤い糸で結ばれているって確信したわけ」

皮肉たっぷりのオクタヴィアの質問に、レイチェルは艶やかに笑って応じる。

ピク！

なぜか勝利した軍の総大将は苛立ちを隠せず、捕虜となった女勇者は平然としている。

「貴様の祖国は滅びた。もはや忠義を尽くす国を失ったということだ。かくなる上はわたしが貴様の能力にあった職分を用意しよう」

「ご免こうむるわ」

あつさりとした拒否に、オクタヴィアは頬を引き攣らせる。

「ならば、祖国に殉じろ」

敗者に手を差し伸べるのは勝者の器量である。それを拒絶するのは敗者が狭量なのだ。無理強いをすることはない。アーサーは慌てて口を挟んだ。

「お待ちください」

「なんだ？」

最近はいつも不機嫌なオクタヴィアが、一段と不機嫌さを増したようである。が、尻込みしながらもアーサーは懇願した。

「その、彼女、レイチェルは得がたい人材です。ぼくが責任を持ちますから、ぜひに一命を預からせてください」

「そいつは一度、おまえの恩を裏切っているぞ！」

「前回の彼女は降伏したのではなく捕虜となっていたのです。隙があれば逃げ出し、祖国のために闘うのは、騎士として当然のこと。しかし、いまは帰るべき祖国もない身です」
アーサーの懇願に、ベラが援護してくれた。

「まあ、逃げたところで、あたしらに損があるわけではなし、アーサーの気の済むようにやらせてみるのもいいんじゃないか？」

それを受けて、しぶしぶながらオクタヴィアは折れた。

「まあいい、好きにしろ」

「ありがとうございます」

安堵したアーサーは盛大に頭を下げた。その背後からレイチェルはわざとらしいひとり言を言う。

「ああ、やっぱり女は名器に生まれるべきね。頼みもしないのに、男が命がけで助けられる」

ピクピクピク！

コメカミを痙攣させるオクタヴィアの顔を、レイチェルは顔をしげしげと見る。

それに気付いたオクタヴィアが不審そうに口を開く。

「なんだ？」

レイチェルは肩を竦めた。

「いやね。いかにも王女様で、顔もスタイルも悪くないのに、ユルマンなんだろうな、可哀想に、って思っただけよ」

「なに？」

ユルマンとは、どういう意味かとつきにわからなかったのだろうが、ニュアンス的にけな

されたということはわかったらしく、オクタヴィアは表情を強張らせた。

「いや、何ね。この坊やがさ、たった一夜限りの関係だったあたしのオマ○コが名器だったから忘れられないって、泣いて縋るわけよ。でもって、この坊やはあるたの色小姓だったわけだろ。つまり、あんたのオマ○コ、よっぽど具合が悪かったってことよ」

「……」

ギン！

ようやく意味が通じたオクタヴィアは、茫然と立ち尽くしているアーサーを一瞥した。

その眼光の凄まじさは、鈍でも叩きつけられたかのような威力があった。

陰唇の締まりが悪いなどと称されるのは、女にとって最大の侮辱と言って過言ではないだろう。

（し、死んだ。やっぱり、スケベ心なんて起こすんじゃない）

アーサーは心の底から、レイチェルを助けたことを後悔した。

何せ、助かる気がない女である。どんな罵詈雑言でも平気で口にするのは当然であろう。

顔面蒼白になっているアーサーに、オクタヴィアは静かに質問した。

「アーサー、どういうことかしら？」

追い詰められたアーサーは盛大に首を左右に振るった。

「そんなこと、ぼく言っていないません！」

心の底から無実を叫んだが、レイチェルは混ぜ返す。

「あら、あたしのオマ○コ。名器だからもつたいなくて殺せないって言ったじゃない」
「そ、それは言いましたけど……」

「何、アーサー。わたしのオマ○コ、その女より落ちるってこと？」

オクタヴィアの声は地獄の底から響いてくるかのような迫力があつた。

「名器です。オクタヴィア様のオマ○コはよく締まります。ザラザラでキュッキュツとしてぼく大好きです！」

その評価に、オクタヴィアは顔を真っ赤にして言葉を失う。

「うふふ、主君だからって無理することはないわよ。事實は事實なんだから、遠慮なく言つてあげな」

愉快げに煽るレイチェルに、見かねたシエスタが不快げに口を挟む。

「レイチェル殿。わたしたちは無駄な血を流すつもりはないけど、無制限に寛大だと思つてもらつては困る」

「うふふ、それじゃ質問。その坊や、この間、あたし相手に何発出したと思う？」

レイチェルの質問に一同は顔を見合わせた。ややあつてアーサーの顔を見ながらオクタヴィアは、躊躇いながら口を開く。

「……さ、三発ぐらいかな。お馬鹿でスケベな子だから……」

それを受けてレイチェルは爆笑した。

「う、あはははは♪ 十発よ、十発。いくら無限の性欲のあるお年頃とはいえ、一晚に十発

もしたくなるなんて、普段、相手にしていた女が、よほどのゆるゆるオマ○コで、欲求不満だったんでしょね」

ゴゴゴゴ!!!

オクタヴィアの背中から目に見えない気炎があがった。四本の飛翔剣が並んで浮かんでいる。

それを必死に抑えながら、オクタヴィアは声を絞り出す。

「アーサー、わたし相手のときは一日で八発が限界だって泣いていたと思うけど」

「いや、あ那时候、レイチェルさんの腰使い凄くて、中断する暇がなくて。だからやったんじゃないかって、単に搾り取られただけで……」

必死に言い訳するアーサーを他所に、マルローゼが吐き捨てる。

「やっぱり最低。呪われるといいわ」

周囲の女性たちの視線は、針のように鋭くなっている。

死にそうになっているアーサーとは逆に、レイチェルは楽しげに哄笑する。

「あはは、これって戦では負けただけど、女としては勝ったということよね♪」

「……」

顔面蒼白なアーサーの頬に、レイチェルは接吻する。

「仕事でセックスさせられるだなんて、最低な体験だったでしょ。それもあんな高慢ちきで、いけ好かないユルマン女を相手に、毎日頑張らなくてはいけなかったなんて同情する

わ。これからはあたしがたっぷりと尽くして慰めてあ・げ・る」

ドス！

部屋の四方の壁に、飛翔剣が深々と突き刺さった。

「ひっ！」

怯えるアーサーを他所に、ゆっくり立ち上がったオクタヴィアはおどろおどろしい声で宣言した。

「いいでしょう。その挑戦、受けて立つわ」

「な、何を……？」

戸惑うアーサーを他所に、オクタヴィアは顎で命じた。

「アーサー、その女を連れてきなさい」

怒りをあらわに歩くオクタヴィアの背に、アーサーはイヤイヤでもついていくしかない。

「うふふ、面白いことになってきたわね」

元凶であるレイチェルは、一人ニヤニヤと笑って状況を楽しんでいる。

※

「さて、ここでいいわね」

オクタヴィアが案内したのは、彼女の寝室だった。

アーサーは半月ぶりに足を踏み入れたわけだが、何も変わってはいない。

「あの……何をするつもりですか？」

「女として勝負よ」

恐る恐る質問するアーサーに、オクタヴィアは荒々しく銀砂色のマントを脱ぎ捨てた。

「わたしのほうが女として上と認めたのなら、わたしの部下になりなさい。もし貴様が勝ったら、その子をくれてあげるわ。名門マクスウェル家の正式な花嫁になれるよう、わたしは仲人してあげるわ」

「なるほど、ユルマンお嬢様があたしに張りあおうって言うのかい。面白い、受けて立ってあげる」

レイチエルもまた、黒き鎧を脱ぎだした。

みるみるうちに、アーサーの目の前で、オクタヴィアの白銀の重鎧とレイチエルの漆黒の軽鎧が取り払われた。

鎧の下にあったインナーを脱ぐと、白い下着姿と黒い下着姿があらわになる。

まずはオクタヴィアがブラジャーを取り、それに合わせてレイチエルもブラジャーを取った。

ぷるんと合計四つの巨大な乳房が現れる。

大きさは若干、レイチエルが勝る。レイチエルの乳房は釣鐘型。オクタヴィアの乳房は砲弾型である。

オクタヴィアの乳首はピンク色で、レイチエルの乳首は赤い。

(こうやって見ると違いがよくわかるなあ)

思わず見比べてしまっているアーサーを他所に、次いでショーツが脱がれる。

オクタヴィアの股間では、金色の繊毛がふわっと立毛を起こし、レイチェルの股間では、濃紫の陰毛が巻き上がる。

オクタヴィアは自らの乳房を誇示しようと、両手を持ち上げてみせた。

「厚手の鎧を着ていたから、勘違いしていたかもしれないけど、わたし、脱いでも凄い女なのよ」

「たしかにね。でも、いくら顔が綺麗で、スタイルよくても、オマ○コ緩いっていうのは、女として致命的よね」

さも同情するといった表情を作ったレイチェルもまた、両腕を上げてみせる。

二人の美女は自らの乳房を凶器であるかのように突き出してみせた。

美乳対魔乳。

どちらもスレンダーなのに乳房は大きく、女らしい凹凸に恵まれている。手足が長くて、肩幅がある。見事な逆三角ボディ。単に筋肉と脂肪のパランスがいいというだけではなく、生まれ持った骨格がすでにエロい。彫刻家が発狂して喜びそうな肉体美だ。

二人は互いの乳首を、さながら剣に見立てて斬りあう。レイチェルが質問する。

「で、オマ○コの具合のよさなんてどうやって測るつもりだい？」

「決まっているわ。アーサーに二人のオマ○コに交互に入れさせる。そして、射精したオマ○コがいいオマ○コってことよ」

「なるほど、わかりやすいわ」

憎々しげなオクタヴィアの答えを、レイチエルはあっさりと受け入れた。

二人の烈女の勝負方法を聞いてアーサーは安堵する。

（そ、それなら、オクタヴィア様のオマ○コの中で射精すればいいんだよな。よかった。簡単だ）

反則をするようでレイチエルには申し訳ない気もするが、いまのアーサーに選択の余地などない。

（それに再び、オクタヴィア様のオマ○コに入れさせてもらえるなんて夢のようだ）

オクタヴィアの身体で童貞を食べていただき、同時に処女を頂戴した。

アーサーにとっては、至福の体験である。その翌日に、レイチエルと浮気したばかりに、捨てられてしまったのだ。

（でも、あのレイチエルさんの激しい腰使い。あれは得がたい体験だった）

最愛の女性の裸体があるというのに、人生を誤らせた妖女の裸体もあるのだ。そんな光景を前に、アーサーの思考は錯乱する。

悶々とする少年の顔を見て、レイチエルは苦笑する。

「うふふ、相変わらずわかりやすい子ね」

「でも、スケベに正直なところが可愛い……」

「まあ、その気持ちは少しわかるわ」

アーサーの顔を見て、レイチェルとオクタヴィアは妙に意気投合したようである。

(え? どういうこと……)

キョトンとするアーサーを他所に、裸のお姉様二人は並んで寝台に乗った。

アーサーから見て左手にレイチェル、右手にオクタヴィア。二人は向かいあわせになり、それぞれ上に美脚を上げてみせた。

しかも、それぞれの手で自ら陰唇を開いてみせたのだ。

「さあ、いらっしやい。絶倫坊や」

「今日頑張ったご褒美として、今夜だけ色小姓に復帰させてあげるわ」

ぽっかり開いた女壺の前に、アーサーの理性は吹っ飛ぶ。

「ありがとうございます」

歓喜したアーサーは犬であったら、尻尾を盛大に振り回していただろう。

大急ぎで服を脱ぎ捨てたアーサーは、ブルンと逸物をはね上げると、わき目も振らずに美女たちの待つ寝台へと飛び込んだ。

「きゃっ」

女たちの嬌声を聞きながら、アーサーは二人の片足ずつを肩にかけて、陰唇にむしやぶりつく。

ジュルジュルジュル……。

顔を左右に振るいつつ、左のダークローズの媚肉と、右のホワイトローズの媚肉を交互

に舐める。

(見た目は違っても、味はそんなに変わらないんだよなあ)

若干、レイチェルの贅肉が厚めであり、味も濃い気がする。

オクタヴィアの淫核は包茎であり、レイチェルの陰核は仮性包茎気味だ。

「あん、もう、器用ね」

呆れるレイチェルに、オクタヴィアが答える。

「そりゃ、わたしの色小姓だったんだからね。わたしのオマ○コだったら、一日中だって平気で舐めているわよ、こいつ」

「うわっ、高潔そうな顔しながら、身近な美少年にそんなことさせていたわけか。まったくナウシアカ王国の次期女王様が聞いて呆れるわ」

そんな軽口を叩きあっている女たちの陰唇を一通り味わったアーサーは、右の人差し指と中指をオクタヴィアの膣孔に入れて掻き混ぜ、左手の人差し指と中指をレイチェルの膣孔に入れて掻き混ぜる。

「あん、そこ、そこ気持ちいい、あん」

「ひい、そこ、あん、上手い、そうそこいい」

女たちは目の前に同性がいることで、ライバル意識を刺激されるのだろう。男と一対一でやるときよりも、いい声で鳴いてくれる。

アーサーは膣孔を振るようにして、穿りながら、淫核を剥き上げて、中身を交互に舐め

弾く。

女たちはあつという間に理性を失い、室内に嬌声の二重奏が響き渡る。

「あん、もう、もう、もう、イっちゃう」

「イク、イク、イク——ッ」

一人が絶頂したことで、連鎖したらしい。オクタヴィアとレイチェルはほとんど同時に絶頂し、キユンキユンと二本の指を締めてくれた。

二人を絶頂したことに満足したアーサーは、左肩にレイチェル、右肩にオクタヴィアの足をかけたまま上体を起こし、顔を上げると口元を拭った。そして、いきり立つ逸物を構えて宣言した。

「それじゃ、そろそろ入れますよ」

「はあはあはあ、ええ、いいわよ。どちらのオマ○コが上かきっちり見極めなさい」

「せいぜい、頑張りな」

オクタヴィアとレイチェルの許可をもらったところで、アーサーは逸物をぶち込んだ。

「入れさせていただきまゝす」

まずはオクタヴィア。

ズブリ！

「あん」

アーサーの右肩に乗ったオクタヴィアの白い左足がピクンと痙攣する。

(あう、オクタヴィア様のオマ○コ、久しぶりで、すげえ気持ちいい♪)

温かく柔らかい贅肉が肉棒の隅々にまで吸いついてきて、逸物が蕩けるようだ。

本来ならこのまま思う存分に、腰を振り回したいところだが、あいにくともう一人いる。もったいない、と思いつながら泣く泣く逸物を引っこ抜くと、左隣の膣孔にぶち込む。

ズブブ!

「ああ♪」

アーサーの左肩に乗ったレイチェルの逞しい右足がビクリと痙攣する。

(おお、この吸いつきすげえ、チンポ吸い取られそう♪)

ぎゅっと締めつけてきて逸物をくびり取られそうな膣孔だ。

どっちがいい悪いではなく、どっちも気持ちいい。

(こんなの優劣なんて絶対に決められないよ。こうなったら、二人ともイかせまくって、有耶無耶うやむやにしてしまうのが一番いいよな)

二人とも気位の高いお姉様たちだが、肉体のほうはエロエロで感度抜群であることを、アーサーは承知していた。

(どんなに綺麗でカッコイイお姉さんだって、一皮剥けば牝なんだから、なんとかなるはずだ♪)

もはや女に慣れていない純粋な少年ではない。それどころか、仲間の女騎士たちに肉パ
イプ扱いされて、薄汚れてしまった魔少年だ。



だからといって女性が嫌いになったか、というところではなく、ますます好きになってしまっていた。

(この二人がトロットロに感じている姿を見てみたい)

そんな本能に突き動かされたアーサーは、二つの蜜壺を交互に行き来していたが、やがてそれだけでは満足できなくなる。

二人をうつ伏せにして、尻を突き出させるとワンワンスタイルにして、引き締まった尻を二つくつつける。

(あは、二人ともお尻の穴丸晒しだ)

綺麗なお姉さんたちのもっとも隠しておきたいだろう場所を覗き見ることに、少しだけ優越感を感じながら、アーサーは二つの膣孔を行き来した。

さらに上体をうつ伏せになると、お姉様たちの腋の下から手を入れて、外側の乳房を握って揉みしだく。

(ああ、二人ともおっぱいの揉み心地最高♪)

魔乳と美乳を手の内でたぶんたぶんと弄んだ。

若干、レイチェルのほうが大きいのが、甲乙をつけられるような代物ではない。どちらも極上品だ。

しかし、この体勢では当然、下半身を見ることはできず、二つの膣孔を交互に突くのは至難の業である。それを難なくやってみせるアーサーに、女たちは呆れる。

「ああ、まったく、無駄に器用ね♪」

「ほんとスケベなことには熱心なのよね。この情熱を兵法にでも向ければ、我が国は名將を得ることになるんだらうけど」

レイチエルとオクタヴィアに小馬鹿にされながらも、アーサーは乳房を揉みしだき、乳首を扱き上げる。

片手での刺激では物足りないかもしれないようにも思えるが、女の身体というのは左右非対称にしたほうが感じるものである。

それに隣に同性がいることで、否応なく意識してしまうのだろう。

なかなかいい具合に感じてくれていた手ごたえが、アーサーにはあった。

「ぼくはもう、あのころと違いますよ」

初体験と初体験翌日の女性。しかしあれから、ベラ、シエスタ、マルローゼ。そして、欲求不満な女騎士のみなさんの性処理役をしていたのだ。女性を楽しませるための自信はついていた。

二つの美体が、十分に火照ったところを見澄まして、アーサーは両手を下半身に下ろしていく。

そして、ふさふさの陰毛を掻きむしり、男女の結合部の先、肉裂の先端の突起を抓む。

「ひいあ♪」

美しい牝猫の悲鳴が綺麗にかぶった。

アーサーは剥き出しの陰核を引っ張り回しながら、クリクリと捏ね回してやった。
「ああ、あああ……」

二人ともぷっくり膨らんでしまった女の急所を責められて、身を強張らせている。膣孔の奥から熱い液体がトプトプと溢れ、逸物をキュッキュと締めてくる。

（あはっ、二人ともやっぱり敏感だな。もうイっちゃうんだ。でも、ここでぼくが出したらダメだ。もっともっと我慢する。そして、最後にどうしても我慢できなくなったときは、オクタヴィア様のオマ○コの中に出せばいいんだから、楽勝♪）

そんな安易な考えとともにアーサーは美しき牝猫たちの絶頂痙攣を堪能しつつ、逸物をゆっくりと交互に入れる。

やがて二人仲良く、上体を潰して、お尻だけ高く翳した卑猥なポーズで脱力した。

「はあ……、はあ……、はあ……」

二人とも膣孔がヒクヒクと開閉している。どちらも絶頂はしても、同時に欲求不満のようだ。

女の身体というのは、膣内射精されたときこそ、本当の満足と安らぎを得られるものであり、ただ一方的にイカされるだけだと、焦燥感が募るようだ。

そんな美しき牝騎士たちの卑猥な尻を撫で回しながら、アーサーはからかいの言葉を浴びせる。

「あれ、二人とももうイっちゃたんですか？ だらしないな」



「くっ」

二人とも悔しげだが、絶頂直後だけに身体が思うように動かせないのだろう。調子に乗ったアーサーは、淫核から指を離れた指先を、交互にペロリペロリと舐めた。それから二人のお姉さんの尻の谷間から陰唇を撫で回す。

「あ、ああ、はあ……♪」

女の身体というのは男と違い、絶頂直後に優しく触れるのを後戯といって、気持ちいいものらしい。

アーサーは二人の息が吐かれたところを見澄ます。

（よし、いまだ……）

アーサーの中指が、無防備に丸晒しになっていた蕾を貫いた。

「あひっ」

「ちよ、ちよっと、どこに指を入れているの？」

慌てる女たちの肛門を穿りながら、アーサーは嘯く。

「女騎士はアナルが弱いつて噂があるみたいなんですよ。お二人の綺麗なアナルを見ていたら、試してみたくなくなっちゃって♪」

「や、やめなさい。そこは汚いから」

「ひいいい!!!」

肛門に深々と指を入れられた美女たちの全身からは、滝のような汗が噴き出している。

羞恥と屈辱。そして、快感が混じりあっているのが見て取れる。

「あれ？ お二人とも、肛門は初めてなんですか？」

「あたりまえでしょ」

オクタヴィアは即座に答える。それはアーサーでも予想できたことだ。

「レイチェルさんも？」

「さすがにないわ」

「そうなんだ」

淫乱お姉様にも初めてのところがあつたという事実には、アーサーは嬉しくなってしまうた。

（ぼくがレイチェルさんのアナルセックスの初めての相手になっちゃおう♪）

しかし、そのためにはじっくりとほぐさねばなるまい。

いまは二人とも、指一本を入れただけでもきつい感覚だ。

とてもではないが、逸物を入れることはできそうもない。そこで親指を伸ばして膣孔に入れた。

そして、膣孔に入れた親指と肛門に入れた人差し指の腹で、狭間の肉壁を揉みしだく。

「はあひいいいい……」

真面目で責任感の強いお姉様と、悪かつこよかつたお姉様の口元がだらしなく緩んで、舌を出す。

まさに絵に描いたようなアへ顔だ。

(あは♪ 二人ともこんなエッチな顔しちゃってまあ)

オクタヴィアとレイチェル。二人をよく知る人だつて知らない表情だ。彼女たちと寝台を共にして、そして、思いつきり感じさせた男だけが見ることのできる、特典だ。

すなわち、自分しか見ることのできない表情である。

「女の人って、これをやられるとたまらないみたいですね♪」

年上ぶつて偉そうなお姉様たちが、だらしないアへ顔を晒すのをアーサーは堪能していたとき、背後で地獄の門が開いた。

※

「アーサー。面白いことをやっているわね。あたしたちも参加させてもらっていいかしら？」

蓮っ葉なお姉様の笑い声に、アーサーの背中がびくりと震える。

恐る恐る振り向けば案の定、ベラが腕組みしている。

その横では、赤縁眼鏡のシエスタは満足そうに頷く。

「さすがは我が家の跡取り息子だわ。気難しい女たちをすっかり牝犬に調教しちゃつて、お姉さんは嬉しいわ」

「あははっ」

オクタヴィアとレイチェルの尻に指を入れたままアーサーは、乾いた笑みを浮かべた。

現在のアーサーは、彼女たちに下賜され、文字通り肉パイプとして使われていた。彼女たちのおかげで女の生態はわかった。それは同時に、絶対に逆らえないトラウマを植えつけられていたのである。

最後にマルローゼがいつになくどんよりとした怨念を背負った姿で宣言した。

「呪われてモゲるといいわ」

「あ……」

戦の始まる前、マルローゼと結婚の約束をしたことを、すっかり忘れていた。

（怒っている。これは怒っている。絶対に怒っている）

その怒りをどうやって鎮めるかと思案しているうちに、マルローゼのほうが進んだ。

「所詮、あなたはいろんな女のオマ○コの垢塗れになっているのがお似合いよ。相応しい待遇をしてあげる」

そう宣言したマルローゼは、寝台に乗ってくると、アーサーの背後に四つん這いとなり、尻の谷間に顔を突っ込んできた。そして肛門を舐めながら、両手を前に回して、二種類の愛液を浴びてドロドロになっている逸物を掴み、シコシコと扱きだしたのだ。

「ちよ、ちよつと、ひいあん♪」

肛門を舐められたアーサーは身悶えるが、左右の手はオクタヴィアとレイチェルの股間に嵌まっているから逃げようがない。

「あらあら、マルローゼだったら、いつになく積極的ね」

「やっとうちの弟の嫁になってくれる決意がついたのかしら？」

嬉しそうなシエスタの感想に、アーサーの尻に顔を突っ込んだままマルローゼは吐き捨てる。

「なりません」

にべもない返答にがつくりと肩を落としたシエスタは、服を脱ぎ、寝台に乗ってくると、アーサーの左側面から抱きついてきた。

ムチムチの爆乳が押しつけられる。

「もう、うちの弟、可愛いと思うんだけどなあ。オクタヴィアにも、マルローゼにも振られちゃって。何がいけないのかしら？」

シエスタとは反対側から、同じく裸になったペラが、弾力感たっぷりの巨乳を押しつけてきた。

「大丈夫。アーサーの嫁の心配はないわよ。あたしがなつてあげるから。お義姉さん♪」

「あんたみたいなあばずれにくれてやるくらいなら、わたしがもらうわよ」

アーサーの顔を挟んで、ペラとシエスタが火花を散らす。

「い、義姉さん♪」

思いがけない告白に驚くアーサーに、眼鏡越しにジト目を向けられる。

「何よ。お姉ちゃんだと不満だというの？ わたしたちに血の繋がりは無いのよ。それはちよつと年上だけど、年上の女房は金の草鞋わらじを履いてでも捜せっていうでしょ。だいたい

わたしほど、マクスウェル家のことに精通している女はない。……あら？ 考えてみると、わたしほど嫁に相応しい女はいないわね」

「そ、それは……」

言葉に詰まるアーサーの右頬から、ペラが呆れる。

「完全に開き直ったわね。この行き遅れ女」

「なんですって！」

シエスタは頭から角が出そうな勢いで叫ぶ。

アーサーの周囲には柔らかく、いい匂いのする柔肌がたくさんあるのに、なぜか生きた心地がしない。

溜め息をつくアーサーに、気を取り直したペラが質問する。

「ところで、アーサー。誰のオマ○コが一番気持ちいいか、決める勝負ですって」

「ええ」

アーサーは戸惑いながらも頷く。

「面白い。あたしも参加するわ。誰のオマ○コで射精するかで、アーサーの嫁を決めるっていうのでいいわね」

「ふざけないでちょうだい。そんなんで栄光あるマクスウェル家の嫁を決められてはかなわないわ」

激怒するシエスタに、ペラは気の毒そうな表情を作る。

「あら、逃げるの。女も三十路が近くなってくると、オマ○コの締まりに自信が持てなくなるんでしょね」

「あんただって似たような年齢でしようが！」

「あたしはデスクワーク専門と違って、鍛え方が違うからね
ぶちん。」

シエスタの中で何か切れたらしい。勢い込んで叫んだ。

「いいわよ。受けて立つわ」

「そうこなくちや」

莞爾^{かんじ}と笑ったペラは、アーサーを背後から抱き締めて仰向けになった。

「マルローゼ、なんかいろいろ溜まっているみたいだし、あんたからいきなさい。ストレス解消に思いっきり腰使っちゃうといいわ」

「うん」

素直に頷いたマルローゼは、黒い四つ羽根の生えた衣装を脱ぐと、アーサーの腰の上に跨がってきた。

「入れる」

濡れ光り、いきり立つ逸物が、陰毛すら満足に生えていない幼い女体に呑み込まれていく。

「あう。それじゃ、モギ取る」

ズコ、ズコ、ズコ……。

まだまだ発育途上の肉体が、上下に動く。

「はう」

身体が小さいだけあって膣孔も狭く、褻のザラザラも多い。

先ほどオクタヴィアとレイチェルの膣孔で高まったあとだけに、いまにも射精しそうだ。もつとも激しく腰を使えば、当然女の身にも返ってくるわけで、マルローゼは顔を真っ赤にして、荒い息をしている。

（やっぱ、マルローゼ可愛いな。周りがみんな巨乳だから、手のひらサイズのおっぱいが目立つというか、ぼくが大きくしてあげたいというか）

同じ歳の少女の必死の荒腰に魅入るアーサーの腹部に、自らの胸を置きながらシエスタが質問してきた。

「ねえ、ねえ、やっぱりマルローゼとなんかあったでしょ。この子がこんなにムキになっているところを初めて見ちゃった」

「……」

押し黙るアーサーの顔を意味ありげに見たペラは、肩を竦める。

「まあ、男と女。いろいろ詮索するのは野暮よ。それよりも、これかぶんなさい」

頭から何かを被らされて視界を塞がれる。それが女性のショーツだと気付いたのはのちのことだ。

「誰かわかったら、面白くないでしょ。キミは好みのオマ○コの中で、気持ちよく射精すればいいの」

「え、それは……」

最終的にはオクタヴィアの膣内で射精すれば、万事丸く収まると思っていたアーサーは慌てる。

「あん、あん、あん、あん、あああ——!!!」

ピクンピクンと狭い膣孔が痙攣した。

どうやらマルローゼが絶頂したようだ。アーサーは気合いで耐えきる。

そして、一旦温かい肉洞から出た肉棒に、新たな肉洞が嵌まる。

（こ、これは誰のオマ○コだ。えーと、マルローゼのオマ○コはこうザラザラしていて狭い、シエスタ義姉さんのオマ○コは褻が多くて、ベラ様のオマ○コはキュッキュツと締まる。あれ、レイチエルさんのオマ○コもキュッキュツと締まるよな。待て待て、ベラ様はいま背後に、あれ？ 一瞬、離れなかったか？ おっぱいが柔らかくなっているような）

視界を塞がれたアーサーは疑心暗鬼に陥る。

いつしか指から力が抜けて、オクタヴィアとレイチエルは自由の身になったようだ。

レイチエルの呆れた声が聞こえてくる。

「あんたたちさ。いつもこんなことしているわけ？」

返事をしたのはベラのようなようだ。



「まあね。こいつドスベで可愛いでしょ。嫁になるかはともかくとして、まだ当分は楽
しませてもらおうつもりよ」

「まったく、うちの跡取り息子をなんだと思っっているのかしら」

「まあまあ、美少年は国家の宝だわ。独占なんかせずに、みんなの共有財産にしておくの
がいいのよ。なあ、マルローゼ」

「うん。呪われるといいと思う」

そんなのんきな女たちの会話を聞きながら、アーサーは必死だ。

誰かが騎乗位で腰を振るっている。周りにいる女たちは手持ち無沙汰なのだろう。アー
サーの背後から抱き締めたり、乳首や玉袋、足の指などを舐めたり撫でたりしている。

（気持ちいい。でも、怖くて射精できない）

女に慣れたとはいっても所詮はまだまだ幼い肉体。そうそう我慢が利くものではない。

次々と新しい女が乗ってきて、絶頂痙攣をしていく。それを一本の肉棒は、必死に耐え
るのだ。気も狂わんばかりの快感に弄ばれたアーサーは身悶える。

五分の一の、恐ろしすぎるロシアンレット。アーサーはついに爆発させた。

「あ———!!!」

ドクンドクンドクン！

溜めに溜めた牡の原液が、二つの睾丸から溢れ出し、肉棒を駆け上がっていく。そして、
誰かの膣孔に噴き出した。

「あああ!!!」

女の歡喜の悲鳴が聞こえる。魂の抜けるような快感に襲われているアーサーは、それが誰のものとも判別できない。

「よくやった。アーサー。さすがはわたしの色小姓だ」

顔を覆っていたショーツが抜き取られ、一気に視界が開かれた。

そこには歡喜の表情を浮かべたオクタヴィアの顔がある。

「はあ、はあ、はあ……オクタヴィア様」

「やはり、おまえはわたしのものなんだな」

「はい。ぼくはオクタヴィア様の騎士です」

躊躇わず頷くアーサーの唇を、オクタヴィアは奪う。

（ああ、これでオクタヴィア様の色小姓に戻れる）

至福に浸るアーサーの上から、オクタヴィアは事務的に他の女たちにどけられる。

「はいはい。次がつかえているからどいたどいた」

射精したばかりの逸物は、女たちに啜えられて無理やり再勃起させられる。それを見てペラが楽しげに提案した。

「どうせだから、このまま誰が一番ユルマンか、決めちゃおうか？」

「ウソ……」

怯えるアーサーに関わりなく、休みなく、五人の女による死のルーレットは続けられた。

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)



特設サイトはこちらからアクセス!!



<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元ドリームノベルズは18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとられないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

二次元ドリーム文庫286
ハーレムヴァルキリー
【電子書籍版】

著 者
竹内けん

装 丁
マイクロハウス

発 行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコビル1F
●編集部 TEL.03-3551-6147 / FAX.03-3551-6146
●販売部 TEL.03-3555-3431 / FAX.03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、
ホームページ上に転載することを禁止します。
本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。
また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©Ken Takeuti 2014
当ファイルは、二次元ドリーム文庫『ハーレムヴァルキリー』
(2014年2月22日 初版発行)に基づいて作成しております。

<http://ktcom.jp/>